岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第105集

田余内Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

㈶岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

田余内Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,000以上に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化財を保護し、保存していくことは県民に課せられた重大な責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう交通網の整備も重要な一施策であります。特に東北縦貫自動車道の建設は、産業経済開発の大動脈として多方面からの期待を担うものであります。

このような埋蔵文化財の保護・保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

東北縦貫自動車道八戸線に関連する遺跡は、安代町から青森県境まで53遺跡があり、浄法寺町所在の14遺跡については昭和59年から昭和60年にかけてすべての野外調査を終了しました。発掘調査によって出土した資料の整理及び報告書の作成は、これまで6遺跡について4分冊の発掘調査報告書として刊行してまいりました。

本報告の田余内Ⅰ・Ⅱ遺跡は、浄法寺町南西部の丘陵縁辺部に立地し、昭和60年の発掘調査によって縄文時代の陥し穴状遺構と平安時代の竪穴住居跡が発見されました。ひき続き出土資料の整理をすすめ、調査報告書として発刊するはこびになりました。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御援助、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、浄法寺町、浄法寺町教育委員会をはじめ、関係各位に衷心より謝意を表します。

昭和61年6月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　中　村　　直

例　　言

1．本報告書は、岩手県二戸郡浄法寺町大字駒ヶ嶺字田余内地内に所在する田余内Ⅰ・田余内Ⅱ遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴う記録保存を目的とした緊急発掘調査である。調査は日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．本遺跡の岩手県遺跡登録台帳の遺跡番号と調査の略号は次のとおりである。

田余内Ⅰ遺跡	遺跡番号　ＪＥ46－0087	遺跡略号　ＴＹⅠ－85
田余内Ⅱ遺跡	遺跡番号　ＪＥ46－0099	遺跡略号　ＴＹⅡ－85

4．発掘調査に際しては浄法寺町、浄法寺教育委員会の御協力をいただいた。

5．分析、鑑定は次の方々に依頼した。（敬称略）

火山灰の螢光Ｘ線分析	三述　利一	（奈良教育大学教授）
石質鑑定	佐藤　二郎	（佐藤地質工学研究所）
樹種鑑定	早坂松次郎	（岩手県木炭協会）

6．発掘調査及び室内整理にあたり、次の方から指導・助言をいただいた。（敬称略）

中村　　裕　　（浄法寺教育委員会）

7．本報告書の執筆分担は次のとおりである。

Ⅰ　調査に至る経過	近藤　宗光
Ⅱ　遺跡の位置と環境	石川　長喜
Ⅲ　調査の方法と室内整理	渡辺　洋一
田余内Ⅰ遺跡	
平安時代の遺構と遺物	石川　長喜
縄文・弥生時代・中近世等の遺構と遺物	渡辺　洋一
まとめ	石川　長喜　渡辺　洋一
田余内Ⅱ遺跡	
調査の結果	渡辺　洋一
まとめ	渡辺　洋一

8．調査の諸記録と遺物は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　　次

序

例言

本文

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　遺跡の位置と環境……3

1．遺跡の位置……3

2．遺跡の環境……3

Ⅲ　調査の方法と室内整理……10

1．野外調査……10

2．室内整理……11

田余内Ⅰ遺跡

Ⅰ　検出遺構と出土遺物……17

1．竪穴住居跡……17

2．土壙……34

3．炭窯跡……34

4．陥し穴状遺構……35

Ⅱ　遺構外出土の遺物……45

1．平安時代の遺物……45

2．縄文・弥生時代・中・近世の遺物…45

Ⅲ　まとめ……61

1．竪穴住居跡……62

2．陥し穴状遺構……66

田余内Ⅱ遺跡

Ⅰ　調査の結果……73

Ⅱ　まとめ……73

図　版　目　次

第1図　遺跡位置図……2

第2図　周辺の地形図……4

第3図　地形分類図……5

第4図　基本層序模式図……6

第5図　遺跡分布図……8

第6図　田余内Ⅰ遺跡遺構配置図……15

第7図　ⅠC3竪穴住居跡 (1) ……18

第8図　ⅠC3竪穴住居跡 (2) ……19

第9図　ⅠC3竪穴住居跡出土遺物 (1) …21

第10図　ⅠC3竪穴住居跡出土遺物 (2) …22

第11図　ⅠH8竪穴住居跡 (1) ……23

第12図　ⅠH8竪穴住居跡 (2) ……24

第13図　ⅠH8竪穴住居跡出土遺物……26

第14図　ⅠJ7竪穴住居跡 (1) ……28

第15図　ⅠJ7竪穴住居跡 (2) ……29

第16図　ⅠJ7竪穴住居跡出土遺物 (1) …32

第17図　ⅠJ7竪穴住居跡出土遺物 (2) …33

第18図　ⅠJ7竪穴住居跡出土遺物 (3) …34

第19図　ⅠB8土壙……34

第20図　ⅡB3炭窯跡……35

第21図　陥し穴状遺構 (1) ……36

第22図　陥し穴状遺構 (2) ……39

第23図　陥し穴状遺構 (3) ……41

第24図　陥し穴状遺構 (4) ……43

第25図　陥し穴状遺構 (5) ……44

第26図　遺構外出土の遺物
（土師器・須恵器）……46

第27図　遺構外出土の遺物（縄文土器1）…49

第28図　遺構外出土の遺物(縄文土器２)…51
第29図　遺構外出土の遺物
（縄文土器３・弥生土器）……53
第30図　遺構外出土の遺物(石器)……55
第31図　遺構外出土の遺物(石器２)……56
第32図　遺構外出土の遺物(石器３)……58
第33図　遺構外出土の遺物(石器４)……59
第34図　古銭……60
第35図　竪穴住居跡出土土器分布図……65
第36図　調査区域図……73

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧表……9
第２表　古銭一覧表……60
第３表　陥し穴状遺構一覧表……68
第４表　石器一覧表……69

写真図版目次

写真図版１　遺跡の全景……77
写真図版２　調査区全景……78
写真図版３　調査状況……79
写真図版４　ＩＣ３竪穴住居跡……80
写真図版５　ＩＣ３・ＩＨ８竪穴住居跡…81
写真図版６　ＩＨ８竪穴住居跡……82
写真図版７　ＩＪ７竪穴住居跡 (1) ……83
写真図版８　ＩＪ７竪穴住居跡 (2) ……84
写真図版９　ＩＪ７竪穴住居跡 (3) ……85
写真図版10　土壙・炭窯跡……86
写真図版11　陥し穴状遺構(円筒状)……87
写真図版12　陥し穴状遺構(溝状１)……88
写真図版13　陥し穴状遺構(溝状２)……89
写真図版14　陥し穴状遺構(溝状３)……90
写真図版15　ＩＣ３竪穴住居跡出土遺物…91
写真図版16　ＩＣ３・ＩＨ８竪穴住居跡
出土遺物……92
写真図版17　ＩＨ８・ＩＪ７竪穴住居跡
出土遺物……93
写真図版18　ＩＪ７竪穴住居跡出土
遺物 (1) ……94
写真図版19　ＩＪ７竪穴住居跡出土
遺物 (2) ……95
写真図版20　遺構外出土の遺物
(土師器・須恵器)……96
写真図版21　遺構外出土の遺物
(縄文土器１)……97
写真図版22　遺構外出土の遺物
(縄文土器２)……98
写真図版23　遺構外出土の遺物
(縄文土器３)……99
写真図版24　遺構外出土の遺物
(縄文土器４・古銭) ……100
写真図版25　遺構外出土の遺物(石器) …101
写真図版26　遺構外出土の遺物(石器２) 102
写真図版27　遺構外出土の遺物(石器３) 103
写真図版28　遺構外出土の遺物(石品４) 104
写真図版29　遺構外出土の遺物(石器５) 105

Ⅰ　調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は二戸郡安代町から青森線を分岐し、浄法寺町、二戸市、一戸町、九戸村、軽米町を経て青森県八戸市に至る延長68kmの高速自動車道である。このうち、本県にかかる第７次及び第８次施行命令区間は54.3kmであり、一戸インターチェンジ以北の第７次施行命令区間に所在する遺跡の発掘調査は昭和58年までに終了している。

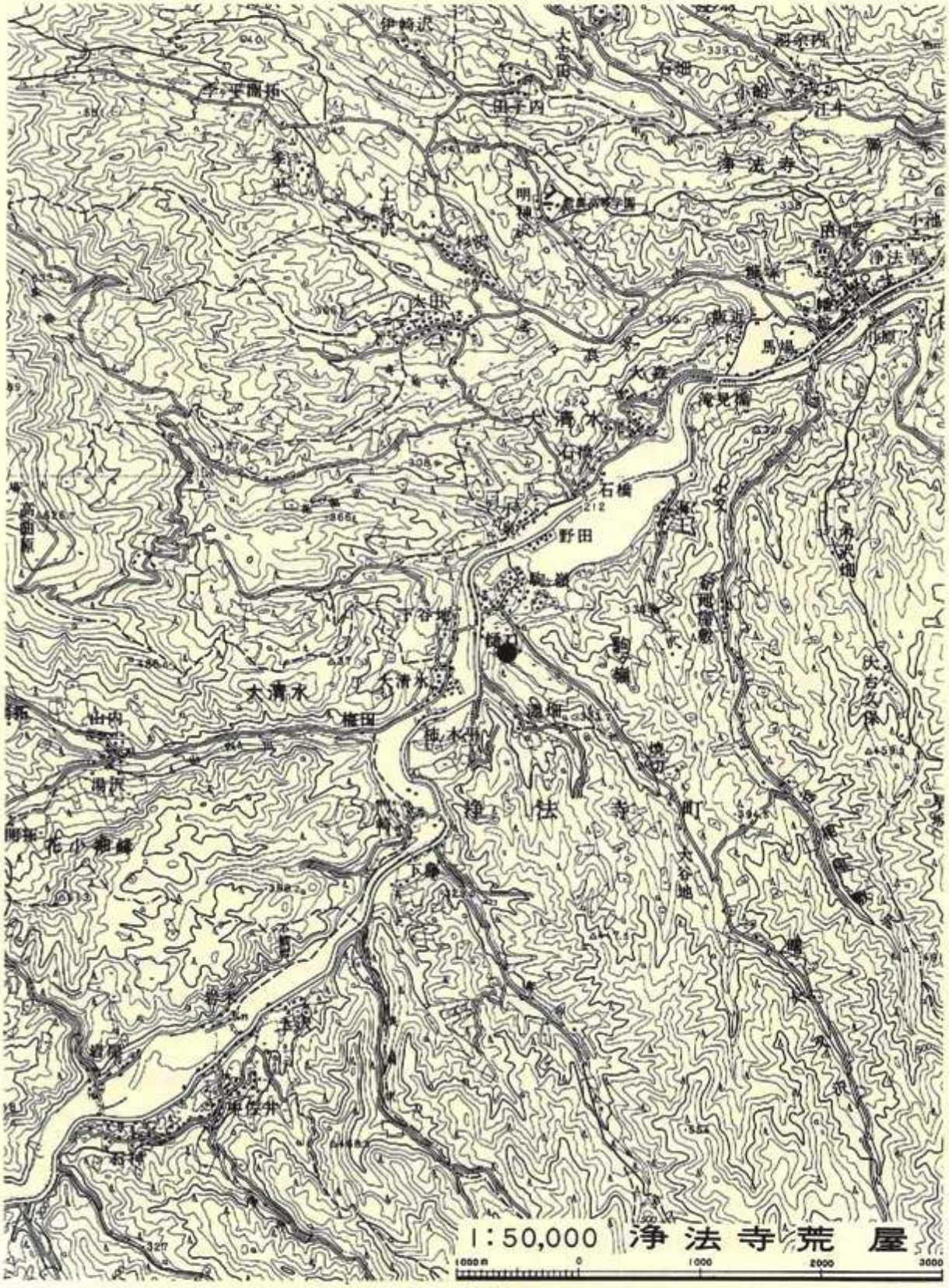
二戸郡安代町から浄法寺町、二戸市、一戸町に至る27.6kmは、昭和53年11月に第８次施行命令区間となり、岩手県教育委員会はこの間に所在する埋蔵文化財包蔵地について日本道路公団と協議を重ねた。その結果、浄法寺町に所在する天台宗の古刹である天台寺及びその周辺の地域が天台寺緑地保全区域に指定されていることから、路線はこれを避けて設定されることとなった。

昭和54年10月、岩手県教育委員会文化課は日本道路公団の協力を得て、実施計画路線に沿った幅500ｍについて埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、さらに両者で協議を行った。ついで昭和56年５月に路線が公表されたことに伴い文化課によって道路用地内の分布調査が実施され、約30遺跡が確認された。翌57年には安代町所在の５遺跡について発掘調査範囲の確認が行われた。

昭和58年、安代町に所在する遺跡の発掘調査が文化課の調整を経て当埋蔵文化財センターに委託された。湯の沢Ⅲ、繋沢Ⅱ、石神Ⅱ、関沢口遺跡の４遺跡であるが、関沢口遺跡は粗掘遺構確認調査であり、翌年度への継続調査である。そのほか、文化課は浄法寺町所在の12遺跡について現地確認調査を実施している。

昭和59年度には、安代町の関沢口、水神の２遺跡と浄法寺町の柿ノ木平Ⅲ、五庵Ⅰ、五庵Ⅱ、海上Ⅰ、海上Ⅱ、大久保Ⅰ、沼久保、桂平、飛鳥台地Ⅰの９遺跡について発掘調査が委託された。このうち、沼久保、桂平、飛鳥台地Ⅰの３遺跡は工事用道路分の調査である。同年度に文化課は二戸市、一戸町所在の各６遺跡の発掘調査範囲を確認している。また、新たに発見された浄法寺町の五庵Ⅲ、広沖遺跡について現地確認調査が行われ、浄法寺町所在の発掘調査対象遺跡は14遺跡となった。

昭和60年度は、前年度からの継続調査となった沼久保、桂平、飛鳥台地Ⅰの３遺跡のほか、浄法寺町田余内Ⅰ、田余内Ⅱ、五庵Ⅲ、安比内Ⅰ、広沖の５遺跡と二戸市西久保、大久保の２遺跡、一戸町堀切、竹林の２遺跡、あわせて12遺跡の発掘調査が委託された。このうち、大久保遺跡は次年度への継続調査であり、二戸市、一戸町所在遺跡のうち、終了した西久保遺跡を除いた10遺跡とともに61年度の調査となった。


1:50,000
浄法寺荒屋
1000m
0
1000
2000
3000
浄法寺
大清水
石橋
野田
駒ノ橋
下谷地
梅田
柿木平
上野
上沢
東佐井
馬場
滝見橋
大谷地
町

第1図　遺跡位置図

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置（第１図）

田余内Ⅰ遺跡は浄法寺町役場の南西約４km、町立大嶺小中学校の南0.5kmに位置する。浄法寺町は岩手県の北西部にあり、北は青森県田子町、北東は二戸市、南東は一戸町、そして南・西には安代町が接している。また、浄法寺町は明治22年に浄法寺村、駒ヶ嶺村、大清水村、漆沢村、御山村の５か村が合併して浄法寺村となり、昭和15年に町制施行によって誕生した町である。

遺跡への道順は、主要地方道二戸・安代線を浄法寺町方面に向かって大嶺小中学校の前を右折し、駒ヶ嶺公民館前を右折する。さらに大又沢を渡って左折し、沢に沿って約 250m を進んだ右手が田余内Ⅱ遺跡であり、田余内Ⅰ遺跡はその西側の段丘崖上である。

国土地理院発行の５万分の１地形図では「荒屋」（ＮＫ－54－18－16）の図幅に、２万５千分の１地形図では「駒ヶ嶺」（ＮＫ－54－18－16－１）の図幅に含まれ、５千分の１国土基本図ではＪＥ46に含まれている。北緯40°09′、東経141°07′付近である。

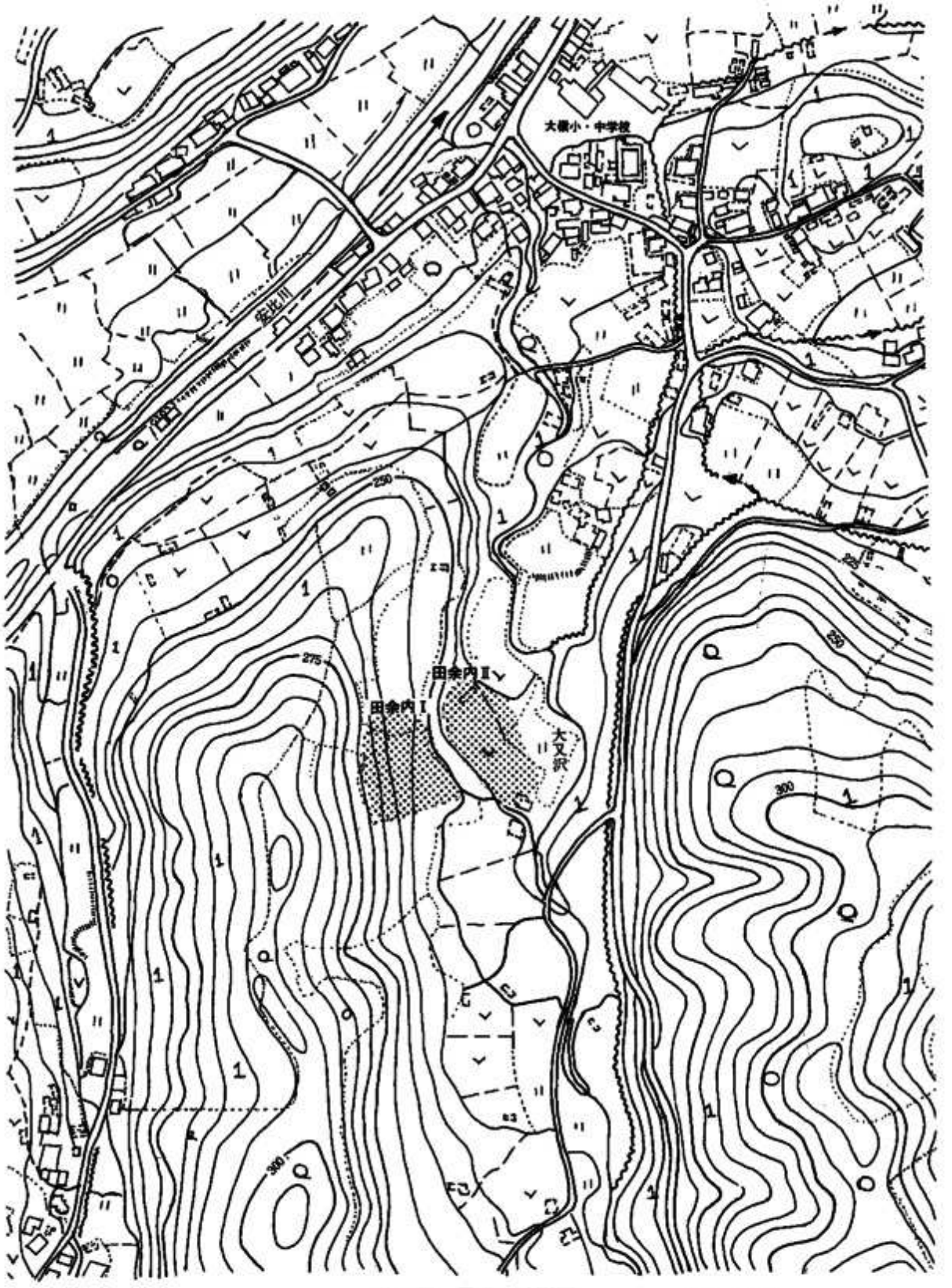
2．遺跡の環境

(1)　地形と地質（第２・３図）

当遺跡の所在する二戸郡浄法寺町は、奥羽山脈北部の東側山間地である。町の中央を北東方向に流れる安比川が稲庭岳（1,078ｍ）を主峯とする西部山地と七時雨山（1.060ｍ）、田代山（954ｍ）、毛無森（904ｍ）などの七時雨山山地に２分している。

西部山地は稲庭岳を中心に山頂緩斜面を残す山地と東に傾斜する300m～400m の定高性をもつ丘陵地からなり、東縁は馬淵川に達している。七時雨山山地は火山地で周囲に山麓丘陵が広がり、丘陵を刻む谷が放射状に延びて火山地特有の地形を形成している。

一方、安比川は八幡平山群の比山（1,458ｍ）、高倉山（1,051m）、安比岳（1,458ｍ）などを源とし、安代町荒谷、浄法寺町、二戸市御返地を経て、一戸町鳥越で馬淵川に合流している。浄法寺町は安比川の中流域にあたり、比較的広く連続する谷底平野が形成されている。その幅は海上付近で 600ｍ である。谷底平野は岡本川、大又沢など安比川支流にも見られるが、幅が狭くその発達はあまり良好ではない。また、安比川沿いには洪積地や沖積世の段丘が発達している。高位段丘は安比川との比高が80m で越戸付近にのみ存在し、馬淵川中流域の仁左平段丘に対比され、中位段丘は比高が25～45m で安比川上流域のＡ面（比高20～30m）、馬淵川中流域

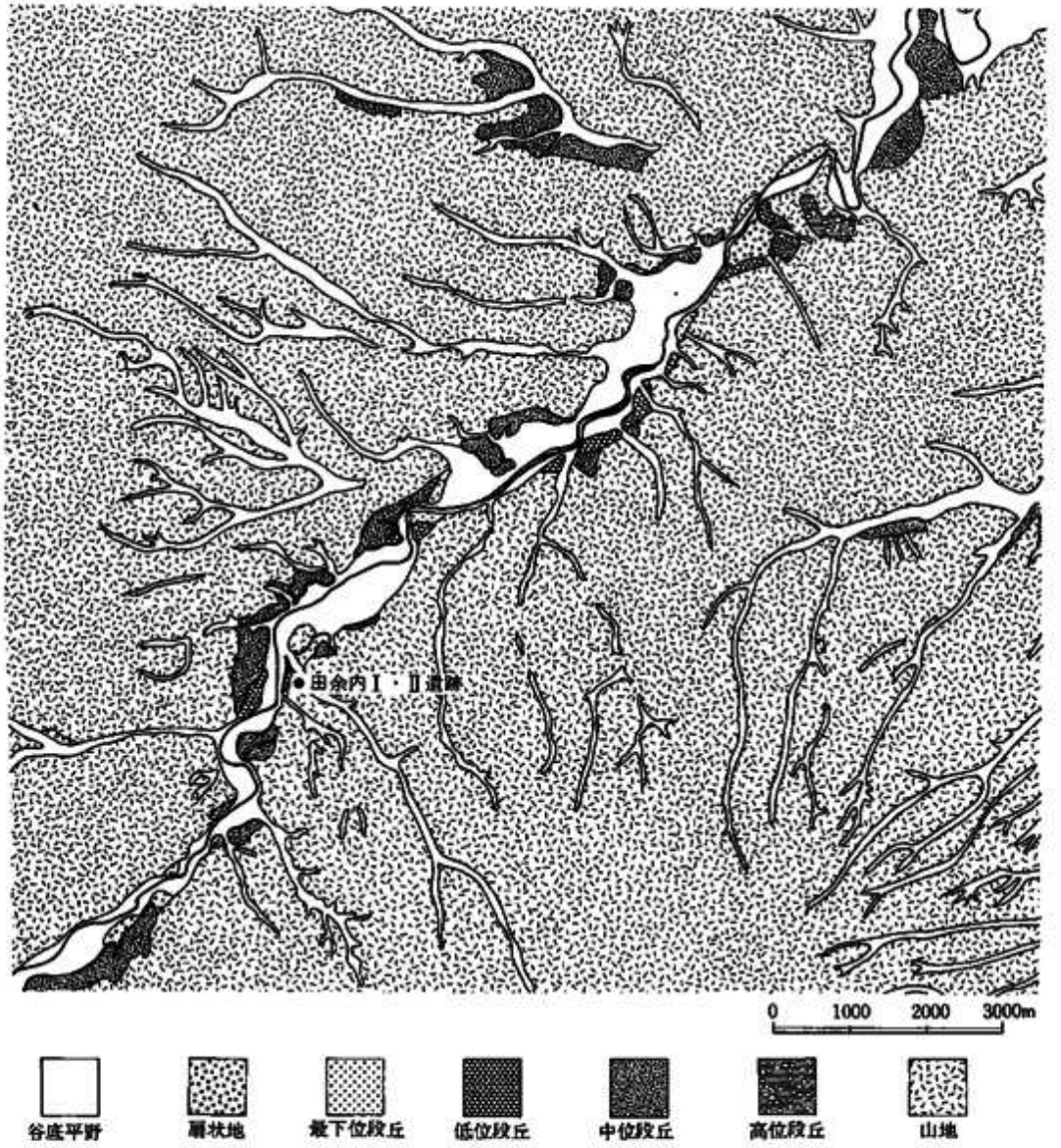


第２図　周辺の地形図　　S＝1：5,000

の福岡段丘（比高50m）に対比され、それぞれ洪積世中位段丘・低位段丘に相当するとみられる。低位段丘は比高が15～20mで馬淵川中流域の米沢段丘（比高25m）に対比され、最下位段丘は比高が5～10mで安比川上流域のB面（比高7～11m）、馬淵川中流域の堀野段丘（比高15m）に対比され、それぞれ沖積世段丘古期面、新期面に相当するものであろう。

当遺跡は七時雨山の山麓丘陵北縁の沖積世段丘古期面に立地している。安比川の右岸にあたり、その支流大又沢左岸で谷底平野との比高は15～20mほどである。

調査対象地は東西 69 m、南北 35 mであり、北に傾斜する斜面である。標高は 250～255 m、地目は畑地及び牧草である。



第3図　地形分類図

(2) **基本層序**(第4図)

調査地内の基本土層は次のように分けられる。

0層　黒色土（10YR 2/1）　耕作土である。

Ⅰ層　黒色土（7.5YR 2/1）　旧表土である。平坦部や斜面上位で薄く、埋没谷に向かい若干厚みを増す。遺物も若干出土する。

Ⅱ層　黒色土（10YR 1.7/1）　上面が平安時代の住居跡検出面で十和田a降下火山灰が住居跡の上端を縁取る。陥し穴状遺構は、この上面または若干下がって検出される。遺物も多く、下位では前期の土器が出土する。

Ⅲ層　にぶい褐色（10YR 5/4）　十和田a降下火山灰である。平安時代の住居跡に小ブロックでレンズ状に自然堆積し、床面近くに至る場合もある。埋没谷では他のシルト質土に混入する。

Ⅳ層　暗褐色土（10YR 3/4）　中掫浮石起源と思われる極細粒浮石を混入する。埋没谷にのみ確認される。

Ⅴ層　黄褐色土（10YR 5/6）　南部浮石（Ⅵ層）を起源とするシルト質土。

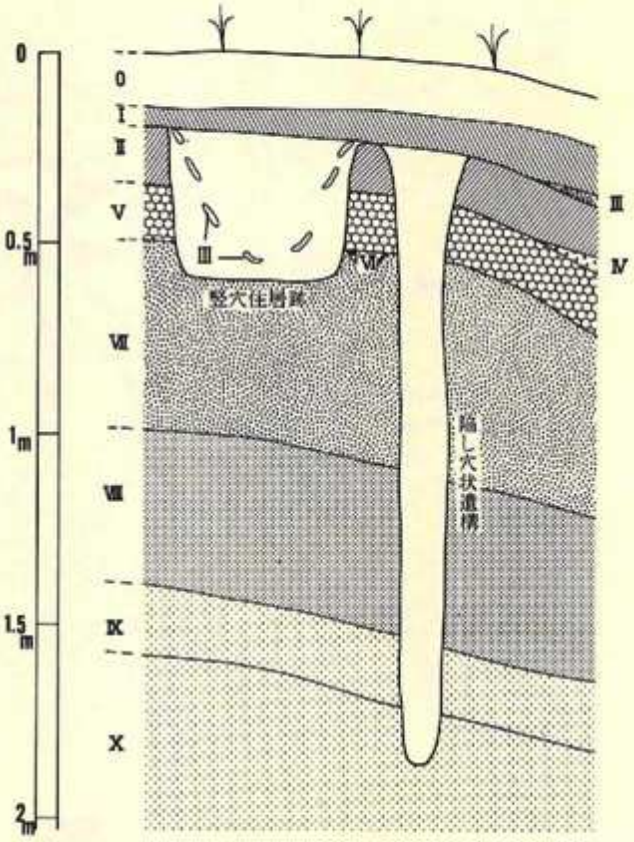
Ⅵ層　明赤褐色（5YR 5/8）　南部浮石である。西側住居跡の壁面部分で観察できるが、多くは欠失して観察できない。

Ⅶ層　褐色土（10YR 4/6）　径2～4cmの黄色浮石を含む。八戸火山灰相当とみられる。平安時代の住居跡はこの層まで掘り込まれる。

Ⅷ層　にぶい黄橙色土(10YR 6/4)　砂質土である。

Ⅸ層　灰黄褐色土（10YR 6/2）

Ⅹ層　にぶい黄橙色土（10YR 7/3）陥し穴状遺構はこの層まで掘り込まれる。



第4図　基本層序模式図

(3) 周辺の遺跡(第5図・第1表)

遺跡台帳に登載されている浄法寺町内の遺跡は72遺跡である。このうち安比川流域に全体の85%にあたる62遺跡が存在し、安比川流域では左岸に11遺跡、右岸に82.3%にあたる51遺跡があり、圧倒的に右岸の遺跡数が多い。これは東北縦貫自動車道が安比川右岸を南西から北東方向に通過し、その関連遺跡の詳細分布調査が実施されたためである。

元来安比川右岸は七時雨山山麓北縁の北西斜面となっており、遺跡の立地条件はあまり良好ではない。逆に左岸は日当りのよい南東斜面であり、遺跡の立地に恵まれ、右岸より密に分布している可能性が大きく、今後の分布調査によって増加することが予想される。また、安比川流域以外では低丘陵地が広大な面積を占め、上杉沢遺跡や鏡田遺跡のような大規模遺跡が存在しており、分布調査の実施によっては倍加するであろう。

町内の種類別遺跡数は散布地44、集落跡14、古墳1、寺跡1、館跡12であり、圧倒的に散布地が多くなっている。散布地は調査によって集落跡となる可能性をもつものであり、集落と同一とみられる。散布地、集落跡のほとんどは縄文時代に属し、古代に属するのは16遺跡である。

古代の遺跡のあり方は縄文時代後・晩期の遺跡に重複するもので、縄文時代との複合遺跡である。古墳は川又古墳で石郭などはなかったようであるが、円墳3基が存在している。また、寺跡1は天台寺跡で、国の重要文化財に指定されている鉈彫手法で著名な聖観音、十一面観音像を擁する天台宗の名刹である。寺伝では神亀5年(728年)行基の創建となっている。古代天台寺の解明のため発掘調査が続けられている。

安比川流域の遺跡は遺跡台帳に登録された63遺跡と新たに発掘調査された五庵Ⅲ遺跡、広沖遺跡の65遺跡である。このうち、縄文時代に属するものが51遺跡、弥生時代が6遺跡、古代が15遺跡、館跡が11遺跡である。縄文時代に属する遺跡を時期別に細分すると早期8、前期14、中期9、後期32、晩期20、不明10となり、延べ87遺跡となる。後期が33.7%、晩期が23.2%で、この両者が過半数を占めている。

安比川流域における占地別遺跡数をみると、丘陵緩斜面5、中位段丘43、低位段丘22、谷底平野6遺跡となり、中・低位段丘に立地するものが多い。また、時期別の占地状況は縄文時代早期から中期にかけてが丘陵緩斜面から低位段丘にかけて占地し、後・晩期になると中位・低位段丘を主体として谷底平野に拡大する傾向があるようである。弥生時代は丘陵緩斜面、中位低位段丘が各2遺跡であり、古代においては丘陵斜面2、中位段丘5、低位段丘7であり、低位段丘が主体となっている。

田余内Ⅰ遺跡周辺では東に田余内Ⅱ遺跡、北に田余内Ⅲ遺跡があり、大又沢の東方には五庵Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、駒ヶ嶺館等がある。

第5図　遺跡分布図

第1表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時代・遺構・遺物	No.	遺跡名	種別	時代・遺構・遺物
1	馬洗場	散布地		34	浄法寺城	館跡	
2	鏡田	集落跡	土師器	35	馬場向Ⅰ	散布地	縄文後期
3	川又館	館跡		36	〃 Ⅱ	〃	〃 後期・晩期
4	川又古墳	古墳		37	〃 Ⅲ	〃	〃 前～中期
5	漆沢館	館跡		38	海上Ⅰ	〃	〃 後期・晩期・土師
6	長渡路館	〃		39	〃 Ⅱ	散布地	縄文後期・晩期
7	松岡館	〃		40	〃 Ⅲ	〃	〃
8	上野Ⅰ	散布地	縄文前期末	41	〃 Ⅳ	〃	〃
9	〃 Ⅰ	〃	縄文	42	〃 Ⅴ	〃	〃
10	〃 Ⅱ	集落跡	前期～後期	43	山根	〃	〃
11	〃 Ⅳ	〃	〃 後期	44	前谷地	〃	縄文中～晩期・土師器
12	〃 Ⅴ	〃	〃 〃 ・晩期	45	五庵Ⅰ	集落跡	〃 後～晩期・土師器
13	〃 Ⅵ	〃	〃 晩期	46	〃 Ⅱ	〃	〃 弥生・古代・中近世
14	〃 Ⅶ	散布地	〃	47	駒ケ嶺館	館跡	
15	〃 Ⅷ	〃	〃 後期	48	大森館	〃	
16	天台寺跡	寺院跡		49	小泉館	〃	
17	明神沢	散布地	縄文晩期・石鏃	50	小泉	散布地	縄文
18	名越Ⅰ	〃	〃 前～後期・土師器	51	大清水館	館跡	
19	飛鳥台地Ⅰ	集落跡	〃 後期・土師器	52	下谷地	散布地	縄文後期
20	〃 Ⅱ	散布地	〃 ・土師器	53	大清水	〃	〃 後期・石鏃・石剣・土偶
21	名越Ⅱ	〃	〃 後期	54	田余内Ⅰ	集落跡	〃 後期・晩期・土師・須恵
22	安比内Ⅰ	集落跡	〃 後期・晩期・土師	55	〃 Ⅱ	散布地	〃 後期・晩期
23	〃 Ⅱ	散布地	〃	56	〃 Ⅲ	〃	〃
24	館	集落跡	〃 後期・晩期	57	漆畑	〃	〃 前期末
25	吉田館	館跡・集落跡	〃 中～晩期・堀・土塁	58	柿ノ木平館	館跡	空堀・土塁
26	大久保Ⅰ	集落跡	〃 後期,晩期・土師器	59	柿ノ木平Ⅰ	散布地	縄文後期・晩期
27	〃 Ⅱ	散布地	〃 前期	60	〃 Ⅱ	〃	縄文
28	〃 Ⅲ	〃	〃 後期・晩期	61	〃 Ⅲ	〃	〃 中～晩期
29	大手	集落跡	土師器	62	〃 Ⅳ	〃	縄文
30	桂平Ⅰ	〃	縄文後期・晩期	63	飛鳥	〃	〃 後～晩期・石偶
31	〃 Ⅱ	散布地	〃	64	沼久保	〃	〃 中・晩期・石鏃
32	大坊	〃	〃	65	小又	〃	〃 〃
33	上外野	集落跡	土師器・須恵器				

Ⅲ　調査の方法と室内整理

1．野外調査

〈田余内Ⅰ遺跡〉

調査区の設定と遺構の呼称

調査範囲は道路建設用地の緩斜面部にあたり、面積は2,090㎡である。北東一南西方向は道路中心杭のＳＴＡ76＋80からＳＴＡ77＋40までの約69m、幅は35mである。

グリットの配置は道路中心杭ＳＴＡ76＋80と77＋00の２点を基準点として中軸線を設定し、40mを単位とする大区画（西から０～Ⅱ区）と、さらに４ｍを単位とする小区画（西からＡ～Ｊ）に細分する。これに直交する南北方向は、４ｍごとに北から０～９とし、中軸線を５とした。グリッド名は４×４ｍの最小単位を北西の交点によって呼称し、上記の組み合わせによってⅠＡ３、ⅡＢ３のように命名した。基準点76＋80はⅠＡ５、77＋00はⅠＦ５である。

なお、基準点の平面直角平面座標第Ｘ系における成果は次のとおりである。

ＳＴＡ76＋80	X	17068.8830	Y	24774.7029
ＳＴＡ77＋00	X	17086.8267	Y	24783.5350

遺構の名称や遺物の取り上げにはグリッド名を冠して、ⅠＣ３竪穴住居跡、ⅠＢ８土壙、０Ⅰ７陥し穴状遺構、ⅡＢ４－Ⅱ層のように呼称し、基本的には遺構の北西端のグリットによって命名している。なお同一グリッドに複数の遺構があった陥し穴状遺構にはⅠＡ４－１陥し穴状遺構、ⅠＡ４－２陥し穴状遺構と命名した。

粗掘と遺構検出

粗掘に先だって、16m間隔に等高線に直交するトレンチを３箇所設定し、試掘した。その結果、古代の竪穴住居跡と縄文時代陥し穴状遺構が検出面を異にして発見され、また埋没した開析谷も発見された。

粗掘、遺構検出は、遺物が表面採集されることや、古代の竪穴住居跡検出面が浅いこと、そして重機の進入路が確保できなかったことなどから人力によることにした。

遺構は、古代の竪穴住居跡は十和田ａ降下火山灰の混入、縄文時代の陥し穴状遺構は黒色混土の広がりにより検出できた。

遺構の精査

遺構の精査は、竪穴住居跡が４分法、他の遺構は２分法を原則とした。陥し穴状遺構（円形）は埋土及び底面に逆茂木状施設の存在を推定して断面をスライス調査し、確認できた底面下の逆茂木状施設を断ち割りした。竪穴住居跡では、鍵層となる十和田ａ降下火山灰の確認、炭化材出土状況の確認に特に留意した。

記録

実測図は縮尺を1/20とした。埋土や基本土層における土層の色調は、「新版標準土色帳」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）によった。写真による記録は、6×7㎝版と35㎜版を使用し、モノクロームとカラーリバーサルフィルムを併用した。また空中写真撮影を行なっている。

〈田余内Ⅱ遺跡〉

調査区の設定と粗掘・遺構検出

調査範囲は道路建設予定地の平坦部にあたり、面積は1,150㎡である。道路中心杭のＳＴＡ77＋40と78＋00の間約34m、幅は35mである。

グリッドの設定は道路中心杭ＳＴＡ77＋40と77＋20を基準点として中軸線を設定し、それに平行するトレンチを3箇所入れ、試掘した。その結果、沢の営力と畑作による削平が認められ、かつ数点の遺物しか発見できなかった。したがって調査は2mおきに粗掘し、遺構存在の可能性がある箇所を中心に広げるなどの方法をとった。

2．室内整理

〈田余内Ⅰ・Ⅱ遺跡〉

図版作成

遺構図版については、野外調査時の実測図を整理・点検・合成し、遺構ごとに第二原図を作成した。本書掲載の図版は、第二原図を基に作成した。

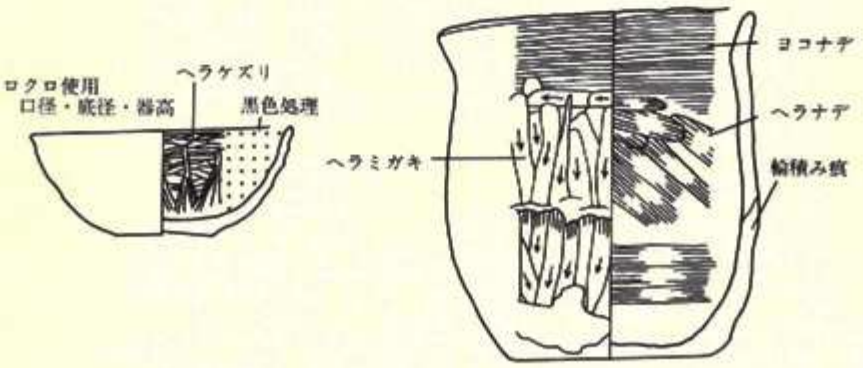
遺物図版については、実物大で実測し、それを基に作成した。

写真図版については、遺構は縮尺不定、遺物はその種類によって縮尺率は異なるが、同一種類のものはできるだけ縮少率を揃え、相互間の大小関係が分りやすいようにした。

なお、図版には、各々に縮少率を示してある。

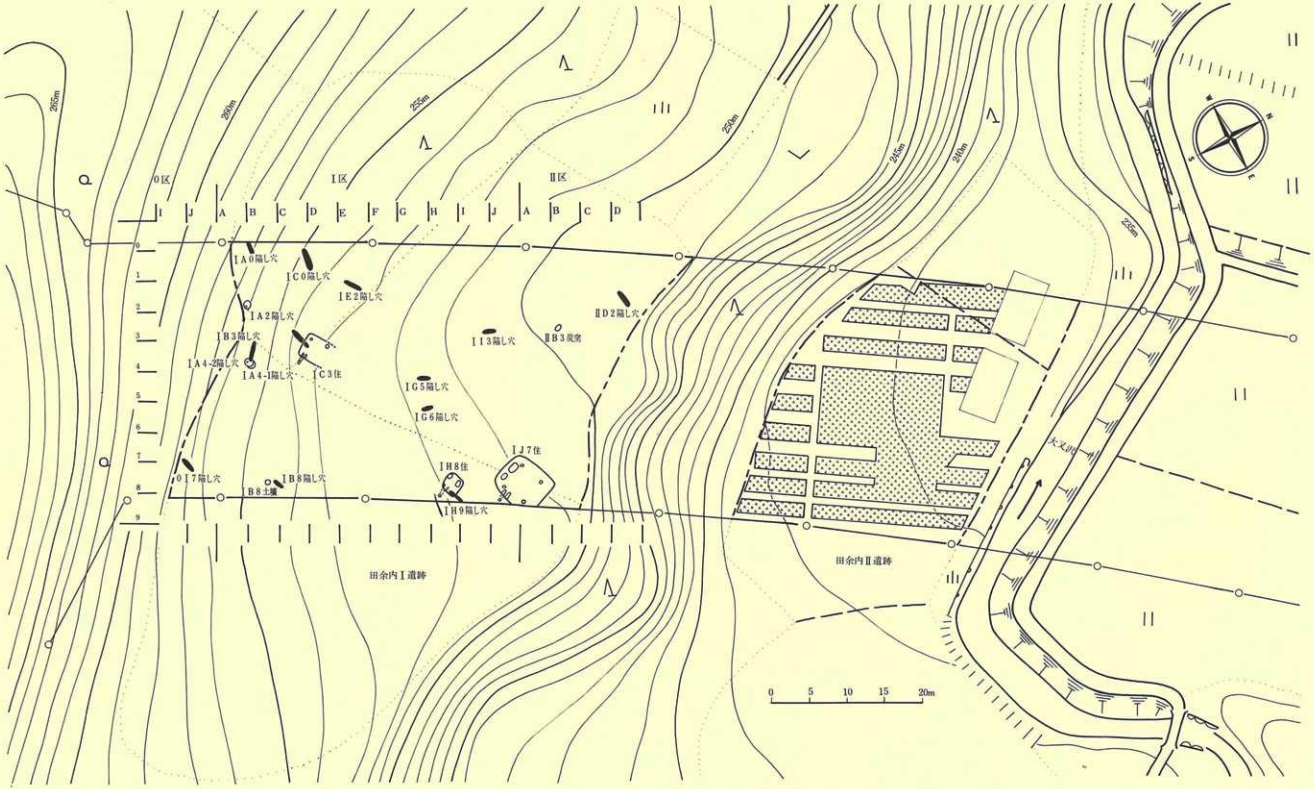
遺物整理

水洗いは野外調査中に終了した。したがって、室内整理の段階では、これらの仕分・登録作業・土器の復元作業から始めた。登録に際しては時代別、器種別に行った。掲載遺物については、実測図版・写真図版共通の連番を付した。※　なお、遺物の図版は下図によっている。



田余内（たよない）Ⅰ遺跡

所　在　地	二戸郡浄法寺町大字駒ヶ嶺字田余内32-1ほか
委　託　者	日本道路公団仙台建設局
調査期間	昭和60年8月5日～10月11日
調査対象面積	2,090㎡
発掘調査面積	2,090㎡
遺跡番号・略号	ＪＥ46－0087・ＴＹⅠ－85
調査担当者	渡辺洋一・石川長喜
協力機関	浄法寺町教育委員会



第6図　田余内I遺跡遺構配置図

Ⅰ　検出遺構と出土遺物

検出された遺構は、竪穴住居跡３棟、土壙１基、炭窯1基、陥し穴状遺構14基である。また、発見された遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、石器、石製品、古銭、鉄製品、鉄滓、炭化材などである。

１．竪穴住居跡

(1)　ＩＣ３竪穴住居跡

〈遺構〉（第７・８図、写真図版４・５）

調査区の西斜面部に位置する。検出面はⅡ層である。西壁はＩＣ３陥し穴状遺構を切っている。斜面下位の東壁は欠失する。

平面形は、欠失部分はあるものの、方形を基調とするようである。規模は東西 3.1 m南北 3.7m である。方向は西壁によるとN45°Wである。

埋土は上位が黒褐色混土、中～下位が黒色混土、下位の一部に焼成を受けたシルト質土や炭化材が含まれる。中位に小ブロックの十和田 a 降下火山灰が混入する。

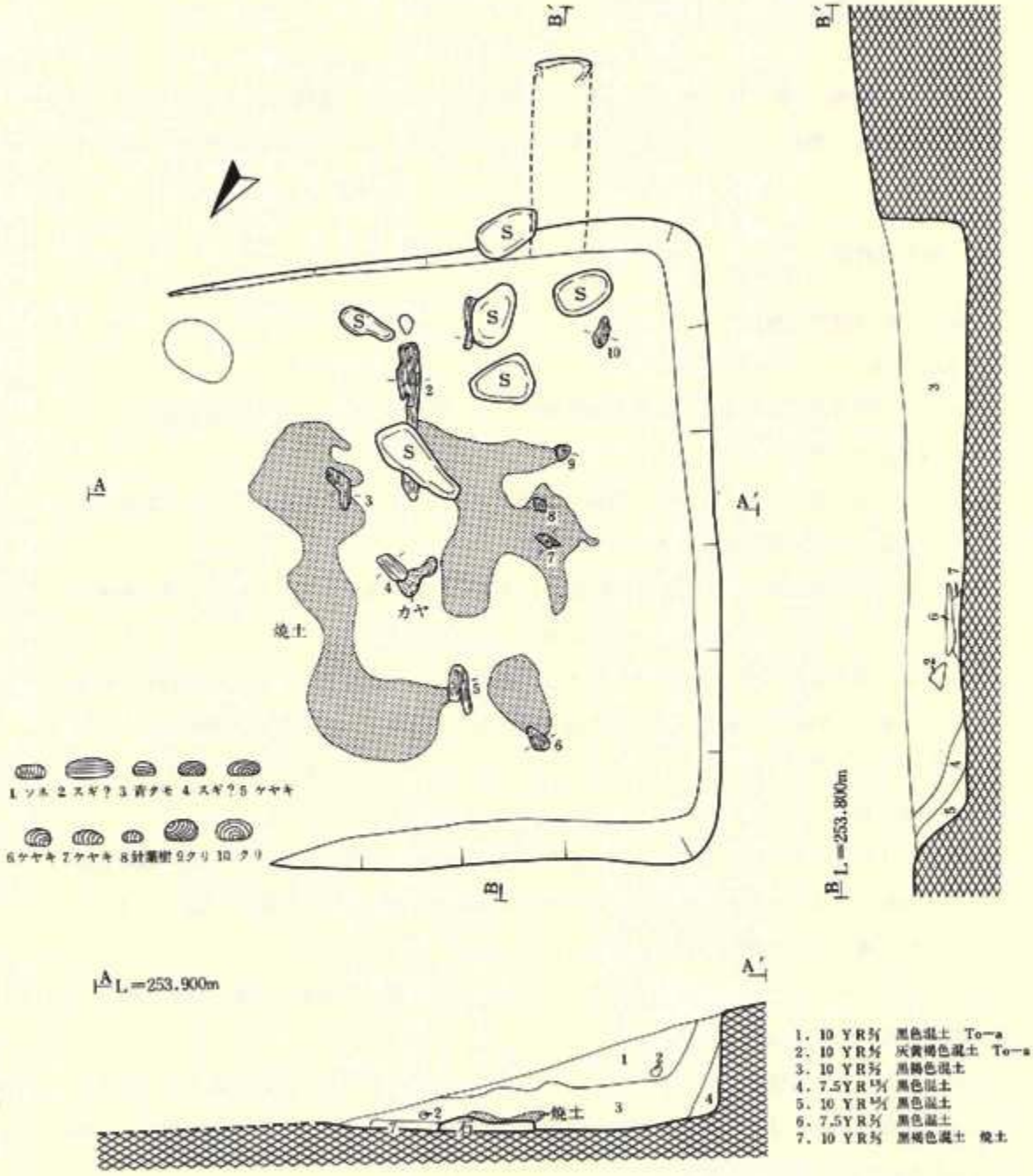
炭化材はカマド脇から中央にかけて散乱する。その多くは丸木である。最大は幅13cm、長さ90cm、厚さが５cmの板状である。多くが焼成を受けたシルト質土の上に載る。樹種はケヤキ３点、針葉樹（スギ？）３点、クリ２点、アオタモ１点、ソネ１点と鑑定された。いずれも上屋構造にかかわるものと考えられる。

焼成をうけたシルト質土は、５～10cmの厚さでほぼ中央に広がる。前述のように一部炭化材の上にあるが多くは下にある。焼成による赤化部分は現地性焼土のように均一ではなく部分的であり、かつ薄い。上屋構造にかかわると考えられる。

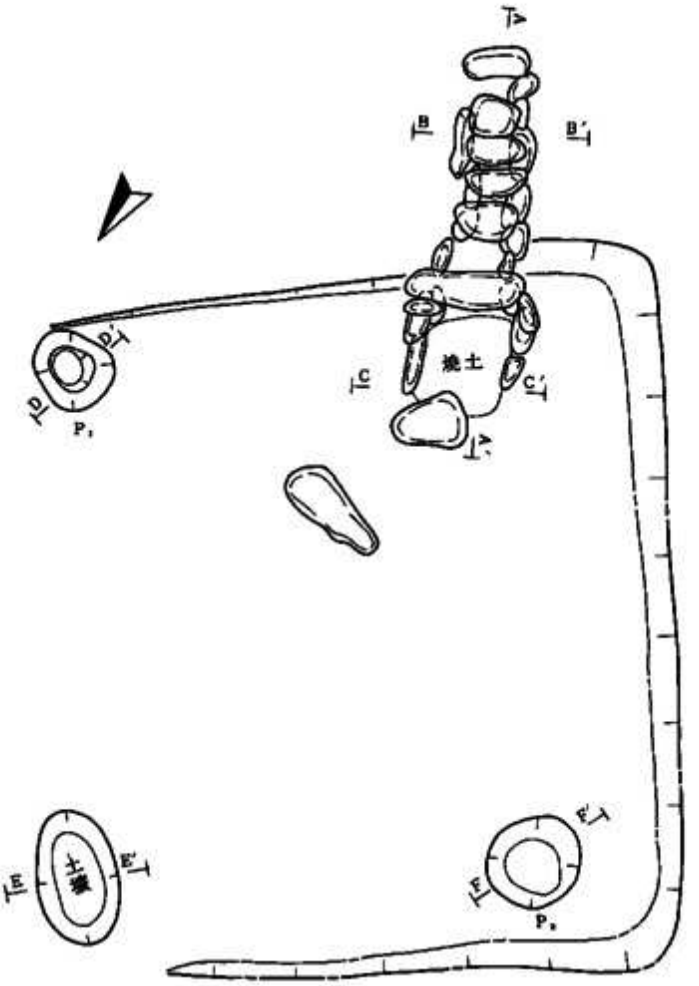
壁は、上半が崩落しており、緩やかに立ち上がる。壁高の最大は60cmである。三方の壁とも直線的である。床面はほぼ平坦である。

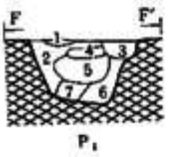
柱穴はＰ１・Ｐ２を検出したのみである。いずれも壁際に寄る。Ｐ２は西壁寄りの北壁の内側15cmに位置し、Ｐ１は欠失する東壁寄りの南壁際に位置する。直径50cm、35cmの円形で、深さはそれぞれ35cm、65cmである。

カマドは南壁西寄りに位置する。燃焼部上の天井石及び煙出し部分の一部が散乱するものの残存状況は良い。総長190cmで、壁外部分が100cmである。燃焼部は壁の内側65cmにあって、焼土は50×45cmほどの隅丸方形である。厚さは最大10cmである。袖部は左右とも芯材として扁平な円礫を３～４個連らねて埋設し、シルト質土を貼り付けて固定している。幅は40cmである。

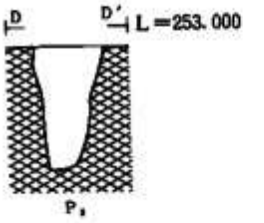


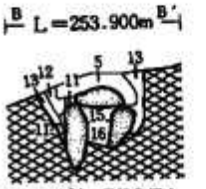
第7図　ＩＣ３竪穴住居跡 (1)



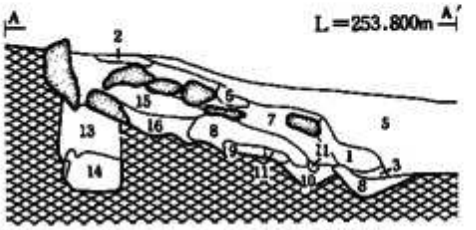


1. 7.5YR 1/1 黒色混土
2. 7.5YR 3/1 黒褐色混土
3. 7.5YR 3/1 暗褐色混土
4. 7.5YR 3/4 褐色混土
5. 7.5YR 3/2 黒褐色混土
6. 7.5YR 3/3 暗褐色混土
7. 7.5YR 3/4 暗褐色混土

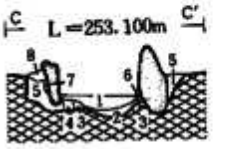




5. 7.5YR 3/2 黒褐色混土
11. 7.5YR 3/3 褐色混土
12. 7.5YR 3/2 黒褐色混土
13. 7.5YR 3/1 黒色混土
15. 7.5YR 3/2 黒褐色混土 焼土粒
16. 7.5YR 3/1 黒色混土 焼土粒



1. 10 YR 5/4 にぶい黄橙色混土
2. 10 YR 3/2 黒褐色混土
3. 7.5YR 3/4 褐色混土
4. 7.5YR 3/2 黒褐色混土 焼土
5. 7.5YR 3/1 黒色混土
6. 10 YR 5/4 にぶい黄褐色混土
7. 7.5YR 3/2 黒褐色混土
8. 7.5YR 3/3 暗褐色混土 焼土
9. 10 YR 3/2 黒褐色混土
10. 7.5YR 3/2 黒褐色混土
11. 7.5YR 3/2 黒褐色混土 焼土
12. 10 YR 3/2 黒褐色混土
13. 7.5YR 3/3 暗褐色混土
14. 7.5YR 3/4 褐色混土 焼土
15. 7.5YR 3/2 黒褐色混土 焼土粒
16. 7.5YR 3/1 黒色混土 焼土粒



1. 2.5YR 5/4 明赤褐色土 焼土
2. 5 YR 5/4 赤褐色土 焼土
3. 5 YR 5/4 赤褐色土 焼土
4. 5 YR 5/4 暗赤褐色混土
5. 10 YR 5/4 黒褐色混土
6. 7.5YR 5/4 橙色混土
7. 10 YR 3/2 暗褐色混土
8. 10 YR 5/4 黄褐色混土

第8図　ＩＣ３竪穴住居跡 (2)

天井石は60×20cmの扁平礫が壁際の芯材礫の上に位置する。カマドの北に散乱する礫2個も当カマドの天井石と考えられる。煙道は両側に扁平な円礫を4個連らねて埋設し、側壁としている。その上に扁平な円礫4個の天井石を置き、さらに灰白色シラス土で天井石と側壁礫上部を入念に固定している。煙道部の内側幅の最大幅は袖部と接する部分で25cm、最小幅は15cmである。深さは20cmほどである。煙道は緩い上り勾配で、推定直径30cmほどの煙出しに続いている。煙出しは深さ70cmの土壙となる。

土壙は東壁寄りの北壁の内側15cmに位置する。 70×45cmの長円形で深さが15cmの皿状をなす。埋土は暗褐色混土の単層である。

〈**遺物**〉（第9・10図、写真図版15・16）

発見された遺物は土師器15点、砥石1点、それに縄文土器3点である。縄文土器は粗製土器の胴部破片である。土師器はすべてロクロを用いないで成形された甕で、坏は含まれていない。

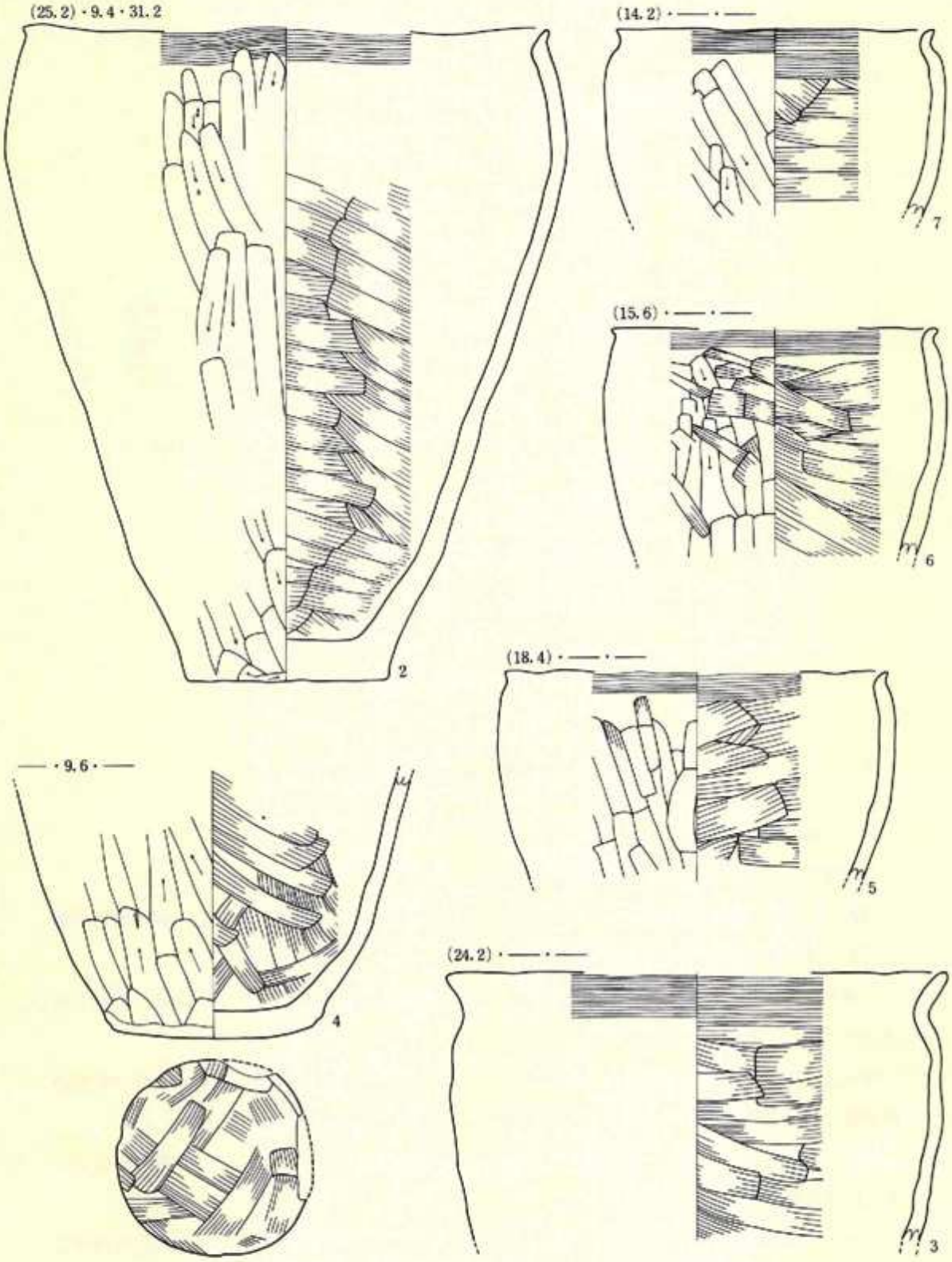
1～4が大型甕である。1は体部中ごろに最大径をもつ安定感のある甕である。口縁部は全体的に外反するが、開きぎみの部分、直口ぎみの部分などがあって歪んでいる。柔らかい粘土を用いて成形したもののようである。口縁部が横ナデ、外面下半がヘラケズリ、内面は横及び斜方向のヘラナデ調整である。底はヘラケズリ調整されているようであるが、はっきりしない。

2は体上部に最大径をもつ。器形は底部から直線的に立ち上がって最大部に至り、上半が幾分狭まる。口縁部は端部が細まり、短く外反する。口縁部は横ナデ、外面は全面縦方向の弱いヘラケズリ調整、内面は横方向のナデ調整である。色調は二次加熱のため破片によって異なる。

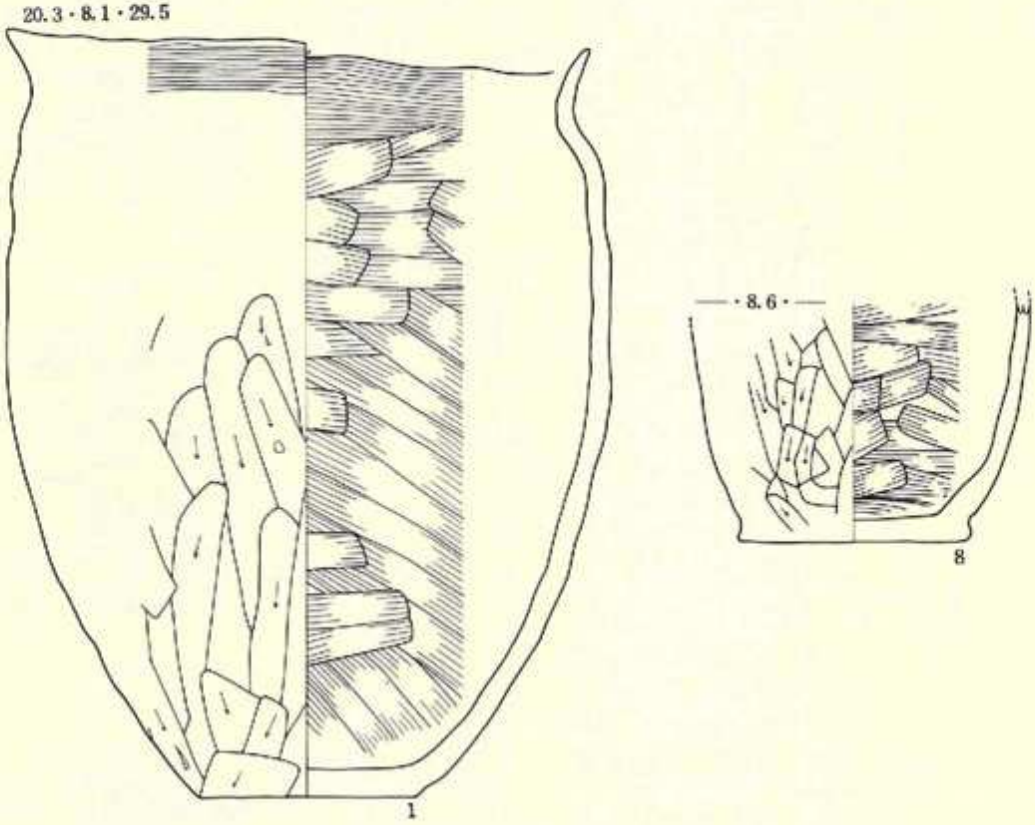
3は口縁部から体部までの破片である。成形、調整技法は1に類似する。4は体部から底部にかけての破片である。底部は丸底風の平底で、ヘラケズリ調整されている。調整は2に類似し、外面が縦方向の弱いヘラケズリ、内面は横及び斜め方向のヘラナデ調整である。

5～8は中型甕である。5～7は口縁部から体部までの破片で、器形、調整とも2に類似している。器形は体上部に最大径をもち、口縁部が幾分狭まり、口縁端部が短く外反する。口縁部が横ナデ、外面が全面弱い縦方向のヘラケズリ、内面は基本的に横方向のヘラナデ調整である。なお、7は口縁部下のくびれが深く沈線状をなしている。口縁部の内側に炭化物が付着している。

8は体部から底部である。底部は付高台状に体部下端が段となっている。底部にはヘラケズリ調整後の砂粒が付着している。外面は縦方向の弱いヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ調整である。他に比較すると全体的に器壁が薄い。内外両面に炭化物が付着していた。



第9図　ＩＣ３竪穴住居跡出土遺物（1）



第10図　ＩＣ３竪穴住居跡出土遺物　(2)

(2)　ＩＨ８竪穴住居跡

〈遺構〉（第11・12図、写真図版５・６）

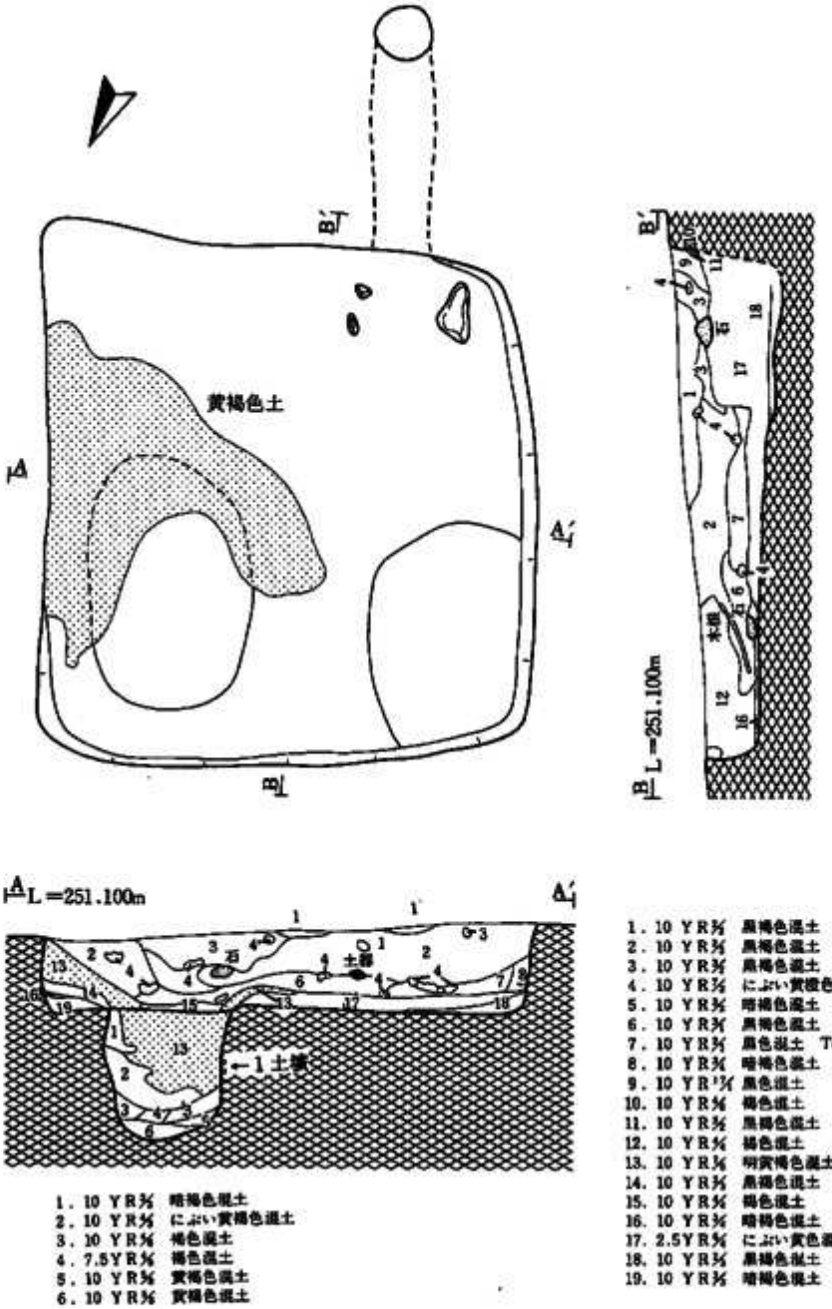
調査区の東平坦部に位置する。北東隣２ｍにＩＪ７竪穴住居跡が位置する。検出面はⅡ層である。南寄り東壁はＩＨ９陥し穴状遺構を切っている。

平面形は方形を基調とする。規模は東西2.5m、南北2.6m である。方向は、西壁によるとN 28°Wである。

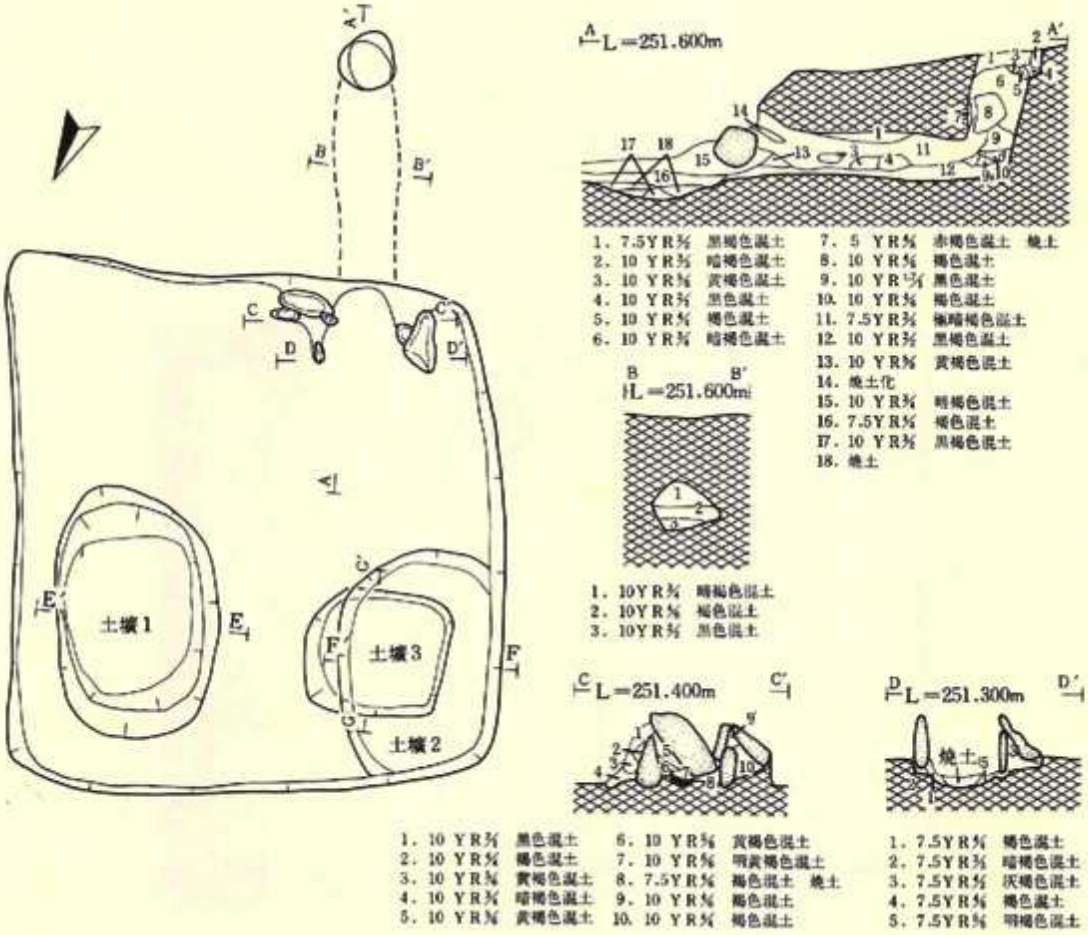
埋土は、上～中位が十和田ａ降下火山灰の小ブロックが混入する黒褐色混土、下位が炭化粒を含むにぶい黄褐色混土からなる。なお西半の床面には明黄褐色土が投げ込まれている。

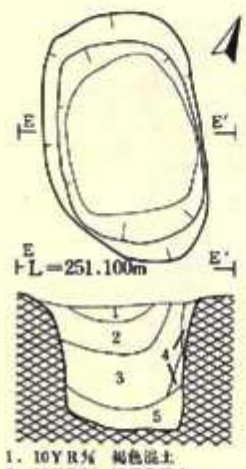
壁は床面からほぼ真っ直ぐ立ち上がる。壁高の最大は55cmである。各壁とも直線的である。床面はほぼ平坦である。柱穴はない。

カマドは南壁西寄りに位置する。残存状況は不良である。総長215cmで、壁外部分が125cmである。燃焼部は壁の内側90cmにあって、焼土は50×45cmほどの長円形である。厚さは最大７cm

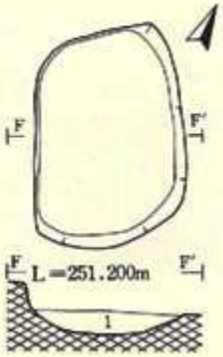


第11図　ＩＨ８竪穴住居跡(１)

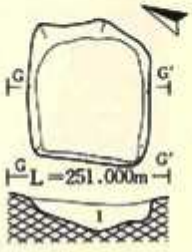




ＩＨ８住-土壙1



ＩＨ８住-土壙2



ＩＨ８住-土壙3

第12図　ＩＨ８竪穴住居跡 (2)

である。袖部は壁際部分のみ残存し燃焼部付近には残存しない。設置穴も確認できなかった。左右とも芯材として扁平な円礫を連らねて埋設し、シルト質土を貼り付けて固定している。幅は30～35cmである。壁際にある芯材礫の上には40×20cmの厚みのある天井石が傾いた状況で検出している。煙道は直径30～35cmほどで刳貫きである。底面は燃焼部から煙出しに向かい平坦に進む。煙出しは平坦な底面から若干傾斜して直線的に立ち上がる。煙出し部の直径は30cmほど、深さは60cmである。

土壙は3基検出されている。土壙1は北壁から30cm、東壁から20cm離れて位置する。平面形は隅丸長方形を基調とする。規模は開口部径125×80cm、底部径80×70cm、深さ65cmである。埋土は、上位が炭化粒を含む暗褐色混土、中位が埋め戻しと考えられる明黄褐色土、下位が土壙の下半の地山となる小礫まじりのにぶい黄褐色土からなる。土壙2は東壁と北壁に接する。平面形は隅丸長方形を基調とする。規模は開口部径が110×75cm、底部径が100×70cm、深さは13cmほどである。埋土は十和田a降下火山灰を混入する暗褐色混土である。土壙3は土壙2の下位に位置する。東壁より20cm、北壁より30cm離れる。平面形は隅丸長方形を基調とする。規模は開口部径が70×60cm、底部径が60×55cm、深さが13cmほどである。埋土は黄褐色混土である。

埋土の項で述べたように東壁際から床面中央にかけ、投げ込まれたと思われる明黄褐色土が広がる。東壁際では壁際の崩落土の上に壁外から斜めに落ち込んだように30cmほどの厚さで堆積する。これは更に土壙1に南東から落ち込み、土壙埋土の上～中位層となる。この明黄褐色土は汚れていないことから地山を掘り上げたものと考えられる。

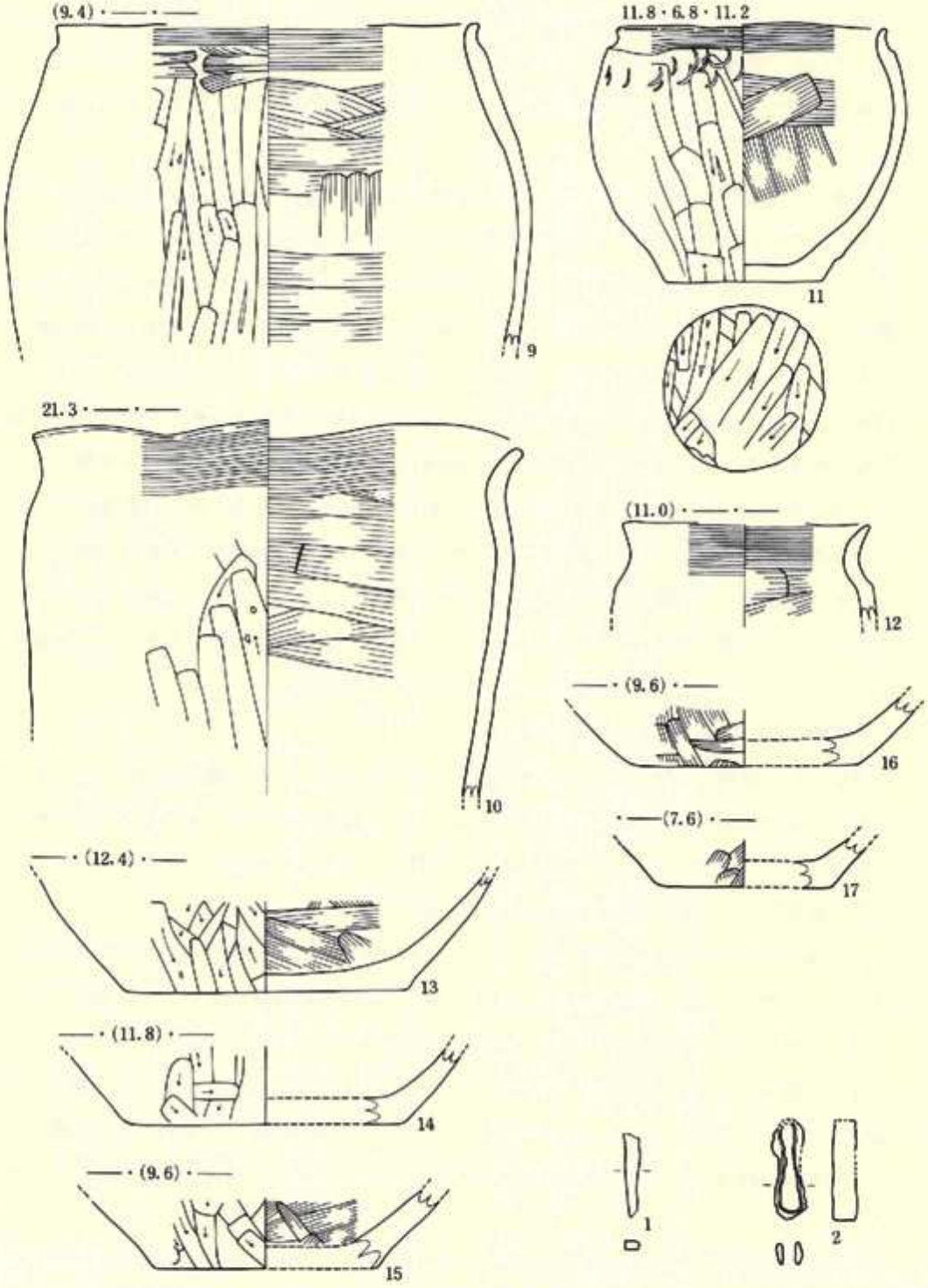
〈遺物〉（第13図、写真図版16・17）

発見された遺物は土師器39点、土製品1点、鉄製品2点、それに縄文土器10点である。縄文土器はいずれも破片で、繊維を含むもの、撚糸文、沈線に刺突を伴うものなどが含まれている。土師器はすべてロクロを用いないで成形された甕で、破片を含めて坏は発見されていない。土製品は鞴羽口であり、鉄製品は鉄鏃の茎と刀金具（責金具）である。

9は体部中ごろから上部に最大径をもち、上半が内彎する大型甕である。口縁部は端部が細まり短かく外反する。口縁部の下が沈線状に窪んでいる。口縁部が横ナデ、外面は全面縦方向の弱いヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ調整である。

10は体部中ほどに最大径をもつ大型甕である。口縁部は全体的に外反するが、開きぎみの部分、直口ぎみの部分などがあって歪んでいる。柔らかい粘土を用いて成形したもののようである。調整は口縁部が横ナデ、外面は下半が縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデである。

11は体部中ごろから上部に最大径をもつ小型甕である。器形は底部から彎曲しながら立ち上がり、最大部から幾分狭まる。口縁部は直下が沈線状に窪んで段をなし、蓋受状をなす。口縁



第13図　ＩＨ８竪穴住居跡出土遺物

端部は細まり、短く外反している。口縁部は横ナデ、外面は全面縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ調整である。底部は不定方向のヘラケズリである。なお、意図的に付したものか不明であるが、体部最大部付近に爪状の刺突列をもつ。口縁部の作りや、調整が9に類似しており、9の小型品とみられる。

12は成形、調整技法が10に類似する小型甕の口縁部である。口縁端部が細まり、外反する。口縁部が横ナデ、内面が横方向のヘラナデ調整である。

13～17は甕の底部である。底部はいずれもヘラケズリ調整されている。調整技法から13、15が9の底部の可能性がある。

1は断面形が長方形をなし、残存部の長さが3.7cmである。鉄鏃の茎と考えられる。

2は幅1cmの板材を長さ4.2cm、幅1.1cmの扁平な環状に巻いたものである。中央部が若干つぶれているが刀金具（責金具？）ではなかろうかと思われる。

そのほか、外径6.3cm、内径2.7cmの鞴羽口がある。外面がコークス状の粗末な小孔をもち、先端部近くの破片とみられる。

(3) ＩＪ７竪穴住居跡

〈遺構〉（第14・15図、写真図版７～９）

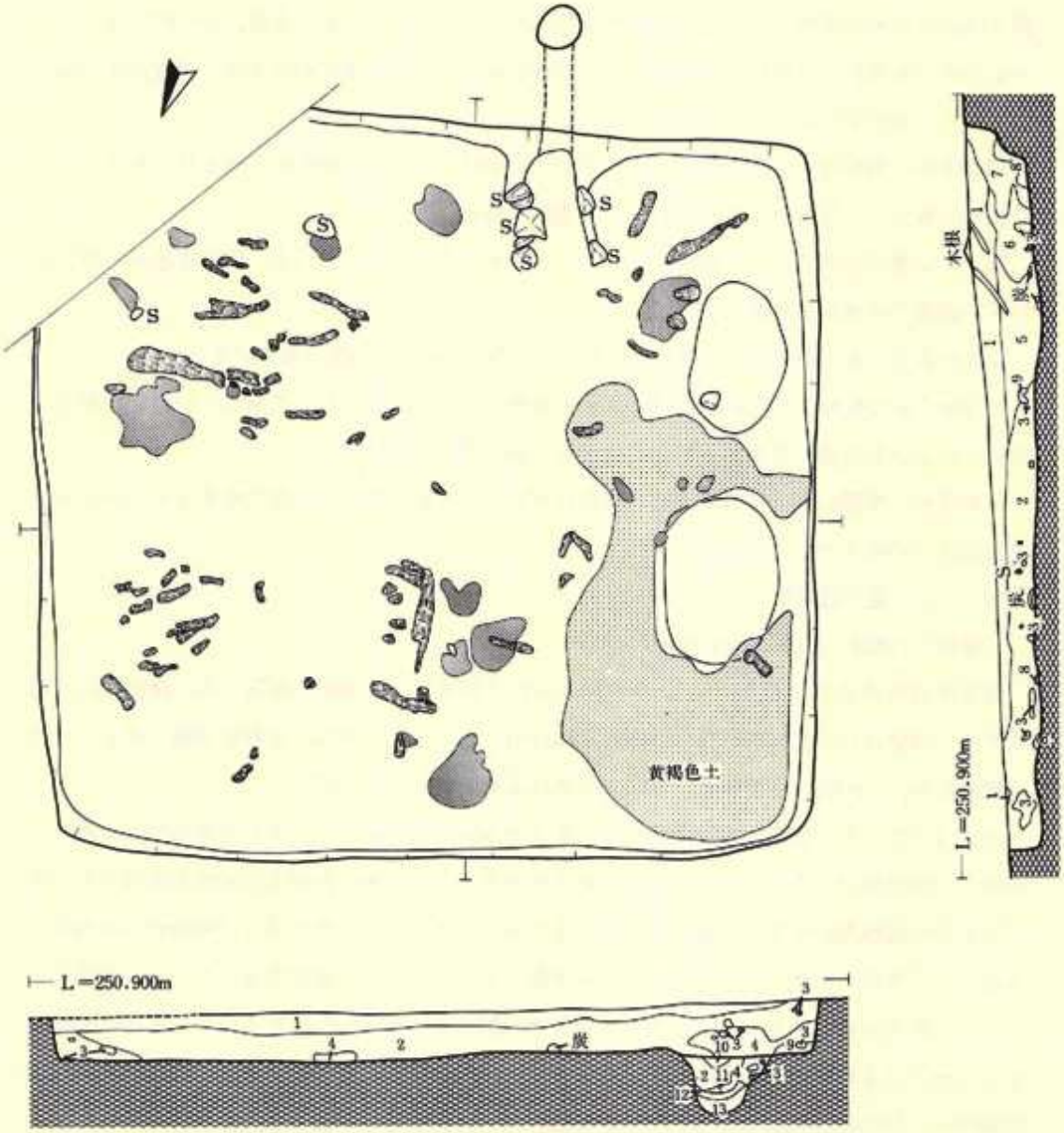
調査区の東平坦地に位置する。南西隣２ｍにＩＨ８竪穴住居跡が位置する。検出面はⅡ層である。南壁及び東壁の南東部分は調査区外に続いている。平面形は方形を基調とする。規模は東西6.3m・南北6.1mである。方向は西壁によるとN25°Wである。

埋土は上位が黒色混土、下位は十和田ａ降下火山灰を小ブロックで含む暗褐色混土である。下位の一部に焼成を受けたシルト質土や炭化材が含まれ、土壙１の埋土に連続する部分もある。

炭化材は遺構内の中央から放射状に散在する形で検出された。その多くは床面からの出土であるが、南壁寄り西壁付近からは、壁から床面へ倒れるように、焼成を受けたシルト質土とともに出土するものがある。多くは丸木であるが、板状を呈するものもある。最大は70×20cm、厚さ３cmである。樹種はほとんどがクリであり、一部針葉樹と鑑定された。なお南壁、北壁の内側80cm、130cmに直径24cm、高さ12cmの柱材がある。樹種は針葉樹である。その下に柱穴４が位置している。

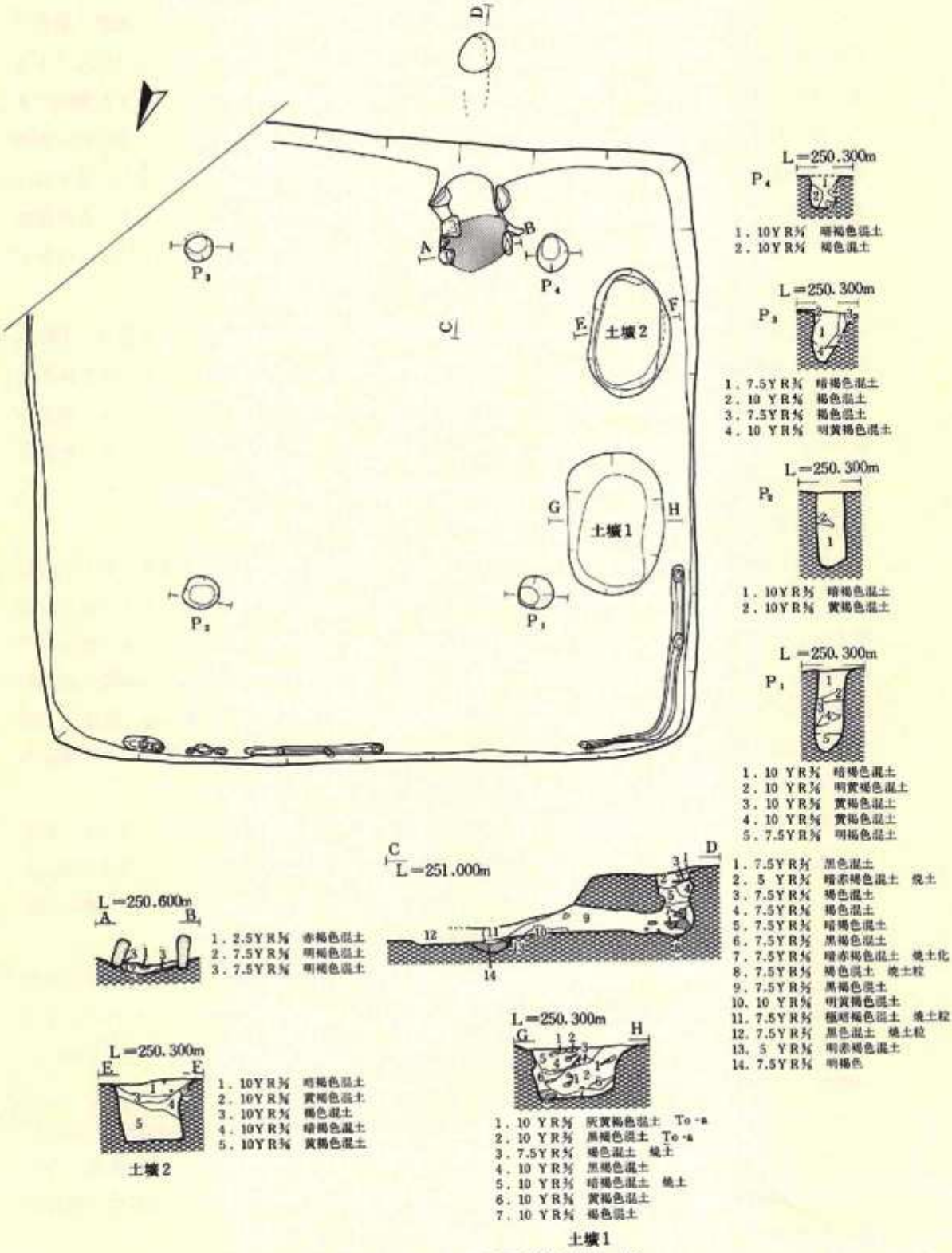
焼成を受けたシルト質土は、炭化材出土地点とほぼ同じく出土する。厚さは３～５cm、一部25cmほどである。一部炭化材の上にあるが多くは下にある。焼成による赤化部分は現地性焼土のように均一ではなく部分的であり、かつ薄い。上屋構造にかかわるものと考えられる。

壁は床面からほぼ真っ直ぐ立ち上がる。壁高の最大は58cmである。各壁とも直線的である。床面は平坦であり、しまっている。ほぼ東半分は深さ20cmまで貼床されている。北壁寄り西壁と北壁の大部分で周溝が検出されている。幅は10～15cmで深さが２～４cmあり、小ピット部分



1．10 YR3/1　黒色混土
2．10 YR3/3　暗褐色混土
3．2.5YR7/3　灰黄褐色混土　To－a
4．10 YR3/4　暗褐色混土
5．10 YR3/3　黒褐色混土　焼土
6．10 YR3/3　黒褐色混土
7．10 YR3/3　暗褐色混土
8．10 YR3/4　暗褐色混土
9．10 YR5/6　黄褐色混土
10．10 YR3/3　黒褐色混土
11．10 YR3/3　暗褐色混土
12．10 YR5/6　黄褐色混土
13．10 YR5/4　褐色混土

第14図　ＩＪ７竪穴住居跡 (1)



第15図　ＩＪ７竪穴住居跡　(2)

は深さ5cmほどである。

柱穴は4個対角線上に検出されている。P1が西壁、北壁の内側150cm、P2が北壁、東壁の内側150cm、P3が東壁、南壁の内側150cm、90cm、P4が南壁、西壁の内側80cm、130cmである。直径が25～30cmの円形である。深さはP1が75cm、P2が70cm、P3が50cm、P4が30cmである。埋土は、P1は暗褐色～黄褐色混土で炭化粒を含む。最下位はつき固めたように硬い明褐色土である。P2は暗褐色混土で炭化粒を含む。P3は暗褐色混土で炭化粒を含む。最下位はつき固めたように硬い明黄褐色土である。P4は褐色～暗褐色混土で砂質土である。なお前述の如くP4の上には柱材が検出されている。またP1の上にある土壙1の掘り上げ土中にP1の柱材痕跡と考えられる暗褐色混土を10cm強の高さまで確認できた。

カマドは南壁部寄りに位置する。残存状況は不良である。総長220cmで、壁外部分が100cmである。燃焼面は壁の内側120cmにあって、焼土は55×50cmほどの長円形である。厚さは最大12cmである。袖部は左右とも芯材として扁平な円礫を3～4個連らねて埋設し、シルト質土を貼り付けて固定している。幅は55cmである。煙道は直径20～25cmほどで刳貫きである。底面は燃焼部から煙出しに向かい平坦に進む。煙出しは若干凹む底面から真っ直ぐ立ち上がる。煙出し部の直径は25～30cmほど、深さは60cmである。

土壙は2基検出されている。土壙1は西壁から30cm、北壁から150cm離れて位置する。平面形は隅丸長方形を基調とする。規模は開口部径 135×90cm、底部径 105×90cm、深さ50cmである。埋土は上～中位が焼土粒や炭化粒、また十和田a降下火山灰をブロックで混入する暗褐色～黒褐色混土、下位が地山崩落土の黄褐色～褐色土である。土壙2は西壁から20cm、南壁から100cm離れて位置する。平面は隅丸長方形を基調とする。規模は開口部径 125×75cm、底部径 100×65cm、深さ60cmである。埋土は上位が十和田a降下火山灰を小ブロックで混入する暗褐色混土、中・下位が埋め戻し土と考えられる黄褐色混土である。

西側の床面直上に明黄褐色土が広がる。その範囲は西壁から200cm、北壁から380cmであるが、土壙1部分には載らない。最大厚は15cmほどで東から南部分にかけて薄くなり、床面の間には間層となる層はない。また土性は土壙の地山の性状と一致する。したがってこの土は土壙1の掘り上げた土を周辺に盛り上げたものと考えられる。

北寄り西壁際及び西寄り北壁際に前述の土壙1からの盛り上げ土が壁に接せず、暗褐色混土が幅10数cmにわたり帯状に巡る部分がある。この暗褐色混土は周溝に連続する。したがってこの帯状に巡る暗褐色混土部分は何らかの施設跡であり、この施設の存在が前述の掘り上げた土が壁際に至らない原因と考えられる。

西壁、北壁の内側150cmの土壙1掘り上げ土中に暗褐色混土がわずか広がる部分がある。平面形はほぼ円形で直径25cmある。下位は柱穴P1に連続する。したがってこの暗褐色混土は柱穴P1の柱材の床面からの立ち上がり部分であり、土壙1掘り上げ土は柱材が遺存中に周辺に盛り上げたと考えられる。

〈遺物〉（第16～18図、写真図版18・19）

発見された遺物は土師器86点、鉄製品１点、鉄滓２点である。土師器には高台付坏と甕がある。

18は内面黒色処理された高台付坊である。坏部はみこみが大きく安定感がある。口縁部は直行しそのまま丸く納まる。高台は「ハ」の字状に取り付く。底部の切り離しは回転ヘラ切無調整のようであるが、高台部接合の時の調整かもしれない。内外面とも丁寧にヘラミガキ調整されている。特に外面は丁寧に施され、高台脇まで及んでいる。

19は体上部に最大径をもつ甕である。体部が直線的に立ち上がり、口縁部が僅かに狭っている。口縁部は短部が細まり、短く外反する。口縁部が横ナデ、外面は縦方向の弱いヘラケズリ、内面は上半が横方向、下半が縦方向、斜方向のヘラナデ調整である。21、23は器形、調整とも19に類似する。23は外面に粘土が付着している。

22は体上部に最大径をもつ甕であるが、口縁部が前者より強く狭っている。口縁部は全体的に短く外反するが、開きぎみの部分、直口ぎみの部分などがあって歪んでいる。柔らかい粘土を用いて成形したもののようである。調整は口縁部が横ナデ、外面下半が縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ調整である。底部はヘラケズリ調整されている。20、24は器形、調整とも22に類似するが、20は口縁部が大きく外反している。

25～28は中型甕である。25～27は器形、調整が22に類似する。28は体部から底部である。器形は底部から急激に彎曲するもので、体部中ほどに最大径をもつ。調整は外面が縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデである。底部はヘラケズリ調整のようであるが、はっきりしない。

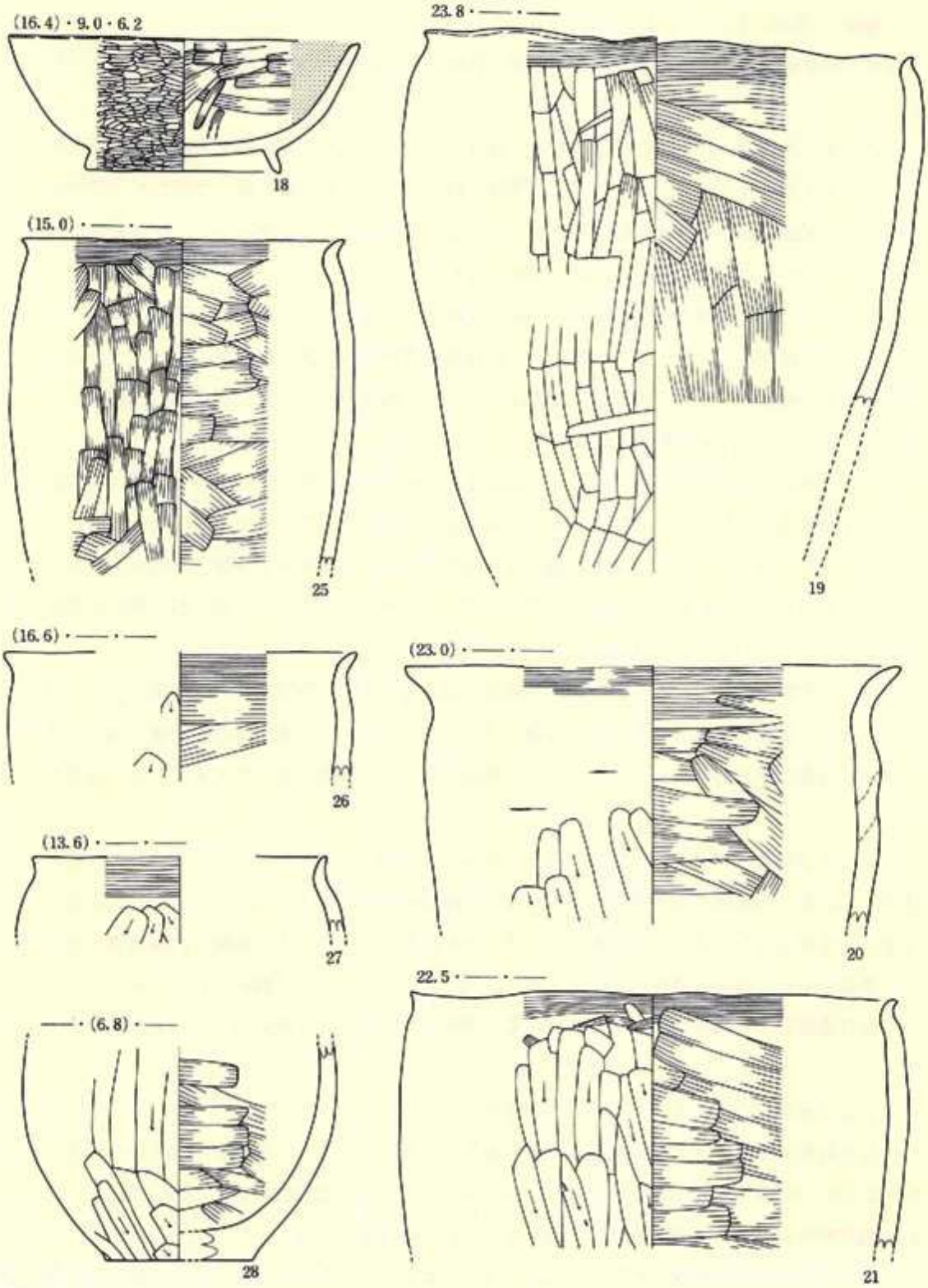
29、30は小型甕である。29は口径、器高、底部がほぼ等しい鉢形に近いものである。頸部が僅かにくびれ、口縁部が大きく外反している。口縁端部は水平に近くなっている部分もある。上半は粘土紐を巻き上げたのみであり、外面下半が縦方向のヘラケズリ調整、内面は横方向のナデ調整である。底部は僅かに上げ底であり、周辺部のみヘラケズリ調整されている。

30は口縁部形態、調整技法が19に類似する。器形は体部中央部に最大径をもつもののようである。

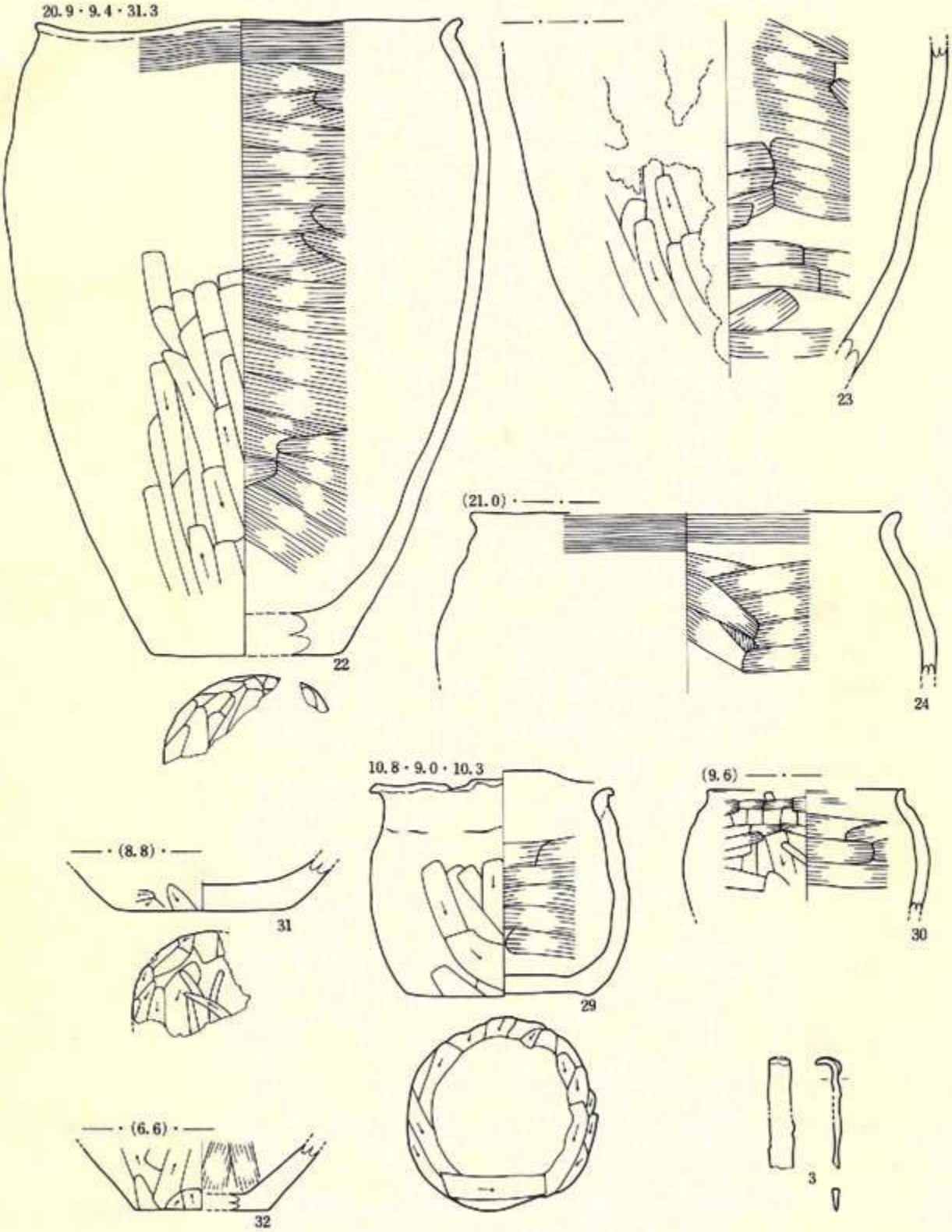
31、32は底部破片である。ヘラケズリ調整されている。

３は折れ曲っているが、断面観察によると刃部が形成されており、刀子の一部とみられる。幅が1.1cm、残存の長さが5.6cmである。以上の他に重さ24.3g の鉄塊がある。また、205g 、23g の椀形鉄滓がある。１点は直径 8.5cm、厚さが 3.5cmほどである。

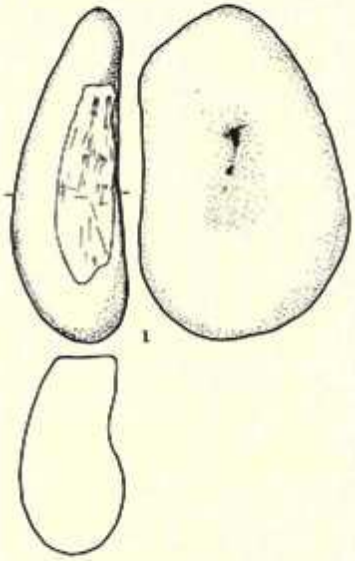
１は扁平な自然石の側縁を利用した砥石である。砥面は平坦をなし、幅 2.2cm、長さ 7.6cm である。



第16図　ＩＪ７竪穴住居跡出土遺物（1）



第17図　ＩＪ７竪穴住居跡出土遺物（2）



第18図　ＩＪ７竪穴住居跡出土遺物 (3)

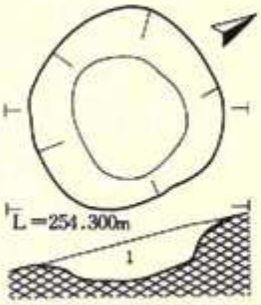
2．土壙

(1)　ＩＢ８土壙（第19図、写真図版10）

調査区南端に検出された円形の土壙である。直径は東西1.02m、南北0.98m、中央部における深さは0.20mである。壁は開口部ほどなだらかになり、底部は全体に南側に傾斜している。

埋土は灰白色の浮石が混じる黒色混土である。

遺物は出土していない。



1．10YR3/1　黒色混土　灰白色パミスが散在する

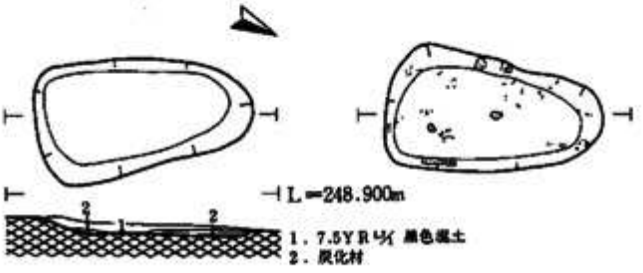
第19図　ＩＢ８土壙

3．炭窯

(1)　ⅡＢ３炭窯跡（第20図、写真図版10）

調査区北西寄りに検出される隋円形状の炭窯跡である。確認面における長さ1.14m、幅0.60mほどであり、深さは0.05mである。

壁はいずれも緩やかであり、底面は平坦である。壁面と底面には焼土部分が僅かに認められ、炭化材が乱雑にや、多量に散在する。炭化材以外の遺物は出土していない。



第20図　ＩＢ３炭窯跡

４．陥し穴状遺構

(1)　ＩＡ２陥し穴状遺構（円筒形）（第21図、写真図版11）

調査区西部の斜面上位に位置する。ＩＡ４－１・２陥し穴状遺構（円筒形）の北西6.5ｍである。検出面は基本層序Ⅱ層下位の暗褐色混土である。全体形は直径0.8m、深さ1.6mの円筒形をなす。開口部は斜面下位の崩落が著しく 1.2×1.0m の長円形となっている。

埋土は全体的に黒褐色混土、暗褐色混土がレンズ状に堆積しており、中位から下位にかけて壁の崩落土と思われるにぶい黄褐色土、褐色土が楔形に堆積し、自然堆積の状況を示している。

壁は崩落部分を除いてほぼ直に立ち上がり、上半が外反している。底面は平坦であり、中央南寄りに直径４cmの小穴をもつ。小穴の深さは34cmであり、逆茂木の痕跡と推定される。小穴の埋土は上から暗褐色混土、褐色土、明褐色土であり、明褐色土には空洞の部分が認められた。

遺物は発見されていない。

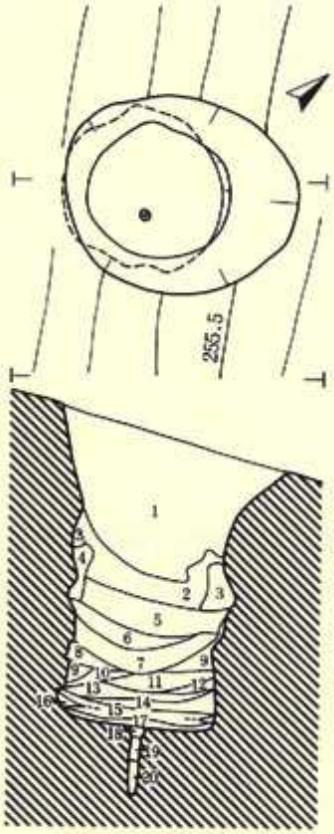
(2)　ＩＡ４－１陥し穴状遺構（円筒形）（第21図、写真図版11）

調査区西部の斜面上位に位置する。ＩＡ２陥し穴状遺構（円筒形）の南東6.5ｍである。また、ＩＡ４－２陥し穴状遺構に重複し、大部分が破壊されている。検出面は基本層序Ⅱ層下位の暗褐色混土である。

全体形は直径 1.1m 、推定の深さ 1.7m の円筒形であったと思われるが、下位の20cmを残すのみである。埋土は黒褐色混土、明褐色混土、明褐色土、灰褐色砂質土がレンズ状に堆積し、自然堆積状況を示す。

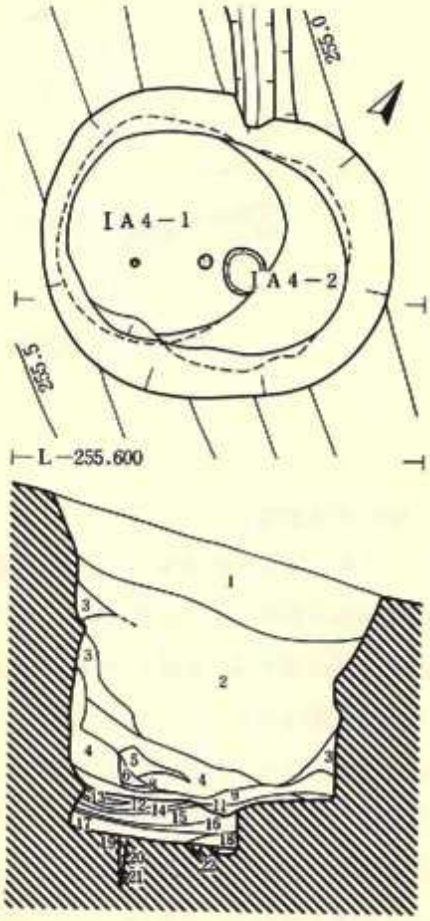
壁は西側が内傾し、東側が直に立ち上がる。底面は平坦であり、中央南寄りに直径３cmの小

ＩＡ２陥し穴状遺構



1．10 YR5/4　黒褐色混土　黄灰色、赤褐色浮石を含む
2．10 YR5/4　暗褐色混土
3．10 YR5/4　褐色土　壁崩落土
4．10 YR5/4　黒褐色混土
5．10 YR5/4　暗褐色混土
6．10 YR5/4　黒褐色混土
7．10 YR5/4　黒色土
8．10 YR5/4　にぶい黄褐色混土　ブロック状混土壁崩落土
9．10 YR5/4　褐色混土　壁崩落土
10．10 YR5/4　黒褐色混土
11．10 YR5/4　黒褐色混土
12．10 YR5/4　褐色混土　壁崩落土
13．10 YR5/4　暗褐色混土　褐色土がブロック状に混土
14．10 YR5/4　にぶい黄褐色混土
15．10 YR5/4　黒色土
16．10 YR5/4　黒褐色混土
17．10 YR5/4　暗褐色混土
18．10 YR5/4　暗褐色混土
19．7.5YR5/4　褐色土
20．10 YR5/4　明褐色土　空洞部分あり

ＩＡ４－１陥し穴状遺構
ＩＡ４－２陥し穴状遺構



1．10 YR3/4　黒色土
2．10 YR5/4　黒褐色混土　灰褐色黄灰色浮石を含む
3．7.5YR5/4　褐色混土　壁崩落土
4．10 YR5/4　黒褐色混土
5．7.5YR5/4　褐色混土　ブロック状50%壁崩落土
6．10 YR5/4　褐色混土　80%壁崩落土
7．10 YR5/4　明黄褐色土　壁崩落土
8．10 YR5/4　黒褐色混土
9．10 YR5/4　暗褐色混土
10．10 YR5/4　明黄褐色土　壁崩落土
11．10 YR5/4　黒褐色混土
12．10 YR5/4　黒褐色混土　赤褐色浮石を含む
13．4.5YR5/4　灰褐色砂質土　堅く締っている
14．10 YR5/4　明黄褐色土
15．10 YR5/4　黒褐色混土　堅い
16．10 YR5/4　明黄褐色混土
17．10 YR5/4　黒色土　堅い
18．10 YR5/4　黒褐色混土
19．10 YR5/4　黒褐色混土
20．　空洞
21．10 YR5/4　明黄褐色混土
22．10 YR5/4　黒褐色土

第21回　陥し穴状遺構 (1)

穴をもつ。小穴の深さは24cmであり、先端が鋭く尖っている。逆茂木の痕跡と考えられる。小穴の埋土は上から黒褐色混土、明黄褐色混土で、中ほどが空洞となっていた。また、中央東寄りに直径6cm、深さ5cm、東端に22×12cm、深さ2cmの浅い2小穴をもつ。埋土は両者とも黒褐色土である。

遺物は発見されていない。

(3) ＩＡ４－２陥し穴状遺構（円筒形）（第21図、写真図版11）

調査区西部の斜面上位に位置する。ＩＡ２陥し穴状遺構（円筒形）の南東6.5mである。北端の一部がＩＢ－３陥し穴状遺構（溝状）に破壊されている。当遺構がＩＡ４－１陥し穴状遺構の埋土を切って構築されており、造り替えたものではなくある程度埋没した段階に同位置に構築されたものと思われる。検出面は基本層序Ⅱ層下位の暗褐色混土である。

平面形は開口部が1.80×1.56m、底部が1.45×1.44mの長円形であり、全体形は深さが1.46mの円筒形である。埋土は黒色土、黒褐色土が主体をなし、壁際には崩落土と思われる褐色土、明黄褐色土が楔形に堆積し、自然堆積状況を呈している。なお、西側中位には投げ込みと思われる焼土が堆積しており、焼土には炭化物が含まれている。

壁は崩落部を除いてほぼ直に立ち上がり、上半が外反している。底面は平坦であるが、中央部が6cmほど窪んでいた。

遺物は発見されていない。

(4) ＯＩ７陥し穴状遺構（溝状）（第22図、写真図版12）

調査区西端の斜面上位に位置する。平面形は長径2.46m、短径36cmの溝状をなす。深さは最大1.20mである。長軸方向はN76°Eで北に若干ふれるもののほぼ東西方向を指し、等高線に直交している。埋土は黒色土、褐色土、黒褐色混土、暗褐色混土等6層からなり、U字状堆積の自然堆積状況を示している。

断面形は短軸方向が幅の狭いV字状をなす。壁は西側が内彎しながら立ち上がり、東側は下半が袋状をなす。底部は幅が12cmと狭く、長軸方向では西側を除き平坦である。なお、西側は調査区外に続いていたこともあって確認していないが、崩落したものと推定される。

遺物は発見されていない。

(5) ＩＡＯ陥し穴状遺構（溝状）（第22図、写真図版12）

調査区の西北部に位置し、北半が調査区外に続いている。平面形は長径が2.64m以上、短径50cmの溝状をなす。深さは最大1.30mである。長軸方向はN76°Wで若干南にふれるものの東西

方向を指し、等高線にほぼ並行している。埋土は黒色土、暗褐色混土等６層からなり、Ｖ字状堆積をなし、自然堆積状況を示している。

断面形は長軸方向が端部に入り込む逆台形をなすと思われ、短軸方向はやゝ幅の広いＵ字状をなす。壁は東側が内傾し、北壁東部が崩落して広がっている。底部は幅が22cmであり、長軸方向では東側端部が上がりぎみとなり、中央部に５cmほどの段が付く。

遺物は発見されていない。

(6) ＩＢ３陥し穴状遺構（溝状）（第22図、写真図版12）

調査区の西部に位置する。南端がＩＡ４－２陥し穴状遺構（円筒形）を破壊しているが、端部については調査の手違いにより確認していない。平面形は長径2.80cm、短径26cmの幅の狭い溝状をなし、深さが最大98cmである。長軸方向はN42°Wを指し、等高線にほゞ平行している。

埋土は黒色土、黒褐色混土、暗褐色混土等４層からなり、いずれもＵ字状堆積をなし、自然堆積状況を示す。断面形は長軸方向が長方形を呈するものと思われ、短軸方向は幅の狭いＵ字状をなす。壁は北側が直線的に立ち上がる。底部は幅が８cmと極めて狭く、長軸方向では平坦でしかも水平である。

遺物は発見されていない。

(7) ＩＢ８陥し穴状遺構（溝状）（第22図、写真図版12）

本遺構は浅く、端部の立ち上がりが緩やかに彎曲するなど、他の陥し穴状遺構と趣を異にするが、形状が類似することから陥し穴状遺構として記述するものである。

調査区の西部に位置する。平面形は長径2.06m、短径34cmの溝状をなす。深さは35cmである。長軸方向はN46°Eであり、等高線にほゞ直交している。埋土は黒色土、黒褐色混土等３層からなる自然堆積である。断面形は長軸方向が浅い鍋底状をなし、短軸方向がＵ字状をなす。壁は両方向とも端部が緩やかに立ち上がり、底部は平坦である。

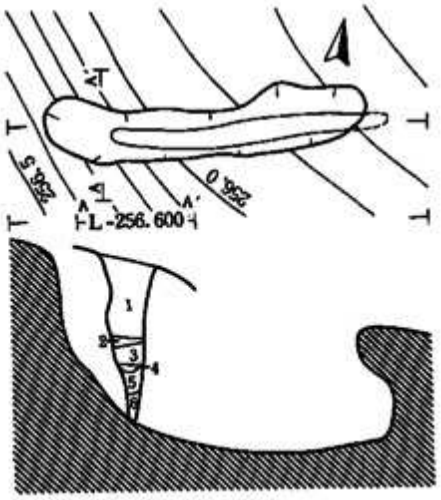
遺物は発見されていない。

(8) ＩＣＯ陥し穴状遺構（溝状）（第23図、写真図版13）

調査区の北西部に位置する。北端部が調査区外に続いている。平面形は長径3.20m、短径68cmの溝状をなす。深さは最大1.50mである。長軸方向はN72°Wで若干南にふれるもののほゞ東西方向を指し、等高線に斜交している。埋土は黒色土、黒褐色混土がＵ字状に堆積し、自然堆積である。

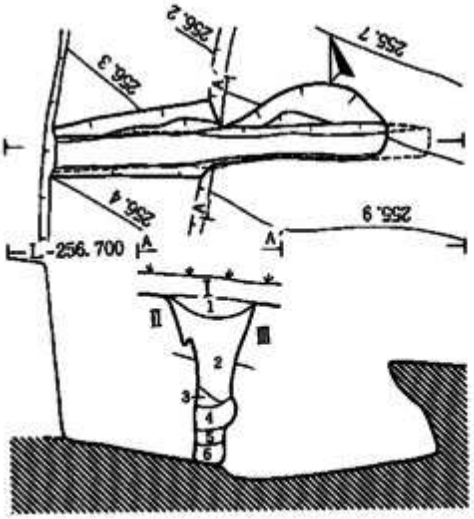
断面形は長軸方向が両端部に入り込む逆台形状をなし、短軸方向はやゝ幅の広いＵ字状をな

0Ⅰ7陥し穴状遺構



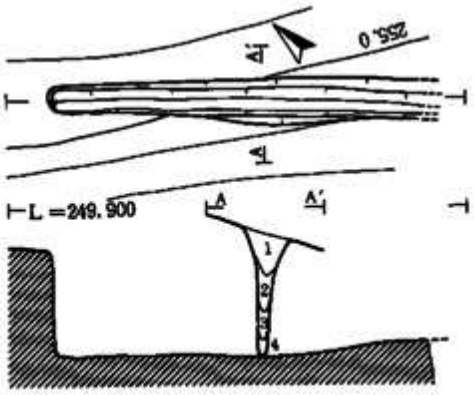
1. 7.5YR1/7 黒色土
2. 7.5YR5/6 褐色土　赤褐色浮石
3. 7.5YR3/1 黒褐色混土
4. 7.5YR3/3 暗褐色混土　壁崩落土混入
5. 7.5YR5/6 褐色土　壁崩落土
6. 7.5YR3/1 黒色混土

ⅠA0陥し穴状遺構



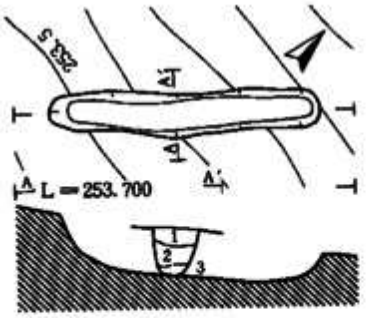
Ⅰ. 10YR3/1 黒褐色混土　旧耕作土、木根多い
Ⅱ. 10YR3/1 黒褐色混土　灰白色・褐色浮石を含む
1. 10YR3/1 黒色土　灰白色浮石を含む
2. 10YR3/1 黒色土　灰白色、褐色浮石を含む
3. 10YR3/3 暗褐色混土
4. 10YR3/1 黒色土　灰白色浮石を含む
5. 10YR3/3 暗褐色混土　赤褐色浮石を含む(20%)
6. 10YR3/4 暗褐色混土

ⅠB3陥し穴状遺構



1. 10YR1/7 黒色土
2. 10YR3/1 黒褐色混土
3. 10YR3/1 黒褐色混土
4. 10YR3/3 暗褐色混土

ⅠB8陥し穴状遺構



1. 10 YR3/1 黒色土　灰白色浮石を含む
2. 7.5YR3/1 黒色土
3. 10 YR3/1 黒褐色混土

第22図　陥し穴状遺構 (2)

す。壁は東西とも内傾している。底部は幅が22cmであり、長軸方向では端部が若干上がりぎみである。

西端部の埋土上位から縄文土器5点が発見されている。

(9) ＩＣ３陥し穴状遺構（溝状）（第23図、写真図版13）

調査区の西部に位置する。東半上部がＩＣ３竪穴住居跡によって破壊されている。平面形は長径3.60m、短径67cmの溝状をなす。深さは最大1.50mである。なお、開口部は北壁西側と南壁東側が崩落して逆Ｓ字状に曲っていた。長軸方向はN76°Eであり、ほゞ東西方向を指し、等高線に直交している。

埋土は上位が黒色土、中位が壁の崩落土と思われる暗褐色土、黄褐色土、明黄褐色土がブロック状に混在し、下位は褐色混土、黒褐色混土、にぶい黄褐色混土等6層が水平堆積である。自然堆積状況を呈している。

断面形は長軸方向が両端に入り込む逆台形をなし、短軸方向はＶ字状に近いＵ字状をなす。壁は西側が内傾し、東壁端で屈折するか全体に内傾している。底部は幅16cmであり、長軸方向では幾分凹凸するものの平坦で傾斜に沿って東側が若干下がっている。

遺物は発見されていない。

(10) ＩＥ２陥し穴状遺構（溝状）（第24図、写真図版13）

調査区の中央北部に位置する。平面形は長径2.89m、短径65cmの溝状をなす。深さは最大、1.50mである。長軸方向はN68°Eであり、等高線に直交している。

埋土は上位が黒色土、黒褐色混土、中位が壁の崩落土と思われる黄褐色土、にぶい黄褐色混土等が楔形に堆積し、下位は暗褐色混土が堆積して自然堆積状況を呈している。

断面形は長軸方向が両端に入り込む逆台形をなす。短軸方向はＵ字状をなし、上半が崩落のため大きく開口している。壁は西側が僅かに内傾し、東側は内傾しながら立ち上がる。底部は幅が12cmと狭く、長軸方向は水平でしかも平坦である。

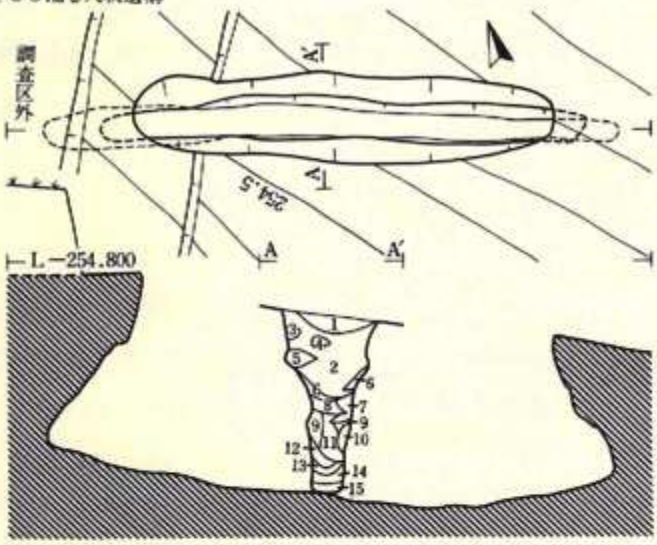
遺物は発見されていない。

(11) ＩＧ５陥し穴状遺構（溝状）（第23図、写真図版13）

調査区の中央に位置する。埋没谷の底部にあたっている。平面形は長径2.08m、短径34cmの溝状をなす。深さは最大1.16mである。長軸方向はN35°Eであり、等高線にほゞ直交している。

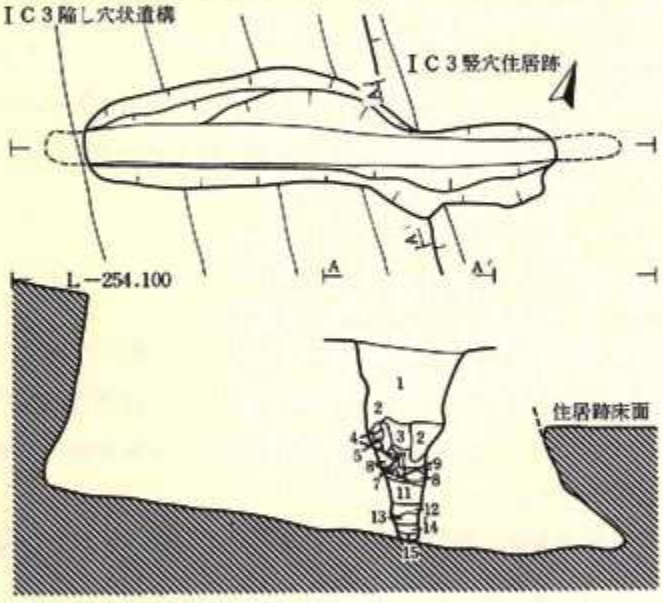
埋土は黒色土、黒褐色混土が主体をなし、壁の崩落と思われる褐色混土、明黄褐色土、黄褐色土が楔形堆積をなす自然堆積である。

ＩＣ０陥し穴状遺構



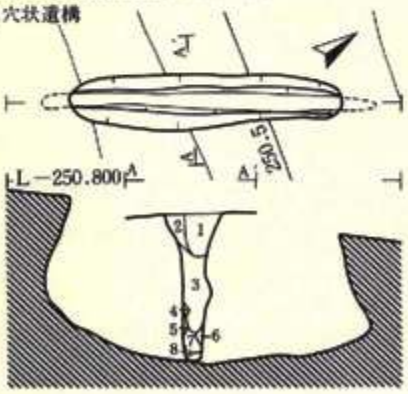
1．7.5YR 1/4　黒色土
2．10 YR 3/4　黒色土　黄灰色，赤褐色浮石を含む
3．10 YR 3/3　黒褐色混土
4．10 YR 3/3　暗褐色ブロック
5．10 YR 3/4　褐色土
6．10 YR 3/4　暗褐色混土　赤褐色浮石を含む(20%)
7．10 YR 3/4　暗褐色混土　壁崩落土
8．10 YR 1/4　黒色土
9．7.5YR 3/4　黒色土
10．7.5YR 3/4　褐色混土　赤褐色浮石を含む
11．7.5YR 3/3　暗褐色混土
12．10 YR 3/4　褐色混土　赤褐色浮石(60%)
13．10 YR 3/3　明黄褐色土　壁崩落土
14．10 YR 3/3　黒褐色混土　赤褐色浮石を含む(10%)
15．10 YR 3/4　黒褐色土

ＩＣ３陥し穴状遺構



1．7.5YR 3/4　黒色褐土
2．10 YR 3/3　暗褐色土
3．7.5YR 3/4　黒色混土
4．10 YR 3/4　黒褐色土
5．10 YR 3/4　黒色混土
6．10 YR 3/4　黄褐色土　壁崩落土
7．10 YR 3/3　黒褐色土
8．10 YR 5/4　明黄褐色土　壁崩落土
9．7.5YR 1/4　黒色混土　赤褐色浮石を含む
10．10 YR 4/4　褐色混土　壁崩落土
11．10 YR 3/4　黒褐色混土
12．10 YR 5/4　にぶい黄褐色混土　壁崩落土
13．7.5YR 3/4　褐色混土
15．10 YR 3/4　にぶい黄褐色混土　壁崩落土

ＩＧ５陥し穴状遺構



1．10 YR 3/4　黒色土
2．10 YR 3/3　黒褐色混土
3．10 YR 3/4　黒褐色混土
4．7.5YR 3/4　黒褐色混土　赤褐色落石を含む
5．7.5YR 3/4　褐色混土　赤褐色浮石
6．7.5YR 3/4　明褐色混土　壁崩落土
7．7.5YR 3/3　黒褐色混土
8．10 YR 3/4　黄褐色土　壁崩落土

第23図　陥し穴状遺構（３）

断面形は長軸方向が両端の入り込む袋状をなし、短軸方向は幅の狭いU字状をなす。壁は南側が内傾しながら立ち上がり、北側は内傾するが全体に外反しながら立ち上がる。底部は幅が12cmと狭く、長軸方向では両端が上がり気味である。

遺物は発見されない。

⑿　ＩＧ６陥し穴状遺構（溝状）（第24図、写真図版14）

調査区の中央に位置する。埋没谷の底部にあたっている。平面形は長径1.80cm、短径60cmの溝状をなす。深さは最大1.30m である。長軸方向はN13°Eで若干東にふれているがほゞ南北方向を指し、等高線に直交している。なお、開口部は西壁北部と東壁南部が崩落しているため、底部と方向が異なっている。

埋土は黒色土、黒褐色混土で占められるが、下位に壁の崩落土とみられる暗褐色混土が楔形に堆積している。自然堆積である。

断面形は長軸方向が両端の入り込む袋状をなし、短軸方向は全体的に幅の狭いV字状をなすが、中位の南部浮石部分の崩落が著しく膨らみをもつ。壁は南北とも出入りのあるものの内傾しながら立ち上がる。底部は幅10cmと極めて狭く、長軸方向では北側が緩やかに上がっている。

遺物は発見されていない。

⒀　ＩＨ９陥し穴状遺構（溝状）（第24図、写真図版14）

調査区東部の東端に位置する。東半が調査区外に続き、西半の上位がＩＨ８竪穴住居跡によって破壊されている。平面形は長径2.52m 以上、短径37cmの溝状をなす。深さは最大94cmである。長軸方向はN65°Eであり、等高線に平行している。埋土は黒褐色混土、暗褐色混土、褐色混土、黄褐色土などからなり、自然堆積の状況を示している。

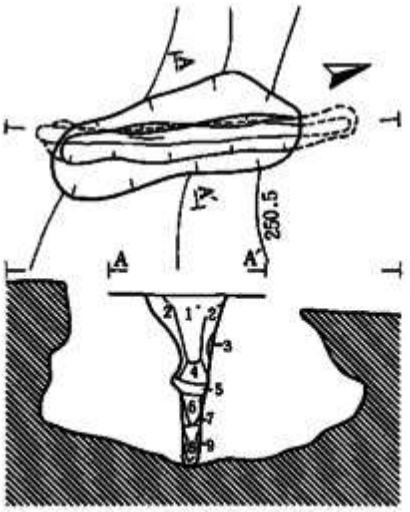
断面形は長軸方向が長方形をなすと推定され、短軸方向は幅の狭いU字状をなす。壁は西側が直に立ち上がり、底部は幅８cmと極めて狭く水平でしかも平坦である。

⒁　ⅡＤ２陥し穴状遺構（溝状）（第24図、写真図版14）

調査区東部の中央に位置する。埋没谷の底部にあたっている。平面形は長径2.66m 、短径56cmの溝状をなす。深さは最大1.40m である。長軸方向はN84°Eでほゞ東西方向を指し、等高線と直交している。埋土はほとんど黒色土、黒褐色混土からなるU字状堆積であり、自然堆積の状況を呈している。

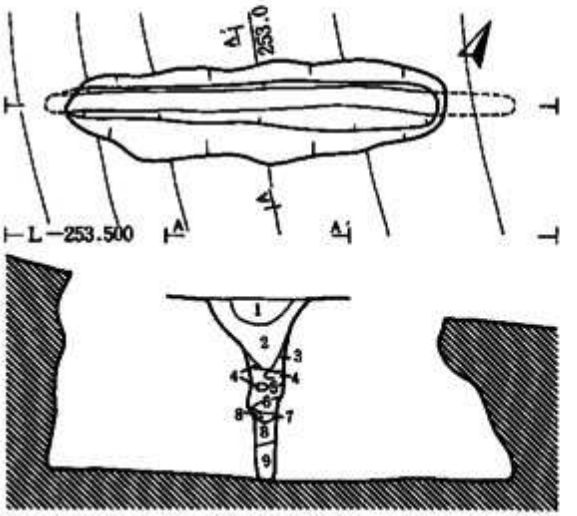
断面形は長軸方向が東側に入り込む逆台形状をなし、短軸方向はU字状である。壁は西壁がほゞ直に立ち上がり、東壁が内傾しながら立ち上がる。底部は幅が13cmであり、水平でしかも平坦である。遺物は発見されていない。

ＩＧ６陥し穴状遺構



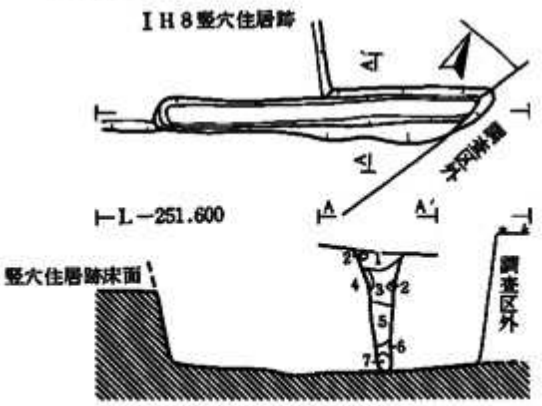
1．10ＹＲ1/4　黒色土　柔らかい
2．10ＹＲ3/4　黒色混土　黄灰色、赤褐色浮石を含む
3．10ＹＲ3/4　黒褐色混土　壁崩落土
4．10ＹＲ3/4　黒色土　浮石を若干含む
5．10ＹＲ3/4　黒褐色混土　赤褐色浮石を含む
6．10ＹＲ3/4　黒色土
7．10ＹＲ3/4　暗褐色混土　黄色土混土、壁の崩落土
8．10ＹＲ3/4　黒色土
9．10ＹＲ3/4　明褐色混土　黄色混土、壁の崩落土

ＩＥ２陥し穴状遺構



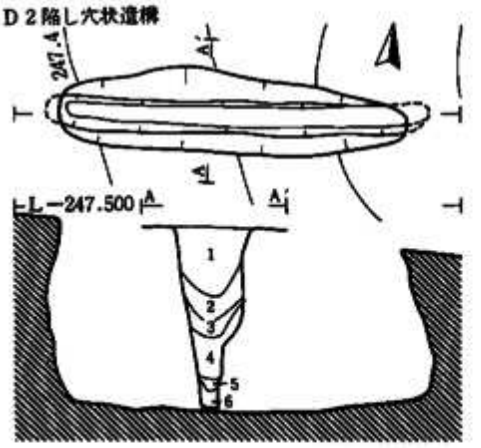
1．10ＹＲ1/4　黒色土　黄色、赤褐色浮石を含む
2．10ＹＲ3/4　黒褐色混土　黄色、赤褐色浮石を含む
3．10ＹＲ3/4　褐色土　黄色、赤褐色浮石を含む
4．10ＹＲ3/4　黄褐色土　壁崩落土
5．10ＹＲ3/4　黒褐色混土　黄色、赤褐色浮石を含む
6．10ＹＲ3/4　黄褐色土　壁崩落土
7．10ＹＲ3/4　黒褐色混
8．10ＹＲ3/4　にぶい黄褐色混土　壁崩落土
9．10ＹＲ3/4　暗褐色混土

ＩＨ９陥し穴状遺構



1．10ＹＲ3/4　黒褐色混土　赤褐色浮石を含む
2．10ＹＲ3/4　黄褐色ブロック　壁崩落土
3．10ＹＲ3/4　暗褐色混土　黄色土40%
4．10ＹＲ3/4　褐色土　壁崩落土
5．10ＹＲ3/4　褐色混土　壁崩落土
6．10ＹＲ3/4　黄褐色土　壁の崩落土
7．10ＹＲ3/4　暗褐色混土

ⅡＤ２陥し穴状遺構



1．10ＹＲ1/4　黒色土　灰白色、黄褐色浮石を含む
2．10ＹＲ3/4　黒褐色混土
3．10ＹＲ3/4　黒褐色混土
4．7.5ＹＲ3/4　黒褐色混土　灰褐色浮石を含む
5．7.5ＹＲ3/4　黒色土
6．7.5ＹＲ3/4　黒褐色混土　壁の崩落土混入
7．7.5ＹＲ3/4　褐色土　壁の崩落土

第24図　陥し穴状遺構（４）

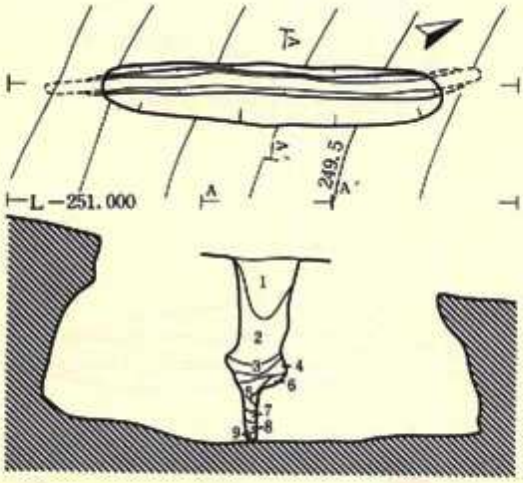
⑮　**Ｉ１３陥し穴状遺構**（溝状）（第25図、写真図版14）

調査区の中央に位置する。平面形は長径2.60m、短径46cmの溝状をなす。深さは最大1.38mである。長軸方向はN22°Eでほゞ南北方向を指し、等高線に直交している。埋土はほとんど黒褐色混土で、中位に壁の崩落土と思われる褐色混土、黄褐色土が楔形に堆積している。自然堆積の状況を示す。

断面形は長軸方向が両端の入り込む逆台形状をなす。短軸方向は中位が膨んで段をもつU字状をなし、上半は崩落のため幅広くなっている。また、中位は南部浮石の崩落が著しいために膨んでいる。壁は南北とも内傾しながら立ち上がり、底部は幅が80cmと極めて狭く、水平でしかも平坦である。

遺物は発見されていない。

Ｉ１３陥し穴状遺構



1．10YR5/1　黒褐色混土　黄灰色赤褐色浮石を含む
2．10YR5/3　黒褐色土　〃　〃
3．10YR3/1　黒褐色混土　黄褐色土ブロック状に混入
4．10YR5/4　褐色混土　赤褐色浮石
5．10YR3/3　黒褐色混土　壁崩落土混入
6．　黄褐色ブロック　壁の崩落土
7．10YR3/3　黒褐色混土　壁崩落混入
8．10YR3/3　黒褐色混土
9．10YR3/4　暗褐色混土

第25図　陥し穴状遺構（5）

Ⅱ　遺構外出土の遺物

1．平安時代の遺物（第26図、写真図版20）

遺構以外から発見された遺物は土師器284点、須恵器2点である。土師器、須恵器はいずれも破片で、器形の復元できるものはない。これらは調査区の東平坦部と西端部に集中し、南側の斜面上位では全く発見されていない。東平坦部ではⅠＨ８・ⅠＪ７住居跡を中心に半径10mに散在し、西端部ではⅡＡ１～ⅡＥ１グリッドに集中していた。

(1)　土師器

土師器は坏1点、高台付坏1点の他は甕で、圧倒的に甕が多くなっている。54は内面が黒色処理された坏の底部破片である。底部は回転糸切無調整である。55は内面黒色処理された高台付坏の底部破片である。高台は「ハ」の字状に取り付き、底部は回転糸切無調整のようである。

33～53が甕で、33～47が口縁部破片である。口縁部形態には①直口ぎみのもの3点（33・34・47）、②端部が細まり短く緩く外反するもの3点（35・36・39）、③端部が細まり、強く外反するもの2点（41・43）、④直口ぎみであるが僅かに外反するもの2点（37・38）、⑤緩やかに大きく外反するもの5点（40・42・44・45・46）がある。調整は基本的に口縁部が横ナデ、外面が無調整か縦方向のヘラケズリ、内面が横方向のヘラナデである。ただし、②の外面は弱いヘラケズリ調整である。なお、①、②を除いて粗雑な成形で、37・40は大きく歪んでいる。

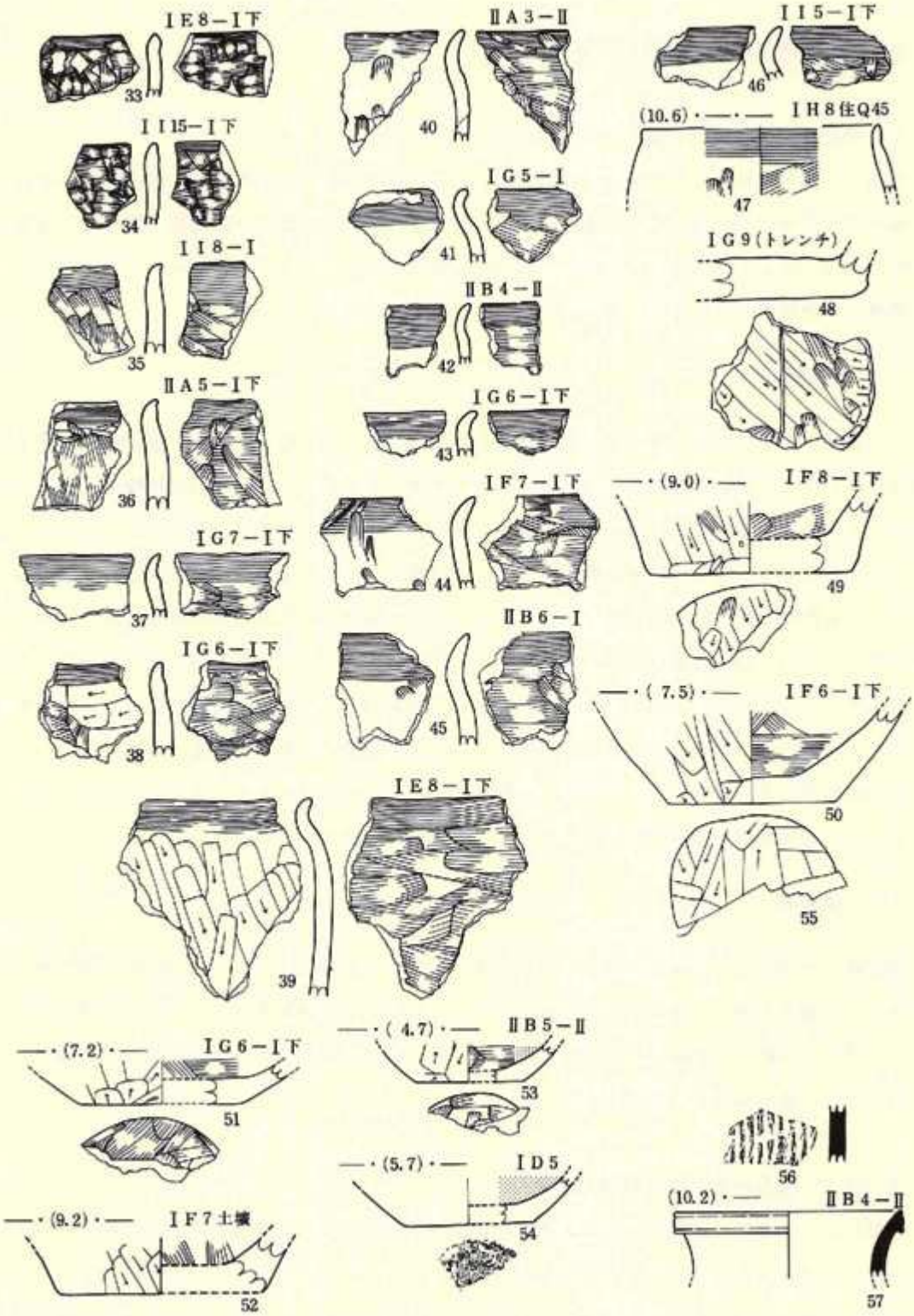
48～53は底部破片である。いずれも底部はヘラケズリ調整されている。

(2)　須恵器

56は甕の体部で、外面が平行線上の叩き目痕をもち、内面は無文である。色調は内外面・胎土とも淡褐色を呈し、半焼成されたものである。57はロクロ成形された壺の口縁部破片である。折り返し口縁で、8mmほどの縁帯となっている。頸部は緩やかに外反している。色調は青灰色をなし、焼成は良好で堅緻である。

2．縄文・弥生時代・中近世等の遺物

遺構外から出土した遺物は、その大部分が調査対象区の東側からの出土である。土器・石器・石製品・古銭に大別し、以下その概略を記述する。



第26図　遺構外出土の遺物(土師器．須恵器)

(1) 土器(第27～29図・写真図版21～24)

出土した土器は縄文土器・弥生土器の2種類で550点ほど出土している。ほとんどが縄文土器であり、弥生土器と確認したのは復元した1点だけである。以下9群に分類し、更に各群を細分した。

第Ⅰ群土器　縄文時代早期に属し、更に3類に細分される土器

1類　貝殻条痕による器面調整される土器

2類　物見台式に比定される土器

3類　ムシリⅠ式に比定される土器

第Ⅱ群土器　縄文時代前期に属し、更に2類4項に細分される土器

1類　前期前葉に属し、春日町式に比定される土器

2類　前期後葉に属し、更に3項に細分される。

A　円筒下層B式に比定される土器

B　円筒下層 d_1 式に比定される土器

C　円筒下層 d_2 式に比定される土器

第Ⅲ群土器　縄文時代後期後葉に属する土器

第Ⅳ群土器　縄文時代晩期に属し、更に2類に細分される土器

1類　晩期前葉に属し、大洞B式に比定される土器

2類　晩期中葉に属する土器

第Ⅴ群土器　繊維入りの縄文土器

第Ⅵ群土器　繊維入りの縄文土器で、前期後葉初頭と考えられる土器

1類　前期後葉に属し、円筒下層a式と考えられる土器

2類　前期後葉初頭に属すると考えられる土器

第Ⅶ群土器　縄文時代後期か晩期に属すると考えられる土器

第Ⅷ群土器　縄文時代晩期か弥生時代に属すると考えられる土器

第Ⅸ群土器　弥生時代に属する土器

第Ⅰ群土器

縄文時代早期に属する土器である。以下3類に細分した。

第Ⅰ群1類

58は表裏を貝殻条痕により器面調整された体部片である。焼成は良い。他に4点出土した。

第Ⅰ群2類

59は円孤をえがく沈線（中央及び上下に）と、中央の沈線の上には貝殻腹縁を倒して刺突する体部片である。焼成は良い。物見台式に比定される。1点だけの出土である。

第Ⅰ群3類

60は横位に一本の細隆起線が走り、その下に更に細い細隆起線が複数斜めに走る体部片である。胎土は砂っぽい。ムシリⅠ式に比定される。1点だけの出土である。

第Ⅱ群土器

縄文時代前期に属する土器である。以下2類4項に細分した。

第Ⅱ群1類

61～66がこの類に属する。

61は波状を呈する口縁部片である。縄文を地文とし、沈線を幾条も横走させる。波状の口縁部付近の沈線（2条）は口縁部と同様波形を呈する。沈線に細かい線状痕が横走する。62～64は61に類する口縁部片である。63によると縄文を地文とし、口縁部に沈線が3条横走する。口唇部は上から器表側に強く押しなでている。65・66は62～64と同一個体と推定される底部片である。縄文を地文とする。丸底と推定される。全点繊維を含み、焼成も良い。春日町式に比定される。

第Ⅱ群2類A

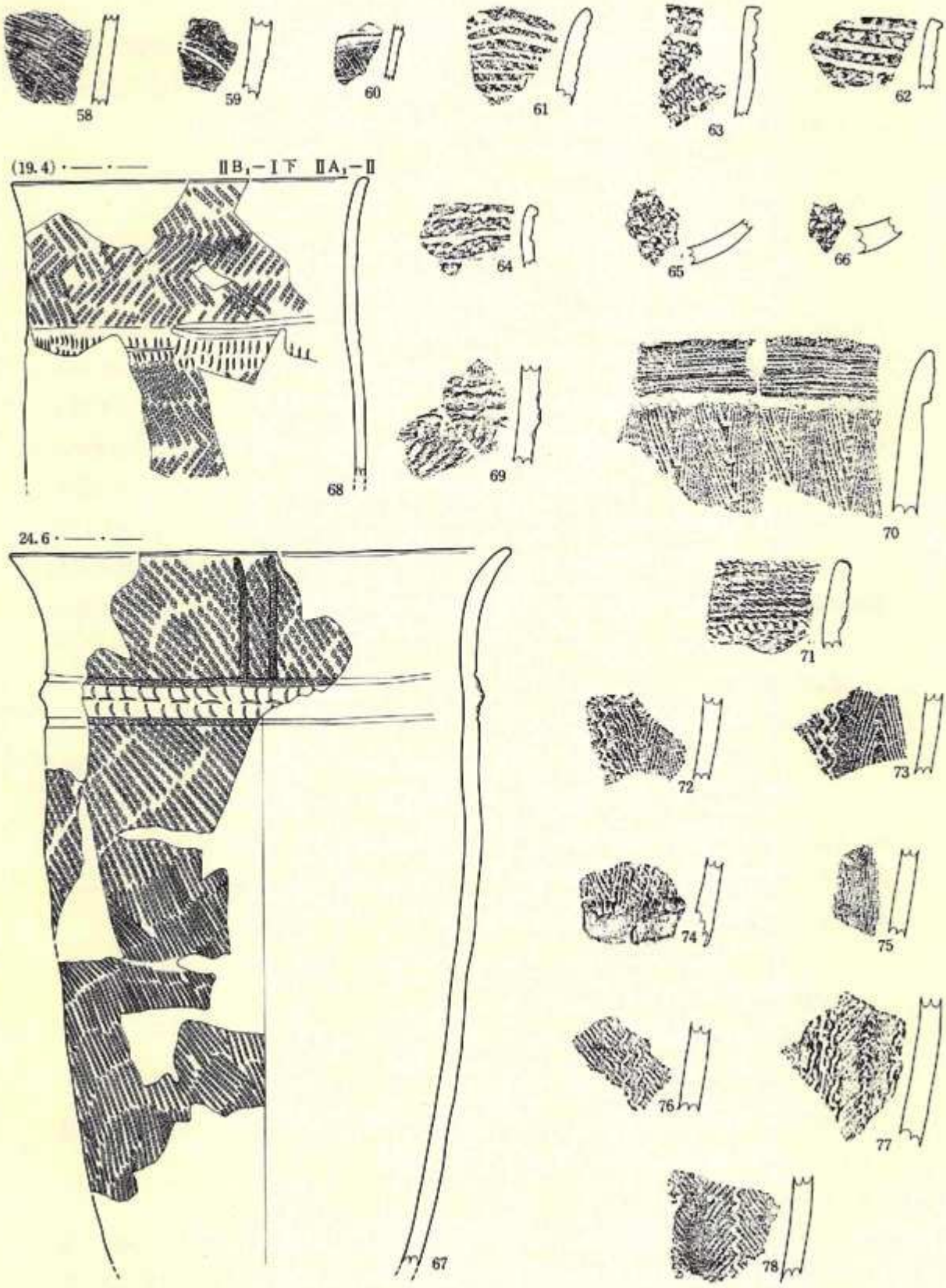
67～69がこの類に属する。いずれも口縁部近くに隆帯を巡らし、口縁部文様体と体部文様帯を区画する。

67は口縁部近くに瓜形を付した隆帯を巡らし、口縁部及び体部上半に複節縄文、体部下半に撚糸文を施文する。更に口縁部には縦位、隆帯の上下には横位にそれぞれ複節縄文を押圧する。68は瓜形を付した隆帯を巡らし、口縁部及び体部に羽状縄文を施文する。69は隆帯の上には単節斜縄文、下には撚糸文を施文する。隆帯には半載竹管を横位に刺突し、その後縦位に刺突する。更に隆帯と口縁部との間に縦長の刺突を付す。3点とも繊維を若干含み、焼成も良い。円筒下層B式に比定される。

第Ⅱ群2類B

70～78がこの類に属する。

70は口縁部には横位に縄文を押圧し、体部には木目状撚糸文を施文する。口唇部には縄文を縦位に押圧する。71は口縁部には横位に縄文を押圧し、体部にはあやくり文を横位に施文する。その間に縦長の刺突を横位に1段付す。口唇部には縦位に縄文を押圧する。72・73は木目状撚糸文にあやくり文が縦位に施文される体部片である。72は上にあやくり文が横位に施文されている。74は木目状撚糸文にあやくり文が縦位に施文される底部片である。75は木目状撚糸文が施



第27図　遺物外出土の遺物（縄文土器１）

た体部片である。全点器裏がみがかれる。76・77はあやくり文を縦位に施文する体部片である。76は単節斜縄文、77は羽状縄文を地文とする。78は本類に属すると考えられる体部片である。結節羽状縄文を縦位に施文する。他に1点出土した。円筒下層d式に比定される。

第Ⅱ群2類C

79～81がこの類に属する。

79はほぼ完形の土器である。平底から上部に向かって開くが円筒状に立ち上がり、口縁部近くでわずか張り出した後くびれ、そこから強く外反して口唇部に至る器形をもつ。口縁部は4波状口縁で、これから隆帯が垂下する。口縁上部には縦位に、口縁部には横位に縄文が押圧され、体部には複節縄文が施文される。80・81は79と同様強く外反する口縁部をもつ。80は平縁と思われる口唇部の一部に幅30mm・高さ5mm強の隆帯を横位に貼り付ける。施文は、口唇部は隆帯部分には縦位に縄文を深めに押圧した後左右から押しつぶし、他の口唇部には半載竹管文を連続刺突する。口縁部には縄文を押圧し、下部には口唇部に刺突したと同様の半載竹管文を一段連続刺突する。体部にはあやくり文を横位に施文する。81は口縁部に縦位に隆帯を貼り付ける。施文は、口縁部には縄文を隆帯をも含めて押圧し、下部には半載竹管文を一段連続刺突する。体部にはあやくり文を横位に施文する。全点内面がみがかれる。円筒下層d_2に比定される。

第Ⅲ群土器

82～86は縄文時代後期後葉に属する土器である。

82・83は同一個体である。82は裏に刻みが入った突起を持ち、口縁部には単節斜縄文を施文し、下半は磨消している。83は貼瘤がある。84・85も貼瘤がある。84は地文に縄文を施文し、更に沈線で区画して磨消す。85は縄文を磨消した後沈線で区画する。86は縦位の刻目を施文する口縁部片である。口唇部には深く、口縁部には浅い沈線を横走させた後浅めに施文している。全点内面がみがかれ、焼成も良い。

第Ⅳ群土器

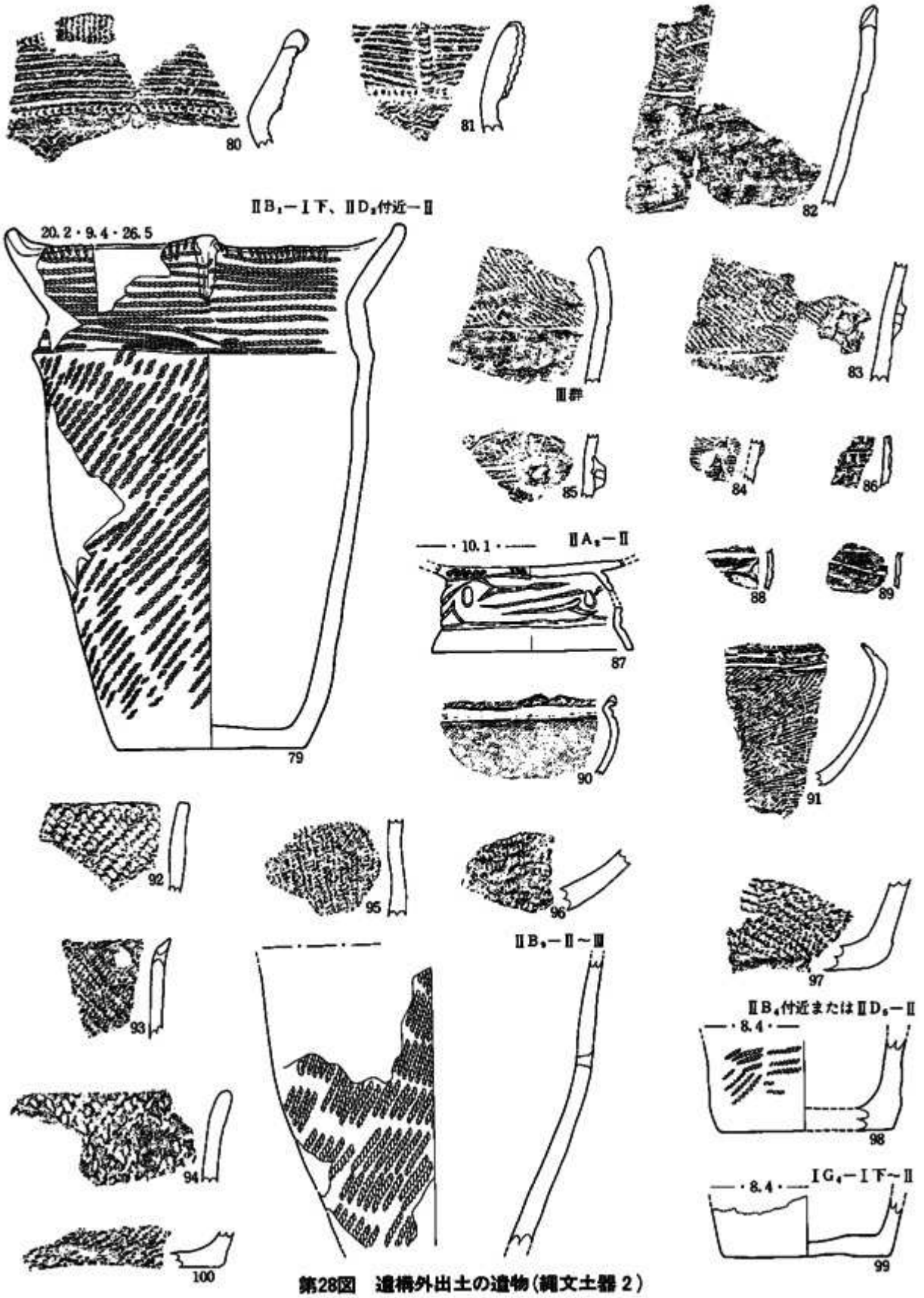
87～91は縄文時代晩期に属する土器である。以下2類に細分する。

第Ⅳ群1類

87～89は三叉文が付される土器片である。いずれも良く磨かれている。87は体部に単節斜縄文が施文されている。焼成は良い。大洞B式に比定される。

第Ⅳ群2類

90・91は地文に単節斜縄文を施文した鉢片である。いずれも口唇部に刻みを付す。90は2個一対の突起をもつ。共に焼成が良い。91は器裏がみがかれている。縄文時代晩期中葉に属する。



第28図　遺構外出土の遺物（縄文土器２）

第Ⅴ群土器

92～100は繊維入りの縄文土器である。96は丸底片である。95は乳房状の尖底部片である。時期は縄文時代早期から前期に位置づけられる。95・96は早期末葉から前期前葉に属すると考えられる。

第Ⅵ群土器

101～104は縄文時代前期後葉に属する土器である。以下２類に細分する。

第Ⅵ群１類

101・102は不整撚糸文を施文する口縁部片である。101は器裏がよくみがかれている。103は羽状縄文を施文し、底部にも縄文を付す土器である。いずれも焼成は良い。縄文時代前期後葉、円筒下層ａ式に比定されると考えられる。

第Ⅵ群２類

104は撚糸文を施文する口縁部片である。１類とは若干異なる。前期後葉初めに属すると考えられる。

第Ⅶ群土器

105～112は縄文時代後期か晩期に属すると考えられる土器である。

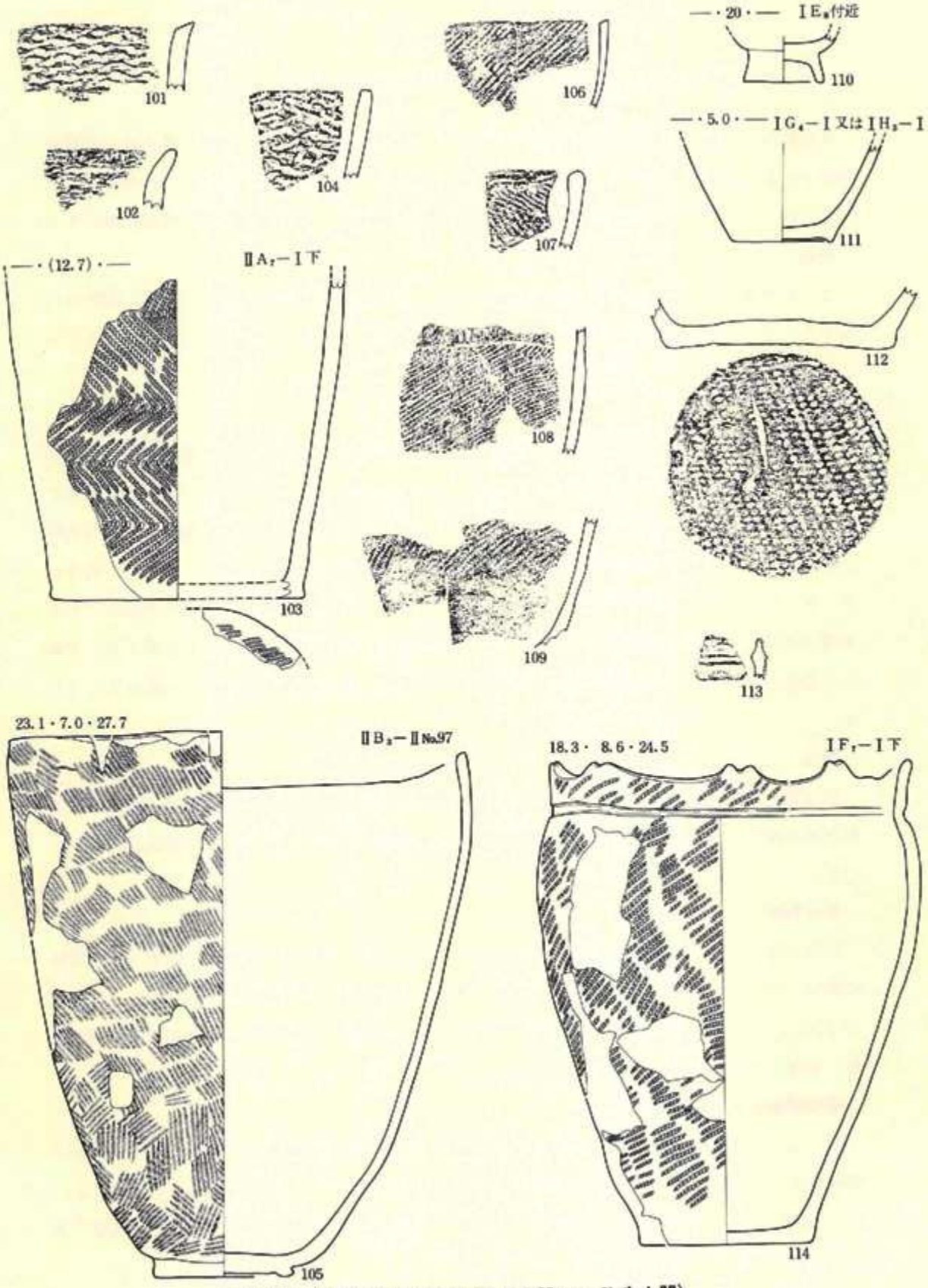
105は無節縄文が全体に施文されたほぼ完形の土器である。上げ底でくびれのある底部から内彎気味に緩やかに立ち上がり、口縁部で更に内彎して納まる。106・107は単節斜縄文を施文する口縁部片である。106は器厚が４㎜前後と薄い。108は口縁部近くの体部片である。無節縄文を地文とする。横走する沈線の上は磨り消している。109は鉢形土器と思われる体部から底部にかけての破片である。単節斜縄文を地文とする。112は網代痕を有する底部片である。111は上げ底で無文の底部片である。110は良く磨かれた台である。

第Ⅷ群土器

113は鋭角的な沈線を横走させる口縁部に近い土器片である。縄文時代晩期後葉、あるいは弥生時代にずれ込むとも考えられる。１点だけの出土である。

第Ⅸ群土器

114は弥生時代に属する土器である。平底から最大径となる体部上半部分までほぼ直線的に立ち上がる。口縁部下には沈線が１本巡る。口縁部は２個一対の山形突起を８個持つ。地文に単節斜縄文が施文される。色調は橙色(2.5ＹＲ％) である。胎土には小礫を若干含む。焼成は良い。他に同一個体になると思われる土器片が２点ある。



第29図　遺構外出土の遺物（縄文土器３・弥生土器）

(2) 石　器(第30～33図、写真図版25～29)

遺構外から発見された石器は、本書に掲載した石鏃5点、石匙4点、箆状石器3点、調整剥離痕がある石器5点、使用による剥落痕がある石器6点、石斧1点、凹石5点、特殊磨石3点石皿1点、石棒1点、砥石2点の33点と、剥片30余点である。大多数は調査区東側に散在する。

石鏃

2～4が無茎式、5・6が有茎式の石鏃である。4は抉り込みのある基部をもち、側縁は内彎する。2・3は側縁が若干外彎する。5の茎部は基部から突出し、側縁は若干外彎する。6の茎部は基部から突出し、端部は欠失する。側縁は強く外彎する。

石匙

いずれも縦型である。7は打瘤部につまみをもち、側縁部は若干外彎し、末端が尖る。調整剥離は、つまみ部分を除き、片面加工である。左側縁は全縁に、右側縁は下半に、各々末端にまで入念に施される。特に末端は側縁部に比較し、鈍角的である。使用による剥落痕は両側縁に観察できる。8はつまみ部分である。調整剥離は左側縁は片面、右側面は一部両面に施される。9・10は末端を含む下半部分である。9は、左側縁が若干外彎し、右側縁は直線的である。末端は直線的で両面に調整剥離を施こす。10は左側縁は内彎し、右側面は若干外彎する。末端は右側縁から外彎し、左側縁に至る。末端の左端裏には、先端部分にのみ調整剥離が施こされる。

掻器

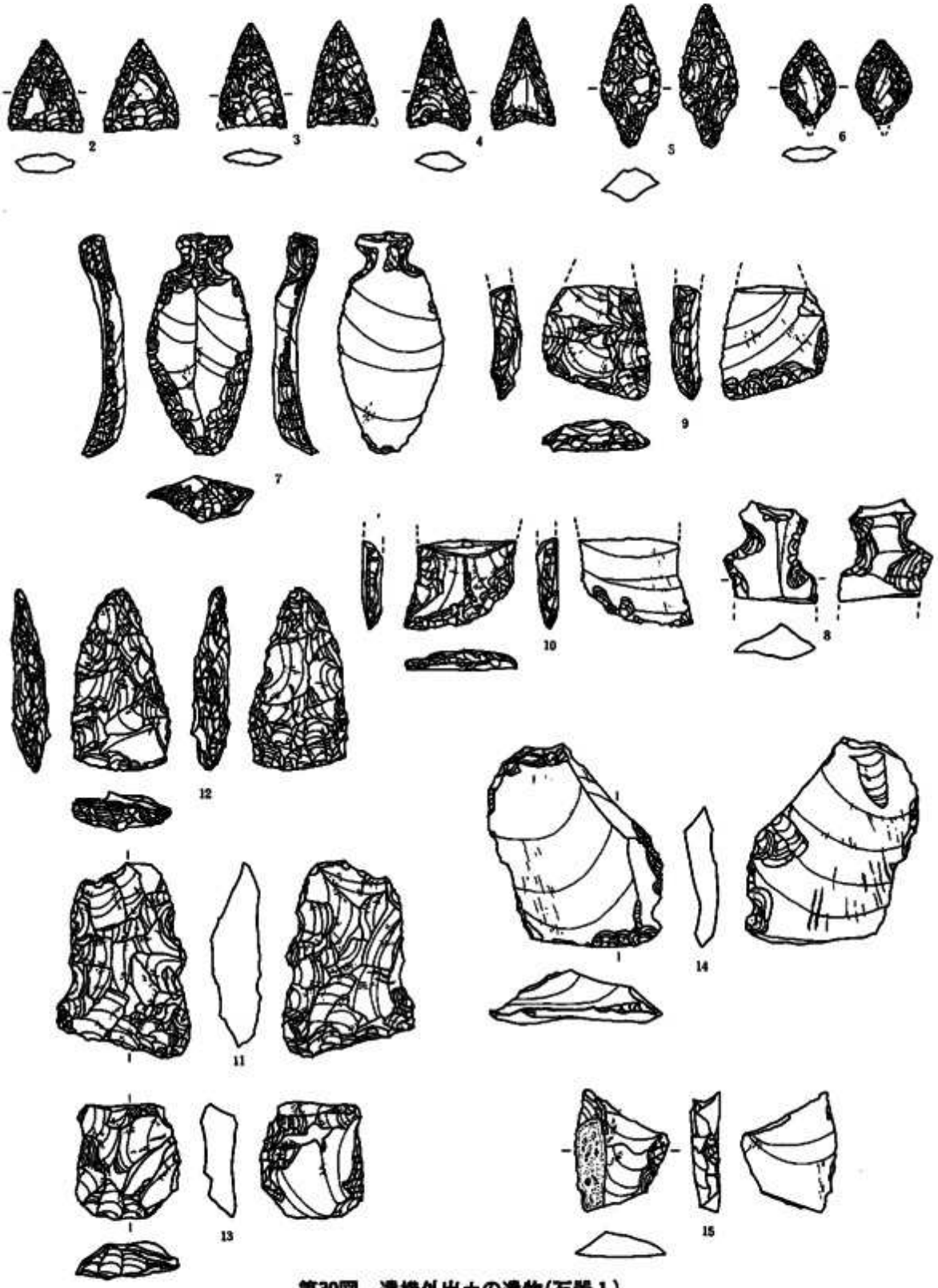
11は表の左側縁上半から上部にかけて、また裏面の左側縁上半から上部にかけ、使用による剥落痕が観察できる。側縁・上下共両極打法により調整剥離している。上下を最後に剥離している。

箆状石器

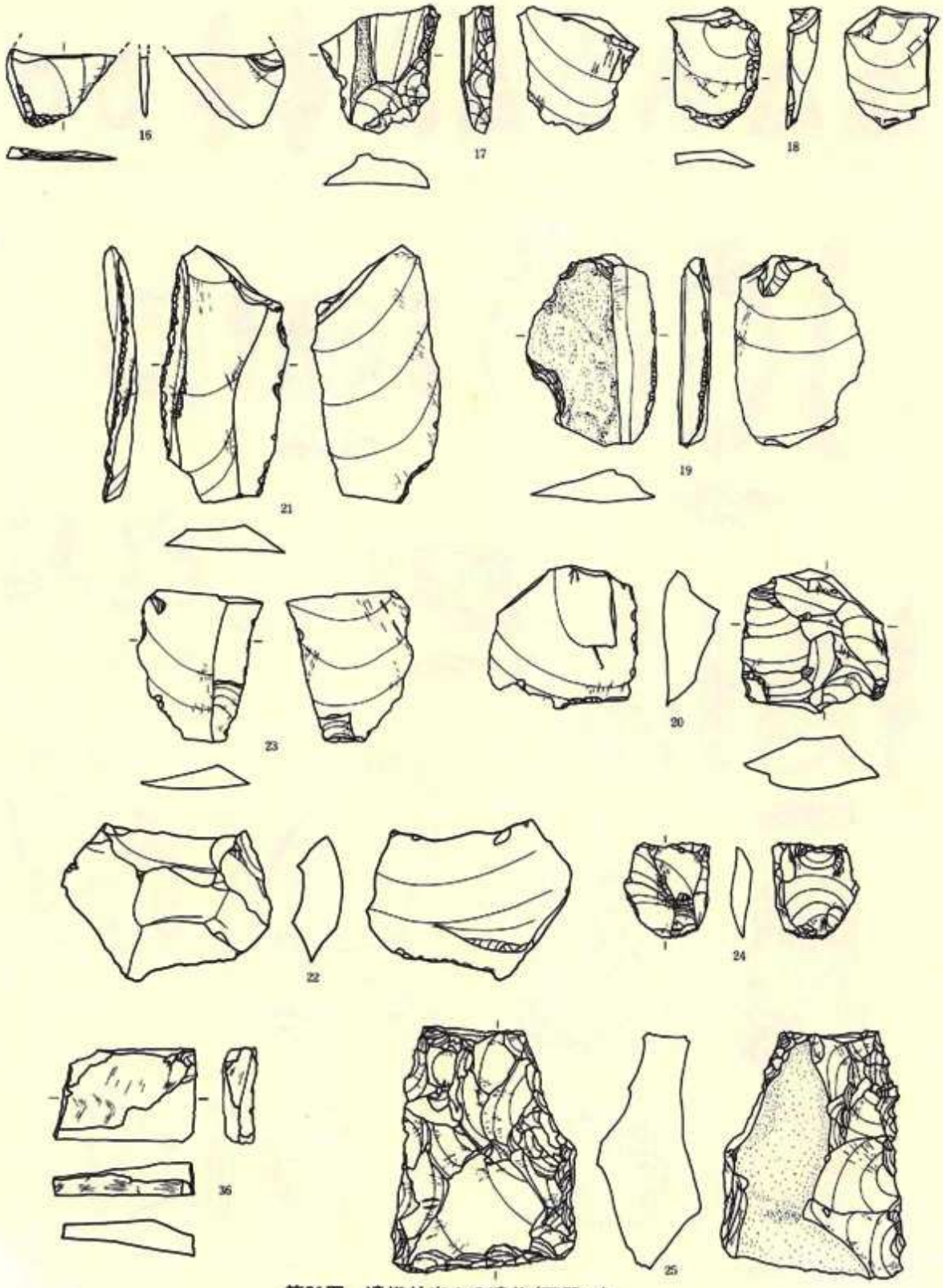
12は上端が尖り、両側縁が左右対称に開き、末端は直線的である。両側縁は打撃による調整剥離後、押圧剥離する。末端は、押圧による調整剥離される。特に裏面が丁寧である。13は破片である。両側縁には打撃による調整剥離痕を残す。末端は、片面が押圧による調整剥離される。末端の表面右には使用による剥落痕が観察できる。

調整剥離痕ある石器

14～18は調整剥離痕が観察できる剥片である。14は第一次剥離面を残す。押圧による調整剥離される。両側縁の剥離部分には微細な剥落痕が観察される。使用によると考えられる。15～18は部分的に押圧による調整剥離された破片である。使用による顕著な剥落痕は観察できなかった。いずれも削器的である。



第30図　遺構外出土の遺物(石器１)



第31図　遺構外出土の遺物（石器２）

使用による剝落痕のある石器

19～25は使用による剝落痕が顕著に観察できる剝片である。19は第一次剝離面をよく残す若干縦長の剝片である。表面はわずかに外彎する右側縁に微細な剝落痕が観察できる。特に中央及び中央下半に集中する。その裏面左側縁には剝落痕がわずかに観察できる程度である。表面左側縁下半に裏面から打撃剝離による抉りがある。顕著な剝落痕はない。20は下半を欠失する剝片である。直線的な表面左側縁は裏面まで、若干外彎する表面右側縁は表面のみ、各々剝落痕が観察できる。21は上端・下端を欠失する縦長の剝片である。表面両側縁に剝落痕が観察できる。裏面にはない。22は上端・下端を欠失する横長の剝片である。表面左側縁の凸部及び裏面下端の内彎部分に剝落痕が観察できる。23は上端を欠失する縦長の剝片である。若干内彎する表面右側縁に微細な剝落痕が観察できる。24は外彎する左側縁に剝落痕が観察できる。裏面の上・下端には両極打法によるツブレや対辺に向かう剝離が観察できる。

石斧

25は上・下端が直線的で、両側縁は下端に向かって左右対称に開く両刃石斧である。両側縁は打撃により粗く調整剝離されている。下端は表面のみに調整剝離される。

凹石

凹石は、棒状タイプ（26・27）と扁平タイプ（28・29・30）とに分けられる。いずれも平坦面に凹みがある。凹み部分は扁平タイプがほぼ中央に対し、棒状タイプは長軸線上の中央よりいずれかに寄る。その形状は円錐に近いものが多いが、30のように幅広の溝状に近いもの、29と26の一部のように不定形に凹むものもある。回転穿孔による凹みはない。凹み面は1箇所なのは1例だけであり、他は複数、または28のように同一面に2箇所もつ例がある。

棒状擦石

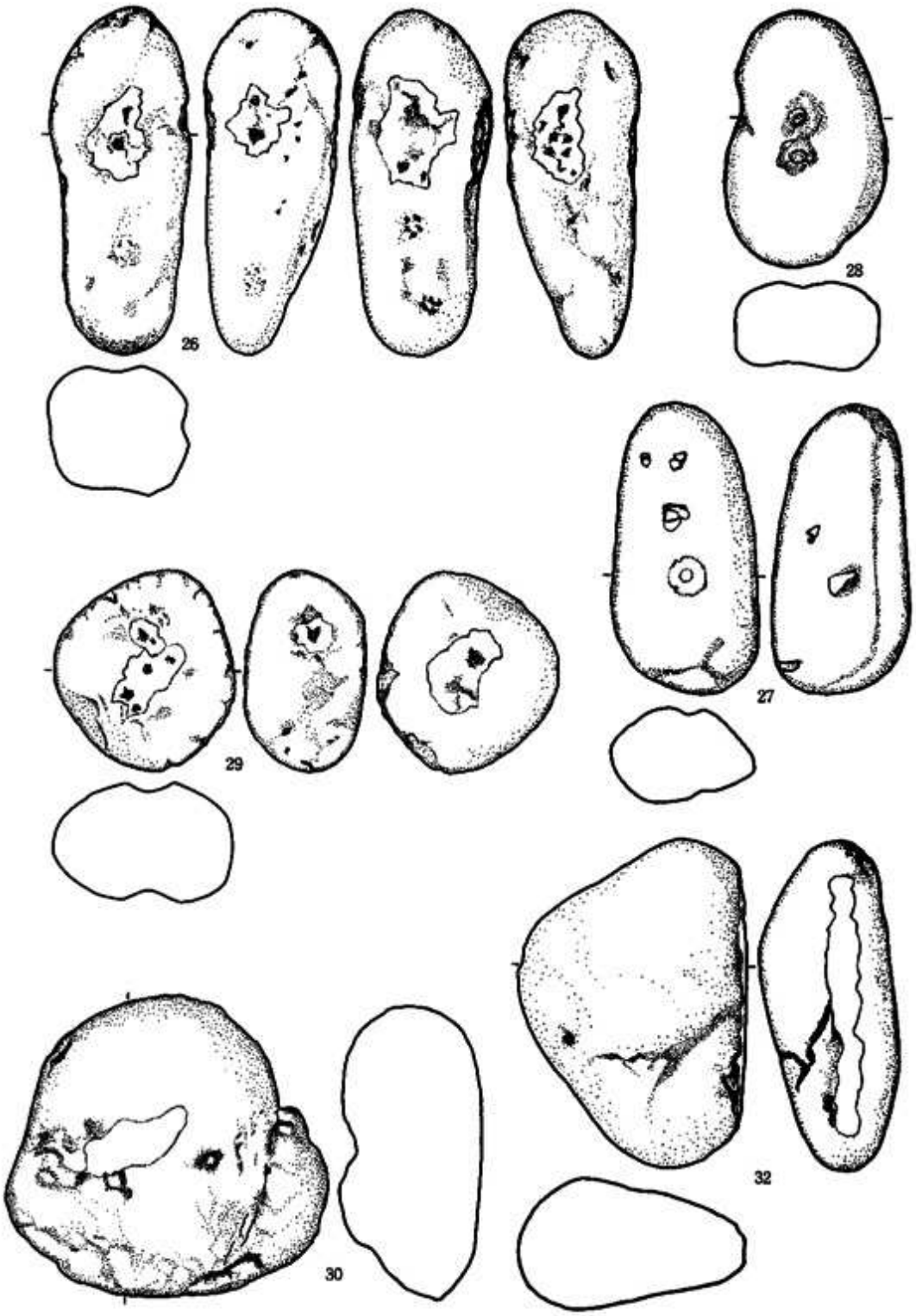
31～33はいずれも若干扁平な礫の長い稜線部分を使用している。その使用面の短軸幅は0.8～1.2cm、長軸長は9～1 cmである。形状は、短軸断面形は若干外彎するがほぼ平坦、長軸断面形は31がほぼ直線的であるのに対し、他は若干外彎する。使用面は磨石様に摩滅している。使用面の縁辺に剝落痕が観察できるのは32である。

石皿

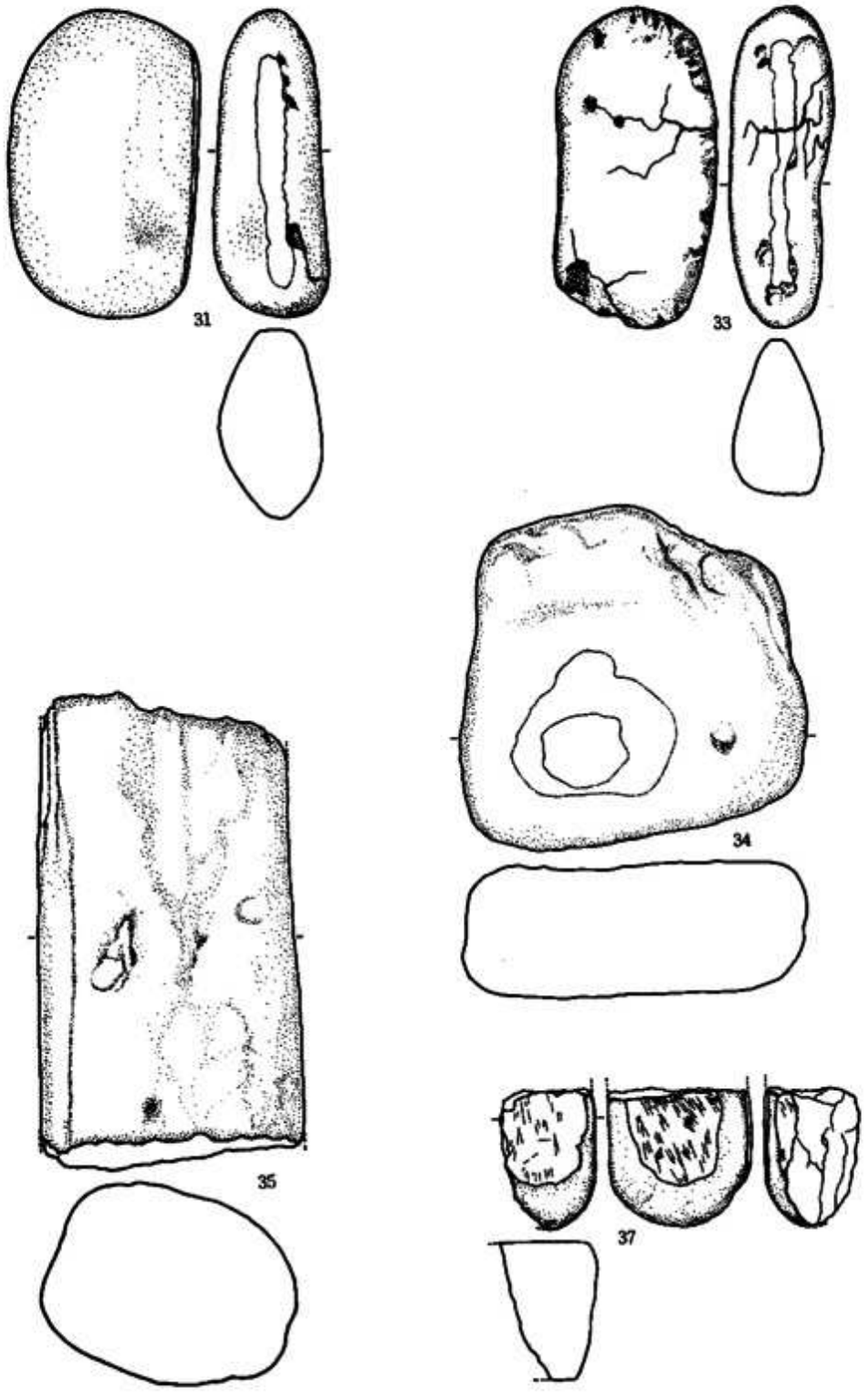
53は方形かつ扁平な形状を呈する石皿である。縁辺寄りの一部分が摩滅して僅かに凹んで滑らかになっている。

石棒・砥石

35は石棒片である。長軸線方向に研摩しており、若干平滑な部分もあり、一部稜線を形作っている部分もある。また研摩前に敲打による整形痕も一部観察できる。36・37は砥石である。



第32図　遺構外出土の遺物（石器 3）



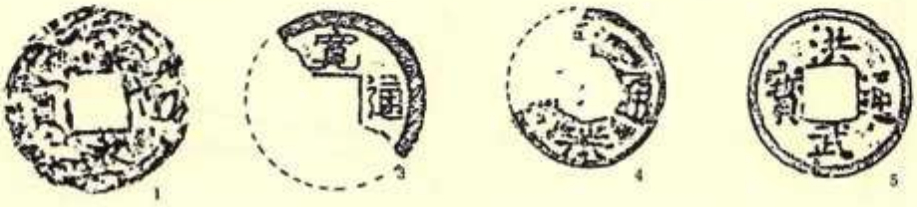
第33図遺構外出土遺物（石器 4）

(3) 古　銭

表土、または第Ⅰ層から出土した5点である。1・2は銹化の著しい鉄銭である。1の寛永通寶は周縁が不整である。3は2分の1ほどを欠損しているが、寛永通寶と思われる。4は4分の1を欠失した永楽通寶である。薄手でやや歪みがあり、火熱をうけている錫銭の可能性がある。5は文字面の一部が欠損している洪武通寶である。背文はいずれにも認められない。

第2表　古銭一覧表

No.	銭　銘	出土地点層位	外　経	内　径	厚　さ	重　量	備　考
1	寛永通寶	表　土	2.43 cm	0.60 cm	0.15 cm	3.35 g	
2	—	ⅡA8－Ⅰ	—	表　土	—	0.15	欠　損
3	寛永通寶	ⅠA8－Ⅰ	—	—	0.07	0.60	欠　損
4	永楽通寶	ⅠA5－Ⅰ	2.10	—	0.06	0.33	欠　損
5	洪武通寶	ⅡB6－Ⅰ下	2.15	0.70	0.08	0.90	



第34図　古銭

Ⅲ　まとめ

今回の調査では、竪穴住居跡、土壙、陥し穴状遺構、炭窯跡などの遺構が検出され、土器、石器、石製品、鉄器、鉄滓、古銭など多様な遺物が出土した。これらの遺構遺物は、時期別では縄文時代・弥生時代・平安時代・近世に分けることができ、田余内Ⅰ遺跡が、縄文時代・弥生時代・平安時代・近世の複合遺跡であると言える。

平安時代の田余内Ⅰ遺跡は、竪穴住居跡（３棟）、土壙・炭窯跡からなる集落跡である。

竪穴住居跡は、調査対象区の西側斜面に１棟、東側平坦部に２棟と埋没谷を狭むように占地する。各住居跡出土土器が同時期であることから、住居跡の構築時期に大きな開きはないと考えられるが、ＩＨ８住居跡の床面出土の土器片とＩＪ７住居跡の貼床中から出土する土器片が接合した例（ＩＪ７住27土器）からすると、隣合うＩＨ８住居跡とＩＪ７住居跡が同時に存在し得なかったことも考えられる。

なお、ＩＣ３住居跡とＩＪ７住居跡は床面に炭化材や炭化したカヤ、そして焼成を受けたシルト質土などが散乱する。焼失住居跡であり、土を載せた上屋構造が考えられる。また壁際の施設跡と考えられる例（ＩＪ７住）も検出した。

土器は、その特徴から同時期と考えられる。また体部最大部に爪状刺突列を付した例（ＩＨ８住11）や、底部から直線的に立ち上がる器形の例（IC3住2）、光沢を持つほどに磨かれた土器などの例なども特徴的である。

羽口と鉄塊・鉄滓の出土は、鍛冶跡などの遺構は検出していないものの、鍛冶が行われたことをうかがわせる。

弥生時代をうかがわせるのは、ほぼ復元した深鉢形土器のみである。遺構は検出しておらず遺物も他に出土していないので詳細はわからない。

縄文時代の遺構は陥し穴状遺構だけである。円筒形が３基、溝状が12基である。切り合い関係から円筒形が古く、構築時期は縄文時代前半と考えられる。底部には径３～４cm、深さ20～30cmの杭痕があり、逆茂木状の施設を推定させる。

溝状陥し穴状遺構は、円筒形よりは新しいものの、縄文時代に属すると推定される。比較的大型のものが多く、長軸断面形はオーバーハングする形である。

分布は、円筒形についてはその数が少ないため、詳細はわからない。溝状については斜面部にあるものと、埋没谷の底にあるものとがあり、時期差があるかどうか不明であり、詳細はわからない。

縄文時代の土器は中期を除く各時期にわたる。早期のムシリⅠ式土器は１点だけの出土であるが、出土例が少ないために貴重である。遺構からの出土例がないため、詳細はわからない。

縄文時代の石器は石鏃を除くと、石匙・篦状石器・石斧・凹石・棒状擦石・石皿・石棒と生活用具が多い。石質は剥片石器が泥岩・礫石器が両輝石安山岩と限定している。

このように縄文時代の遺構・遺物をみると、遺構が陥し穴状遺構と限定されるのに対し、遺物は、土器が煮沸・貯蔵・石器が棒状擦石・凹石・石皿など、生活用具が多いことは、今回の調査では検出しなかったが、付近に集落跡の存在が推定される。

１．竪穴住居跡

分布

検出されたのは３棟である。ＩＣ３住は西側斜面部、ＩＨ８・ＩＪ７住居跡は東側平坦部に位置する。西側と東側の住居跡の間には当該期凹んでいた埋没谷があり、住居跡の分布に影響を与えたと考えられる。

検出状況・保存状況

検出面はいずれも耕作土直下で、十和田ａ降下火山灰が遺構を縁取る。保存状況は、平坦部にあたる東側２棟は上端を若干削平されただけであるが、斜面部にある東側ＩＣ３住居跡は斜面下位東壁を欠失する。

重複

３棟のうちＩＣ３・ＩＨ８住居跡は陥し穴状遺構（溝状）の一部上半部を切って住居跡の床及び壁を構築している。陥し穴状遺構と重複した住居跡の床面は貼った痕跡はない。

平面形・規模

検出された３棟はいずれも方形を基調とする。規模は最大が6.1×6.3m（ＩＪ７住）、最小が2.5× 2.6m（ＩＨ８住）である。ＩＣ３住は前２棟の中間規模を呈する。

方向

方向は西壁によると、ＩＣ３住居跡がN48°W、ＩＨ８住居跡がN28°W、ＩＪ７住居跡がN28°Wである。

埋土

埋土は、上位から下位にかけレンズ状に堆積し、自然堆積状況を示す。床直上では、炭化材や焼成を受けたシルト質土が広がる（ＩＣ3住、ＩＪ７住）、土壙を掘り上げた土が周辺に堆積する（ＩＪ７住）、異地性の明黄褐色土が拡がる（ＩＨ８住）等々の例がある。これらの状況から、廃棄された住居跡は以後埋め戻されることもなく埋没したと考える。

自然堆積した埋土中に十和田ａ降下火山灰が混入する。その混入状況は、ブロック、あるいは

は混入しない部分があるものの薄層でレンズ状に堆積する。混入層位は、ＩＣ３住居跡は中位、ＩＨ８住居跡は上～下位、ＩＪ７住居跡は下位である。

壁・床面

壁は直線的かつ角ばる隅をもつものを基調とし、立ち上がりは直に近い。壁高の最大は斜面部にあるＩＣ３住居跡の西壁 60 cmである。平坦部にある住居跡の壁高はＩＨ８住居跡が55cm、ＩＪ７住居跡が58cmである。

床面は３棟とも平坦である。ＩＨ８住居跡、そして貼床されたＩＪ７住居跡の床面は壁際部分を除き比較的硬い。ＩＣ３住居跡は比較的軟らかい。

柱穴

３棟中柱穴を検出したのはＩＣ３・ＩＪ７住居跡である。ＩＪ７住居跡は４個対角線に検出され、柱穴Ｐ１では床面上10cmまで柱材痕跡を、柱穴Ｐ４では柱材を確認している。ＩＣ３住居跡では床面下20cm程掘り下げて確認したが、２個を検出しただけである。

カマド

カマドは全棟から検出している。いずれも南壁西寄りに構築されている。

燃焼部は壁の内側20～65cmに位置する。焼土はいずれも隅丸方形あるいは長円形を呈し、レンズ状に形成される。

側壁はいずれも扁平な礫を複数縦位に並べて芯とし、シルト質で固めている。礫は床面に小穴を掘り込んで設置している。

天井部は崩落部分が多いが、ＩＣ３住居跡やＩＨ８住居跡の例から扁平礫を芯として天井部を構築していたようである。

煙道は、ＩＣ３住居跡が礫で側壁・天井部を構築し、他の２棟は地山を円筒状に刳貫いて構築している。煙出しはいずれも煙道から地山を円筒状に掘り貫いて構築される。全長はＩＣ３住居跡が100cm、ＩＨ８住居跡が125cm、ＩＪ７住居跡が100cm、煙出し部の深さはＩＣ３住居跡が70cm、ＩＨ８・ＩＪ７住居跡が60cmである。

土壙

ＩＣ３住居跡から１基、ＩＨ８住居跡から３基、ＩＪ７住居跡から２基検出している。平面形はＩＣ３住居跡土壙が長円形の他は隅丸方形を基調とする。深さを比較すると、15cm（ＩＣ３住土壙）、13cm（ＩＨ８住土壙２・３）と、65cm（（ＩＨ８住土壙１）、50cm（ＩＪ７住土壙１）、60cm（ＩＪ７住土壙２）の二通りに分れる。

埋土は、自然堆積状況を示すのはＩＣ３住居跡土壙、ＩＨ８住居跡土壙２・３、ＩＪ７住居跡土壙１、埋め戻しの状況を示すのはＩＨ８住居跡土壙１、ＩＪ７住居跡土壙２である。ＩＪ７住居跡土壙１は住居跡廃棄時開口していたと考えられる。

位置的にはカマドの反対、北壁寄りにあり、西壁あるいは東壁に寄る。ＩＪ７住居跡土壙の例では柱穴より壁寄りに位置する。

周溝・施設跡

周溝と周溝に伴う施設跡はＩＪ７住居跡で検出した。施設跡は幅10数cmで周溝と連続して壁際を巡る。周溝はこの施設の下半部分跡に伴うと考えられる。

炭化材、焼成をうけたシルト質土

炭化材の検出された住居跡は２棟（ＩＣ３住・ＩＪ７住）である。一部は焼成をうけたシルト質土とともに出土する。炭化材は多くが床面直上で検出するが、ＩＪ７住居跡の西壁寄りで検出した炭化材は上下に焼成をうけたシルト質土に挟まれ住居跡の上端から床面に斜めに傾いて出土する例もある。

焼成をうけたシルト質土は、炉やカマドに伴う焼土のような長時間強い焼成をうけたようすはない。分布・厚さも均一でなく、その焼成も表面部分だけのものや全体にわたるもの等均一さを欠く。また前述したように炭化材と伴うものもある。

このような炭化材と焼成をうけたシルト質土の出土状況は、これらが上屋構造にかかわるものと推定される。

出土遺物（第35図）

竪穴住居跡から出土した遺物総数は160点である。住居跡別にみると、ＩＣ３住居跡は土師器15点、縄文土器３点、ＩＨ８住居跡は土師器39点、鞴羽口１点、鉄鏃の茎１点、刀金具（責金具）１点、縄文土器10点、ＩＪ７住居跡では土師器86点、刀子の一部１点、鉄塊１、鉄滓２と住居跡によって多寡がある。

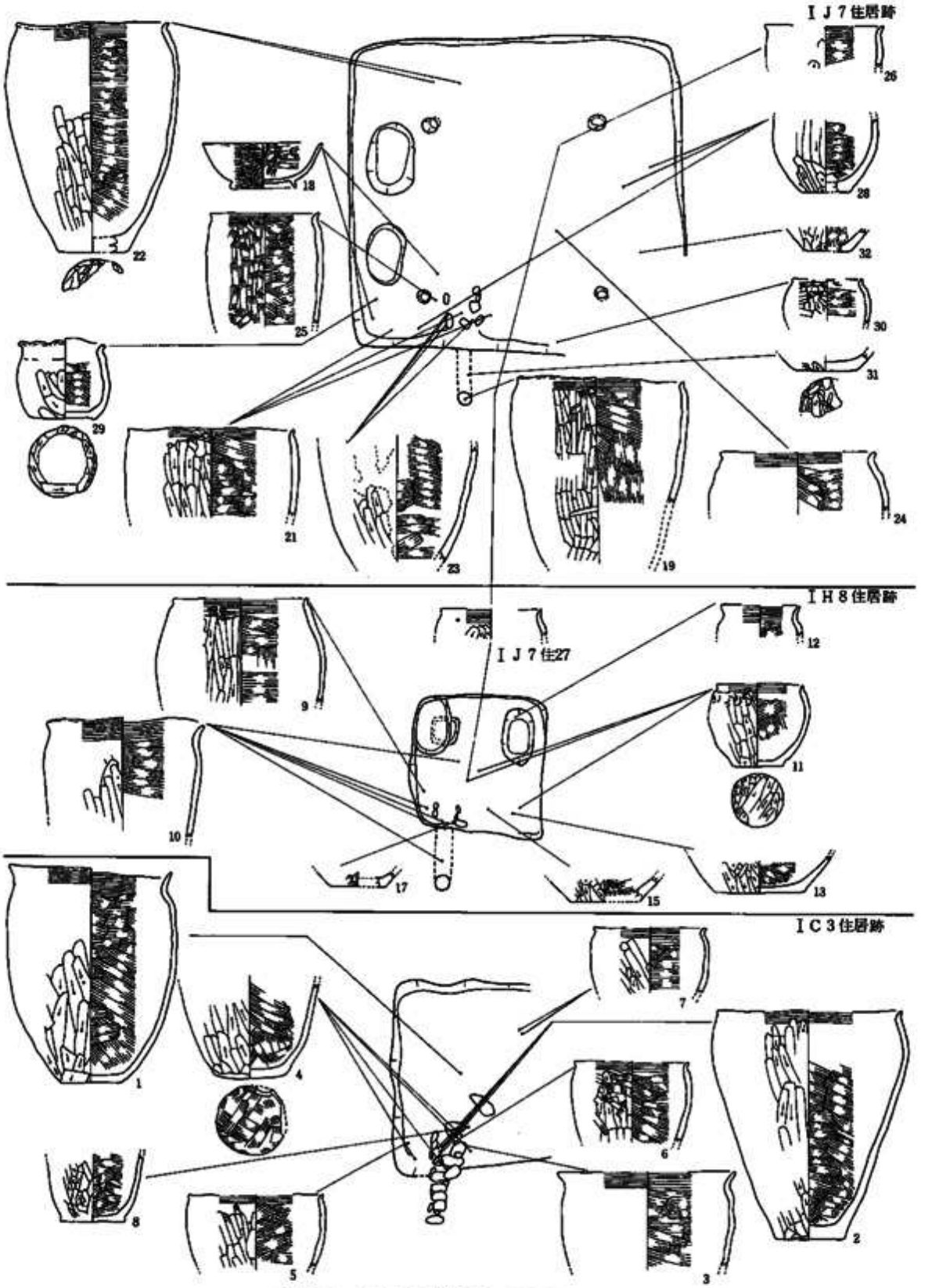
土師器は全体としてはカマドの反対側が少なく、カマド付近の床面が多い。カマド内からも出土する。

器種別にみると、坏が１点で他は全て甕である。

坏はＩＪ７住居跡からの出土で、内面を黒色処理した高台付坏である。底部の切り離しは回転ヘラ切り無調整である。

甕は各住居跡とも小型から大型のものがほぼ揃う。口縁部形状では、全体的に外反するものと、端部が細まり短く外反するものとがある。前者の外面調整がヘラケズリだけなのに対し、後者（ＩＣ３住－２・５・６・７・８、ＩＨ８住－９・11・13・15、ＩＪ７住－19・21・26・30）はヘラケズリ後、磨かれて光沢がある。特にＩＣ３住－２、ＩＨ８住－９・11各土器はこの特徴が顕著である。いずれも同時期の土器と考えられる。

特徴あるのは、ＩＣ３住居跡－２・８、ＩＨ８住居跡－11の各土器である。ＩＣ３住居跡－２は前述した特徴ある外面調整に加え、底部から直線的に立ち上がる器形に特徴がある。ＩＣ



第35図　竪穴住居跡出土土器分布図

3住居跡－8は砂底である。ＩＨ８住居跡－11の体部最大部付近にある爪状刺突列の例は、県内ではない。

年代

出土する土器の中で坏はＩＪ７住－18の１点のみである。遺構外からの出土を合わせても３点で、坏の出土数が極めて少ない。また甕は、前述した磨かれ、光沢がある特徴的なものがあるものの、ロクロ不使用で、かつ雑な作りとなるなど、土師器の終末的要素を持つ。また、鍵層となる十和田ａ降下火山灰が埋土の下位にまで混入する事実から、平安時代、10世紀頃と考えられる。

２．陥し穴状遺構

(1) 円筒形の陥し穴状遺構

分布

円筒形の陥し穴状遺構は３基とも調査区の西部の斜面上位に位置する。等高線にほぼ並行し、約６ｍ離れている。溝状の陥し穴状遺構と比較すると、分布域が斜面上位に限定されている。

重複

円筒形の陥し穴状遺構で重複し、溝状の陥し穴状遺構によって切られている。

形状・規模

平面形は直径0.8～1.4ｍの円形を基本とする。断面形は上半が崩落しているもののほぼ細長いビーカー状をなす。深さは1.4ｍ、1.6ｍ、1.7ｍであり、全体的に円筒形をなす。

埋土

埋土は黒褐色土が主体をなし、壁の崩落土と思われるにぶい黄褐色土、褐色土、明黄褐色土が楔形に堆積している。自然堆積である。

壁・底面

壁は崩落部分を除いてほぼ垂直に立ち上がり、上半が崩落のため外反している。底面は平坦であり、中央に４cm、３cmの小穴をもつ。小穴の深さは34cm、24cmであり、光端が鋭く尖っていた。埋土に立ち上がりを確認していないが、中は空洞となっている部分も認められ、逆茂木の痕跡と推定される。

年代

いずれも遺物は発見されず時期決定資料に欠くが、形態、埋土などから縄文時代前半期のものと推定される。

(2) 溝状の陥し穴状遺構

分布

溝状の陥し穴状遺構は０区１基、Ⅰ区10基、Ⅱ区１基で、調査区の全域に散在しているが、①斜面上位に位置するもの８基（０Ⅰ７、ⅠＡ０、ⅠＢ３、ⅠＢ８、ⅠＣＯ、ⅠＣ３、ⅠＥ２、ⅠＨ９）、②埋没谷の谷底に位置するもの４基（ⅠＧ５、ⅠＧ６、ⅠＩ３、ⅡＤ２）に分けることができる。

形状・規模

平面形は長径が1.8～3.6m（最大2.44～4.36）、短径が26～68cmの溝状をなす。断面形は長軸方向が①両端の入り込む逆台形をなすもの９基（０Ⅰ７、ⅠＡ０、ⅠＣ０、ⅠＣ３、ⅠＥ２、ⅠＧ５、ⅠＧ６、ⅠＩ３、ⅡＤ２）、②長方形をなすもの２基（ⅠＢ３、ⅠＨ９）に分けられ、短軸方向は幅の狭いＶ字状、Ｕ字状をなし、ⅠＡ０、ⅠＣ０の２基はやや幅の広いＵ字状をなしている。なおⅠＧ６、ⅠＩ３は中位の南部浮石が崩落し、膨らみをもち、段状を呈している。開口部はいずれも崩落のため外反している。深さは94cm～1.5ｍで深いものがのが多い。

長軸方向

長軸方向はＮ76°Ｗ～Ｎ84°Ｅであり、次の４群に分けられる。

①Ｎ76°Ｗ～Ｎ72°Ｗ　２基　（ⅠＡ０、ⅠＣ０）
②Ｎ42°０　１基　（ⅠＢ３）
③Ｎ13°Ｅ～Ｎ35°Ｅ　３基　（ⅠＧ６、ⅠＩ３、ⅠＧ５）
④Ｎ63°Ｅ～Ｎ84°Ｅ　５基　（ⅠＥ２、ⅠＨ９、ⅠＣ３、０Ⅰ７、ⅡＤ２）

①群は南西端の２基で、６ｍ離れて並行している。断面形も類似しており、セットと捉えることができる。②群は南西部の単独１基である。③群は埋没谷の谷底に位置する３基で、調査区の中央に限定されている。④群は南西部の斜面上位の３基と北東部の２基からなる。等高線に対する方向は①並行するもの２基（ⅠＢ３、ⅠＨ９）、②斜行するもの４基（０Ⅰ７、ⅠＡ０、ⅠＣ０、ⅠＣ３）、③直交するもの５基（ⅠＥ２、ⅠＧ５、ⅠＧ６、ⅠＩ３、ⅡＤ２）である。等高線に対して並行する１群は長軸方向の断面形が長方形のものに限られている。また斜行する２群は南西部の斜面上位に位置している。また、直交する③群はほとんど埋没谷に位置している。

埋土

埋土は黒色土、黒褐色土が主体をなしてＵ字状堆積し、壁の崩落土と思われる褐色土、明黄褐色土が楔形堆積をなす自然堆積である。

壁・底面

壁は内彎、内傾しながら立ち上がるもの９基と直線的に立ち上がるもの２基とがあり、底面は平坦で水平に近いもの４基、平坦であるが自然地形に沿って傾斜するもの（ＩＣ３）、中央部が凹むもの６基とがある。なお、ＩＣ０では段をもち、ＩＧ６は凹凸が著しい、

年代

遺物の発見されたのはＩＣ０陥し穴状遺構の１基のみである。発見されたのは埋土上位であり、必ずしも年代決定資料とはならないが、一応の目安となろう。遺物は縄文時代前期であり、それ以前の年代が与えられるであろう。なお、重複関係では円筒形の陥し穴状遺構を切り、古代の竪穴住居跡によって切られており、矛盾しない。

第３表　陥し穴状遺構一覧表

名　称	長径(最大径)	短径(底径)	深　さ	方　向	等高線
０Ｉ７	2.46(2.62) m	36(12) cm	1.2 m	N76°E	斜　交
ＩＡ０	2.64以上(2.94以上)	50(22)	1.3	N76°W	斜　交
ＩＢ３	2.8以上	26(８)	0.98	N42°W	並　行
ＩＢ８	2.06	34	0.35	N46°E	直　交
ＩＣ０	3.2(4.37)	68(22)	1.5	N72°W	斜　交
ＩＣ３	3.6(4.36)	67(16)	1.5	N71°E	斜　交
ＩＥ２	2.89(3.57)	65(12)	1.5	N63°E	直　交
ＩＧ５	2.08(2.55)	34(12)	1.16	N35°E	直　交
ＩＧ６	1.8(2.44)	60(10)	1.3	N13°E	直　交
ＩＨ９	2.52以上	37(８)	0.94	N65°E	並　行
ＩＩ３	2.6(3.34)	46(８)	1.38	N22°E	直　交
ⅡＤ２	2.66(2.92)	56(13)	1.4	N84°E	直　交

第4表　石器一覧表

登録番号	出土地点	出土層位	最大値(cm) たて	よこ	厚さ	重さ(g)	石質	産地	年代
石鏃									
1	ⅡD付近		2.1	1.8	0.4	1.26	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	新第三系中新統
2	ⅠJ7住		2.5	1.6	0.3	0.95	〃	〃	〃
63	ⅠH8住		2.7	1.5	0.4	1.10	〃	〃	〃
4	Ⅰ区		3.4	1.4	0.7	2.35	凝灰質珪質泥岩	雫石盆地西部	〃
3	ⅠJ5	Ⅰ下	2.0	1.3	0.3	0.75	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	〃
石匙									
5	ⅡB8	Ⅱ	5.3	2.5	0.6	10.2	珪質泥岩	雫石西部	新第三系中新統
61	ⅠH8住		2.3	1.9	0.8	3.4	凝灰質硬質泥岩	〃	〃
6	ⅡB8	Ⅱ	2.6	2.5	0.7	4.5	凝灰質硬質泥岩	〃	〃
7	ⅠJ8	Ⅲ	2.0	2.3	0.5	2.7	硬質泥石	〃	〃
篦状石器									
8	ⅡB8	Ⅱ	4.4	2.4	0.9	10.0	硬質泥岩	雫石西部	新第三系中新統
10	ⅡC8	Ⅱ	4.5	3.2	1.1	18.0	凝灰質硬質泥岩	〃	〃
12	ⅡB9	Ⅱ～Ⅲ	3.7	2.4	0.8	10.0	硬質泥岩	〃	〃
調整剥離ある石器									
60	ⅡB6	Ⅱ	4.8	3.9	0.7	19.0	凝灰質珪質泥岩	雫石盆地西部	新第三系中新統
13	ⅡB9	Ⅱ～Ⅲ	3.0	2.2	0.6	3.5	凝灰質硬質泥岩	〃	
14	ⅡA8	Ⅰ	1.7	2.6	0.2	1.5	〃	〃	
15	ⅡB8	Ⅱ	2.7	2.8	0.8	10.0	凝灰質珪質泥岩	雫石盆地西部	
16	ⅠJ7住		2.1	2.0	0.3	3.3	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	
剥落痕ある石器									
20	ⅠJ7住		3.0	6.2	0.6	10.2	凝灰質珪質泥岩	雫石盆地西部	新第三系中新統
17	ⅡA9	Ⅱ～Ⅲ	4.5	3.0	0.8	12.0	凝灰質珪質泥岩	雫石盆地西部	〃
21	ⅠH8住		3.5	2.6	0.6	10.0	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	〃
18	ⅡC8	Ⅱ	3.5	3.5	1.3	16.0	珪質泥岩	雫石西部	〃
19	ⅡC8	Ⅱ	3.6	4.9	1.0	20.0	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	〃
11	ⅡB8	Ⅰ	2.3	2.0	0.5	3.1	凝灰質硬質泥岩	雫石西部	〃

石 斧

9	ⅡB8	Ⅱ	6.0	4.4	2.3	60.2	硬質泥岩	半石西部	新第三系中新統

凹 石

55	ⅠJ1	Ⅰ下	15.3	5.1	5.6	710.0	両輝石安山岩	奥羽山地	新第三系鮮新統 七時雨山、北麓安比川流域
56	ⅡA4	Ⅱ	12.7	16.5	4.1	504.0	〃	〃	〃
54	ⅠF6	Ⅱ	8.9	8.0	5.1	450.0	〃	〃	〃
50	ⅠJ7住		11.2	7.1	3.9	350.4	〃	〃	〃
51	ⅠJ7住		13.4	14.2	6.2	1,640.0	〃	〃	〃

棒状擦石

52	ⅠJ7住		14.5	10.1	5.7	1,010.0	両輝石安山岩	奥羽山地	新第三系鮮新統 七時雨山北麓安比川流域
57	ⅡB9	Ⅱ～Ⅲ	12.8	7.9	4.3	700.0	〃	〃	〃
58	ⅡC8	Ⅱ	13.3	6.6	4.2	570.0	〃	〃	〃

石 皿

53	ⅠJ7住		14.0	14.5	5.4	1,850.0	両輝石安山岩	奥羽山地	新第三系鮮新統 七時雨山北麓安比川流域

石 棒

59	ⅠC7	Ⅰ下	18.8	10.8	8.7	3,060.0	石英安山岩	奥羽山地	新第三系中新統

砥 石

49	ⅠJ7住～Q2		5.7	6.0	3.9	140.0	細砂質凝灰岩 (石質凝灰岩)	奥羽山地	中新統
62	トレンチ 斜面下方ー表土		2.2	3.2	0.7	10.0	流文岩真砂細粒 凝灰質	〃	新第三系中新統
48	ⅠJ7住		12.6	8.0	4.2	514.0	細砂質凝灰岩 (石質凝灰石)	〃	中新統

田余内（たよない）Ⅱ遺跡

所　在　地	二戸郡浄法寺町大字駒ケ嶺字田余内36－1
委　託　者	日本道路公団仙台建設局（一戸工事事務所）
発掘調査期間	昭和60年7月22日～8月3日
調査対象面積	1,150㎡
発掘調査面積	1,150㎡
遺跡番号・略号	ＪＥ46－0099・ＴＹⅡ－85
調査担当者	渡辺洋一・石川長喜
協力機関	浄法寺町教育委員会

Ⅰ　調査の結果

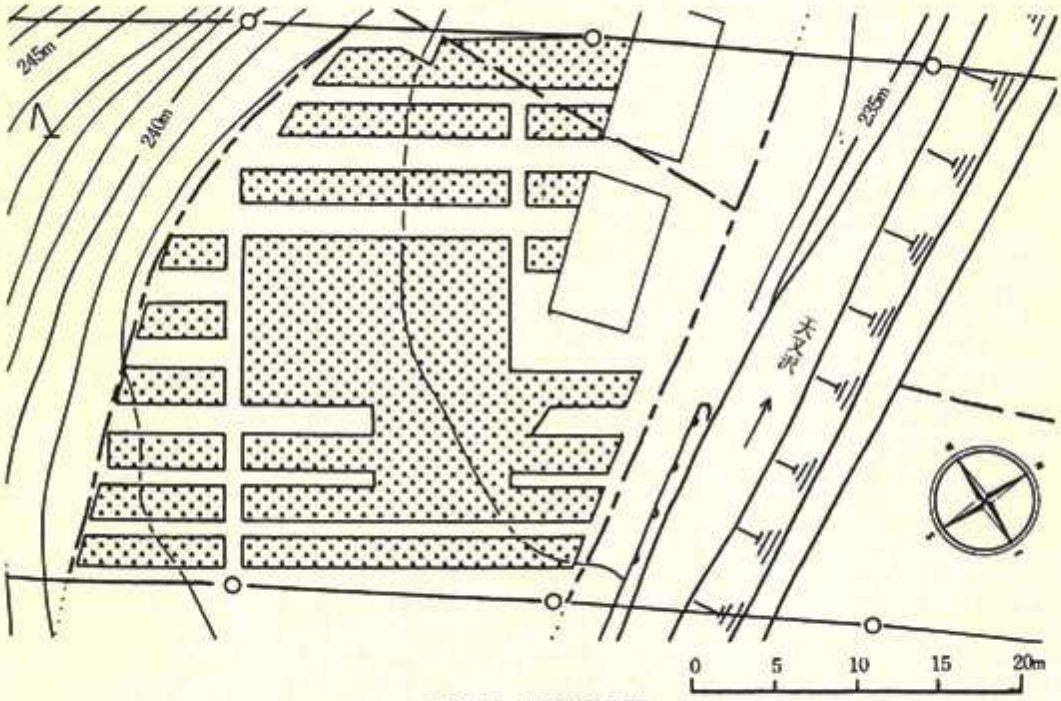
調査区は東西34m、南北35mであり、畑地を対象として実施したものである。

調査は、縦貫自動車道の中心杭の２点によってグリットを組み、トレンチを等高線にほぼ直交するように入れ、遺構・遺物に関連が予想される部分はさらに広げて調査した。

調査の結果、東側に旧畑地の畝跡、南側に削平されて露出したシラス部分、河道に沿う部分には大又沢に侵食された場所を南側のシラス等で修復した部分、西側には畑地造成により削平をうけた部分をそれぞれ確認したが、しかし遺構は検出されず、遺物は表土から、土師器・縄文土器・石器があわせて８点出土したのみである。

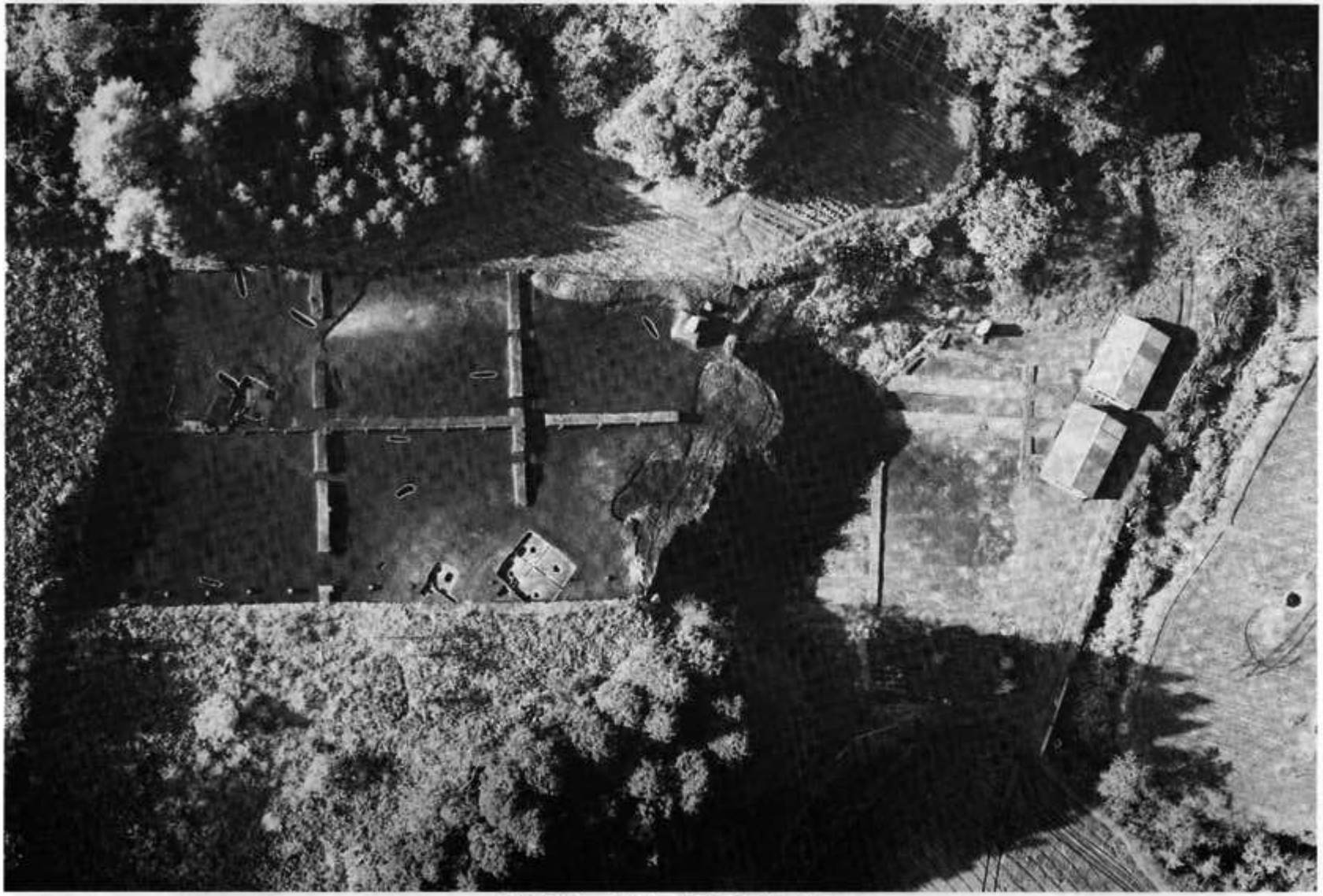
Ⅱ　まとめ

調査区域は最近まで沢の営力を強くうけており、過去の生活面が存在していたとしても流失したものと考えられる。しかし、遺物が確認されたことは、調査区域の東南部(沢の上流部)に遺構の存在が推定される。

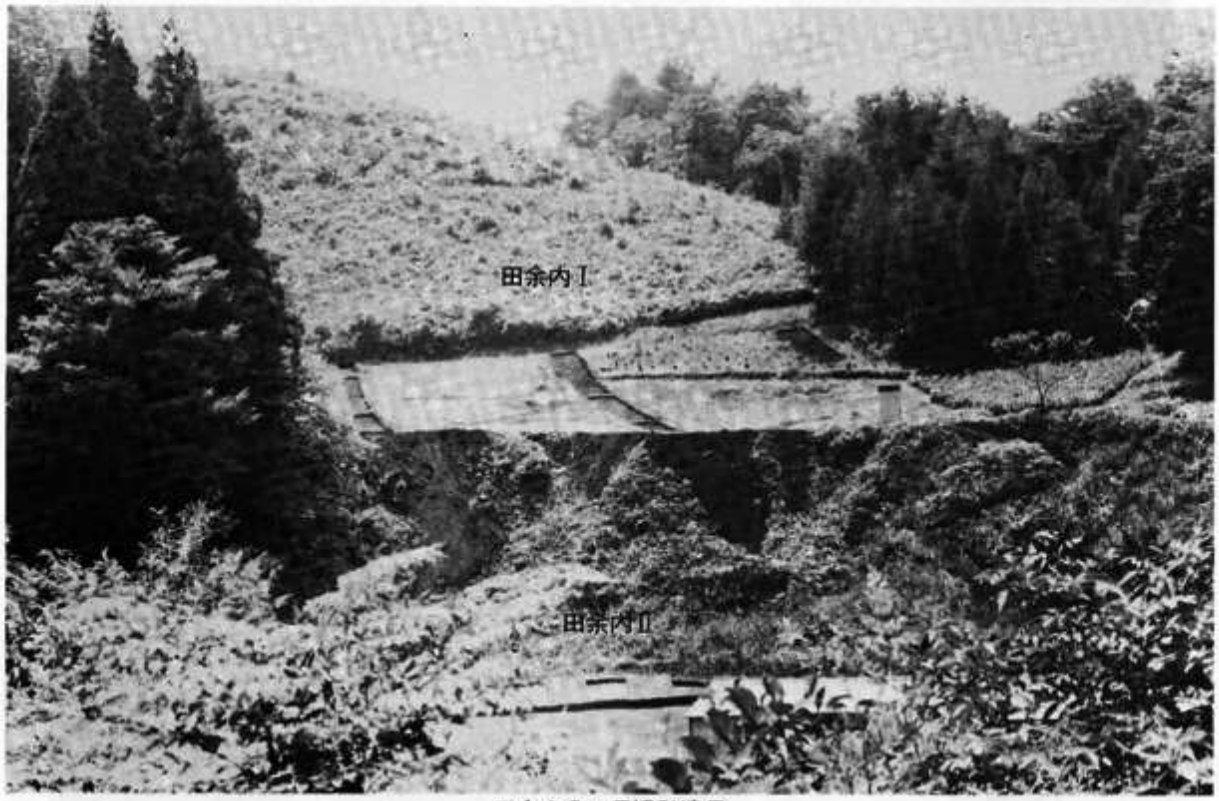


第36図　調査区域図

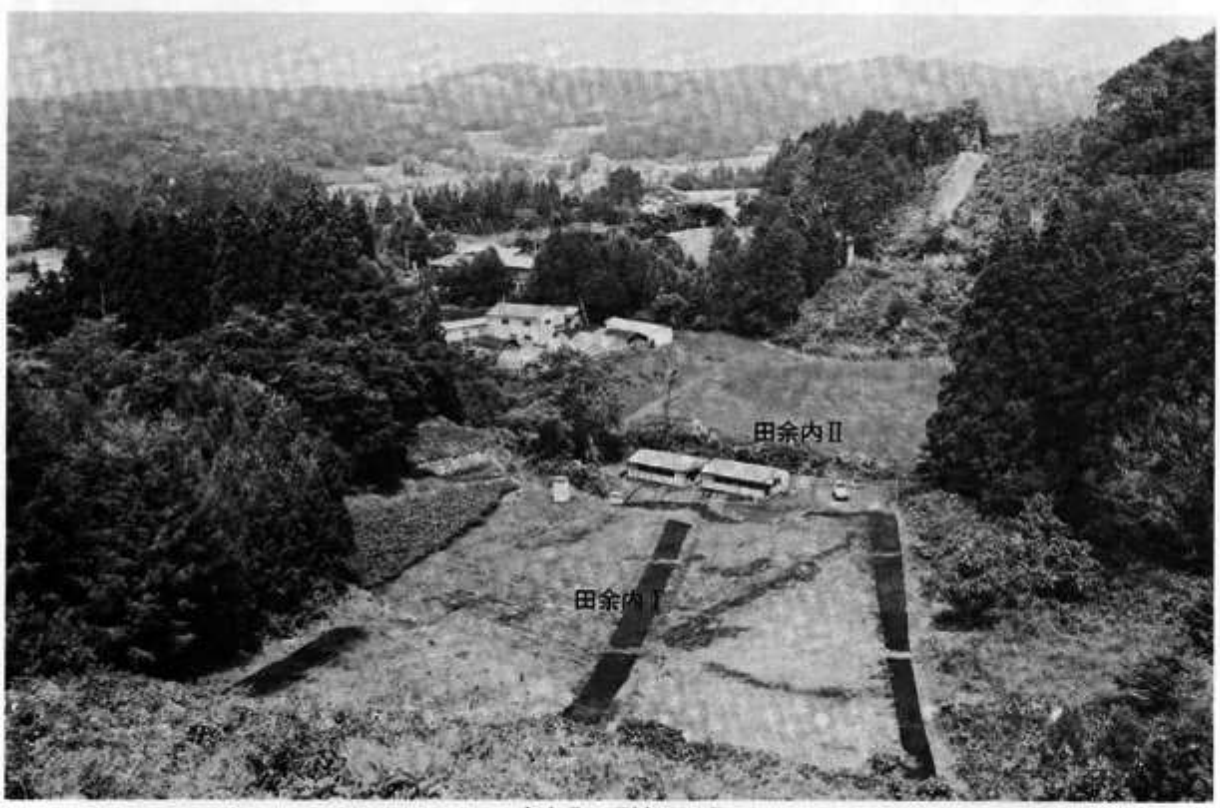
写真図版



写真図版１　調査区全景（空中写真）

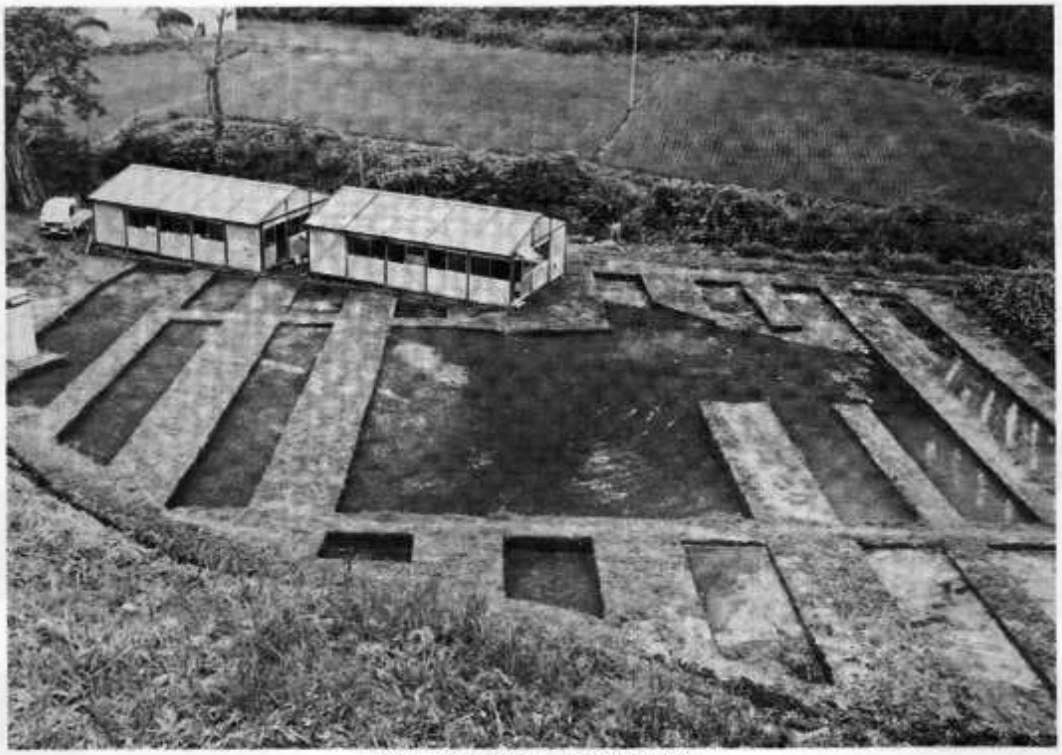


田余内Ⅰ・Ⅱ遺跡遠景

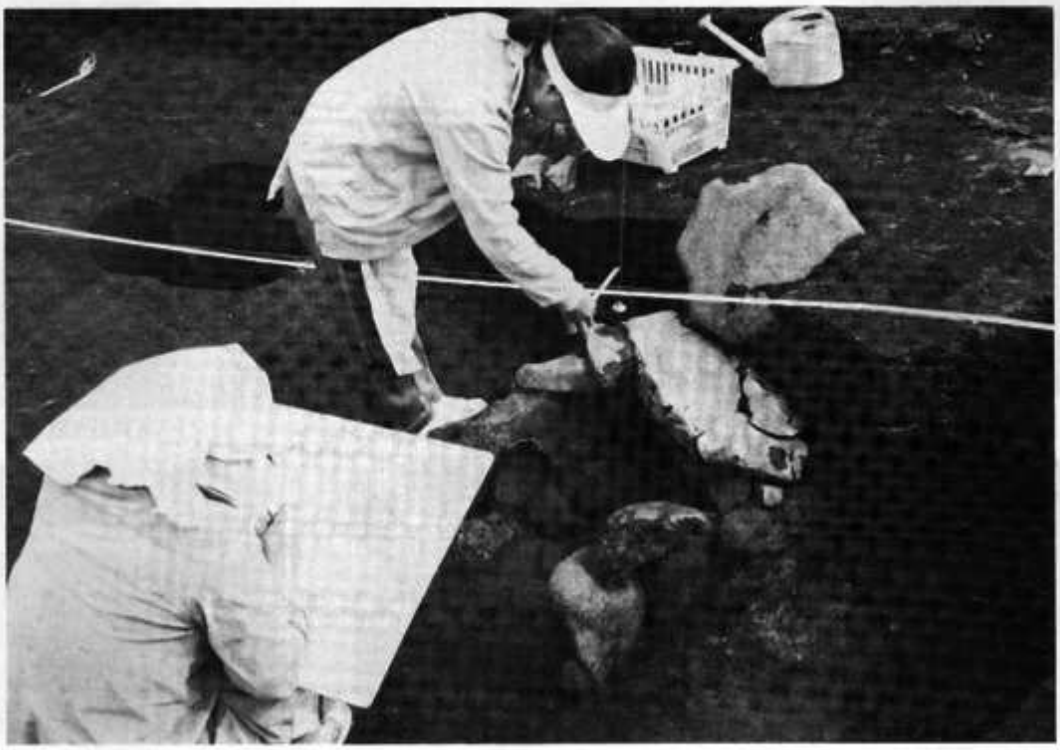


田余内Ⅰ・Ⅱ遺跡近景

写真図版２　遺跡の全景



田余内Ⅱ遺跡近景（調査終了後）



カマドの実測（ＩＣ３住居跡）

写真図版３　調査状況

完掘

カマド

断面

カマド（天井石を取って）

断面

カマド

カマド断面

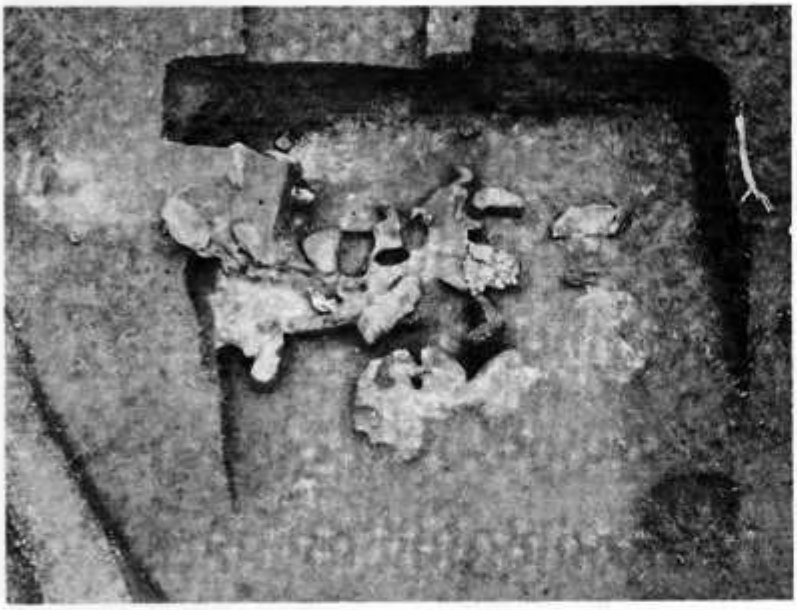
煙道断面

写真図版４　ＩＣ３竪穴住居跡

柱穴P_3断面

柱穴P_1断面

土壙



土器・炭化材出土状況

カマド（土器出土状況）

土器出土状況

完掘

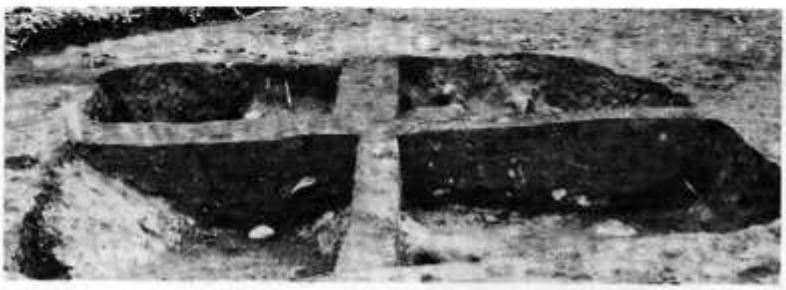
カマド（燃焼部）

カマド

写真図版５　ＩＣ３（上）・ＩＨ８（下）竪穴住居跡

断面

煙道断面



断面　　左手前に投げ込まれた土

煙道完掘

投げ込まれた土層断面

土壙１

土壙１断面

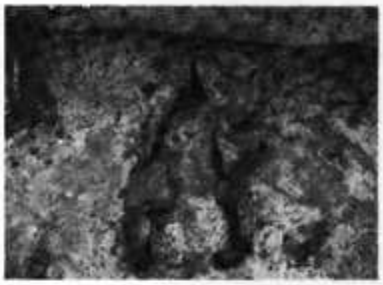
全景（左壁際に投げ込まれた土）

土壙２

土壙２断面

写真図版６　ＩＨ８竪穴住居跡

完掘



カマド

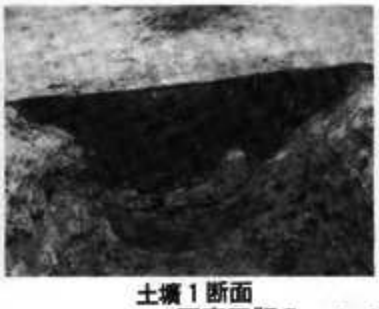
カマド断面

埋土断面

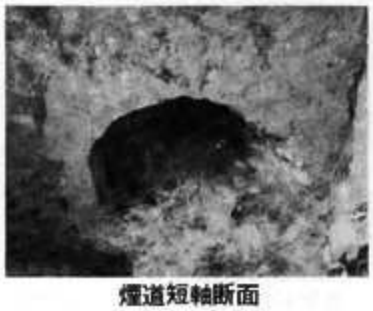
煙道断面

埋土断面

煙道断面

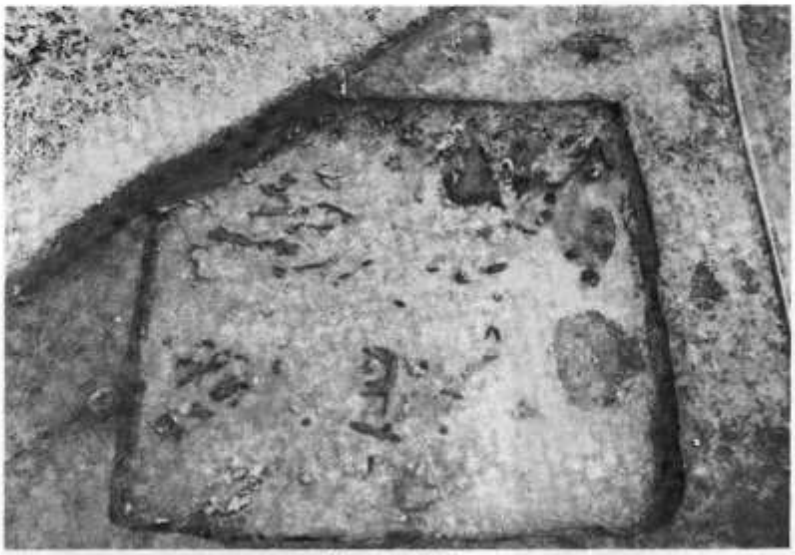


土壙１断面



煙道短軸断面

写真図版７　ＩＪ７竪穴住居跡（１）



炭化材出土状況

柱穴P_4

土壙 1

土壙 2

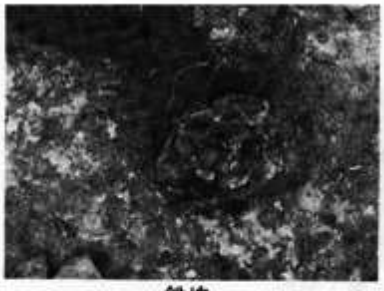
柱穴P_3

土壙 1 断面

土壙 2 断面

柱穴P_2

カマドの右脇から出土した砥石



鉄塊

柱穴P_1

写真図版 8　ＩＪ７竪穴住居跡（2）

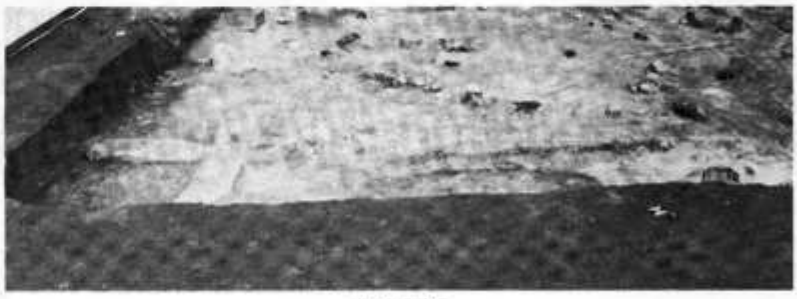
炭化材出土状況

土壙検出状況

周溝埋土断面

埋土断面

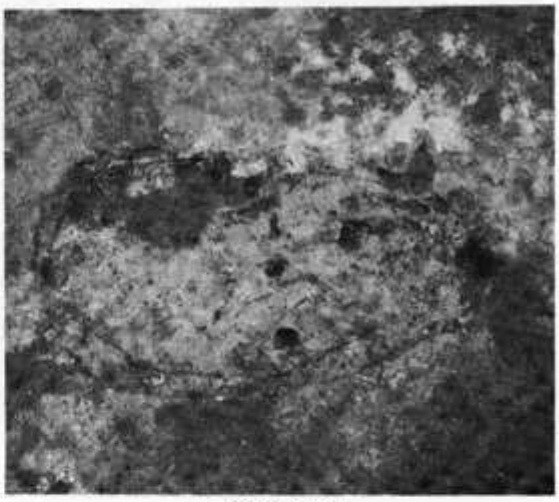
周溝埋土断面



埋土断面

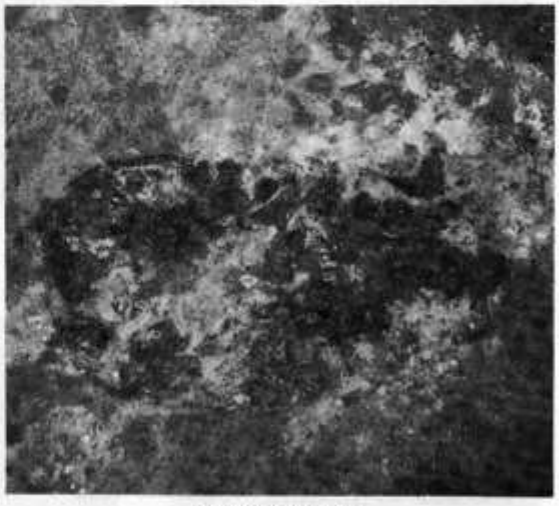
写真図版９　ＩＪ７竪穴住居跡（３）

土壙完掘



炭窯跡完掘

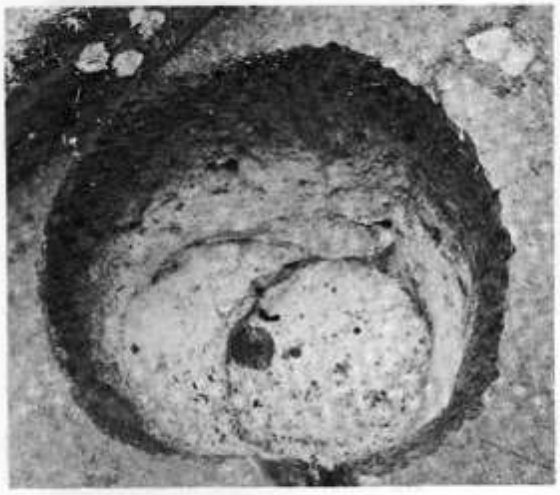
埋土断面



炭化材出土状況

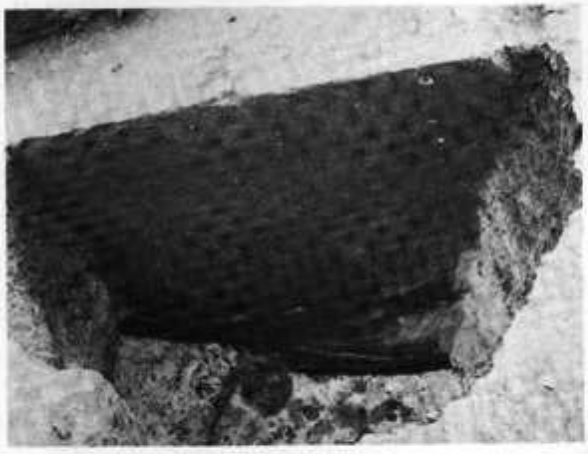
埋土断面

写真図版10　土壙・炭窯跡

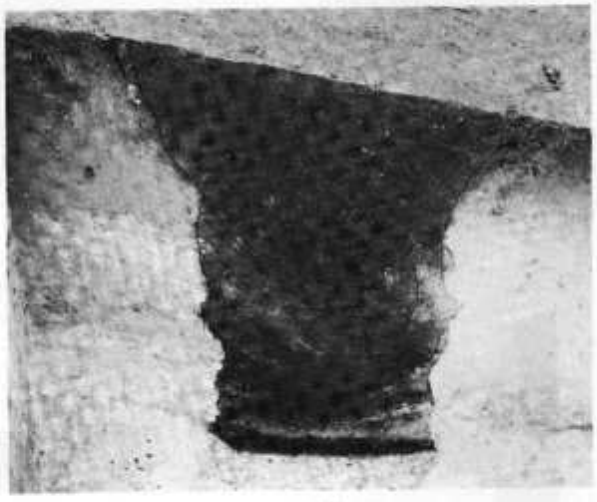


ＩＡ４陥し穴状遺構完掘

ＩＡ７陥し穴状遺構完掘



埋土断面

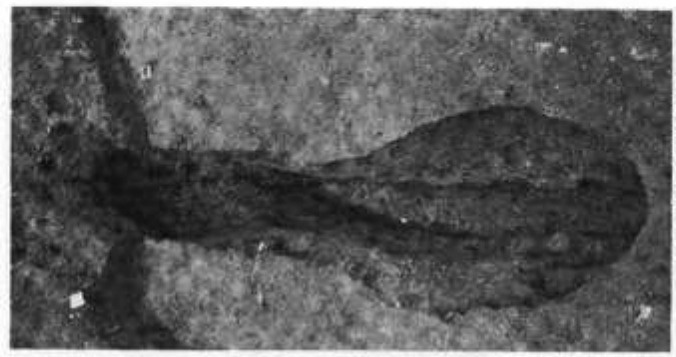


埋土断面

杭穴断面

杭穴断面

写真図版11　陥し穴状遺構（円筒状）

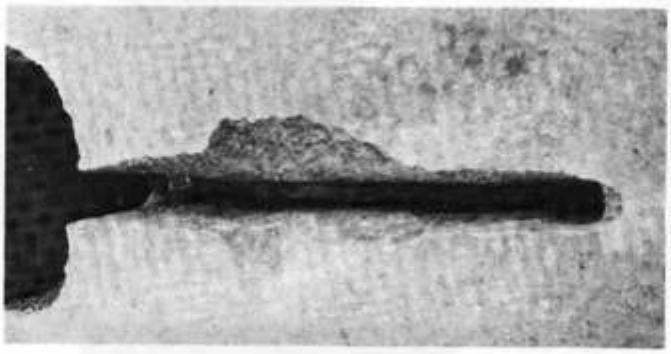


O１７陥し穴状遺構

埋土断面

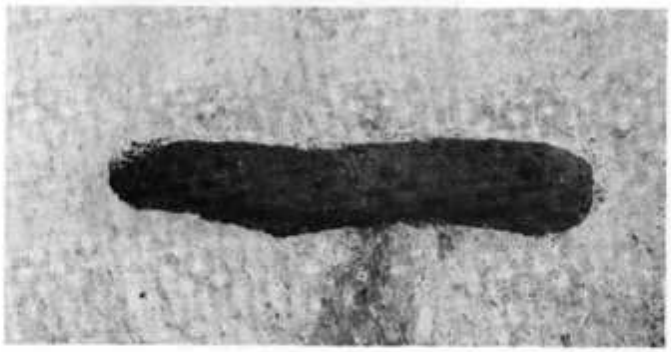
ＩＡ０陥し穴状遺構

埋土断面



ＩＢ３陥し穴状遺構

埋土断面



ＩＢ８陥し穴状遺構

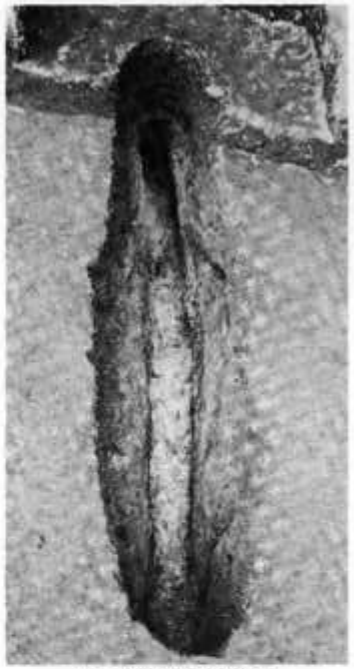
埋土断面

写真図版12　陥し穴状遺構（溝状１）

ＩＧ５陥し穴状遺構

ＩＥ２陥し穴状遺構

ＩＣ３陥し穴状遺構



ＩＣ０陥し穴状遺構

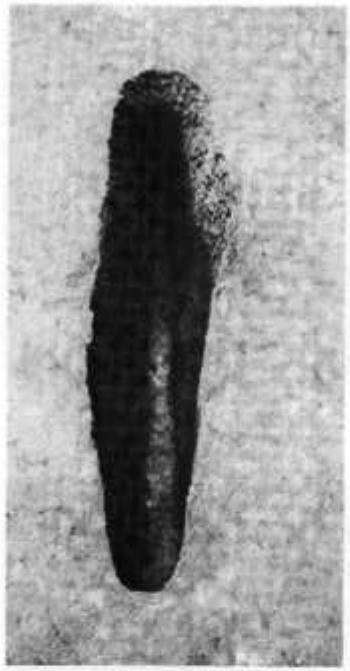
埋土断面

埋土断面

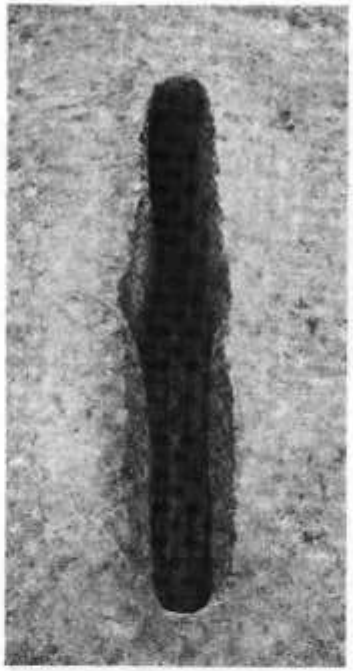
埋土断面

埋土断面

写真図版13　陥し穴状遺構（溝状２）



ＩＨ９陥し穴状遺構



ＩＤ２陥し穴状遺構

ＩＩ３陥し穴状遺構

ＩＧ６陥し穴状遺構

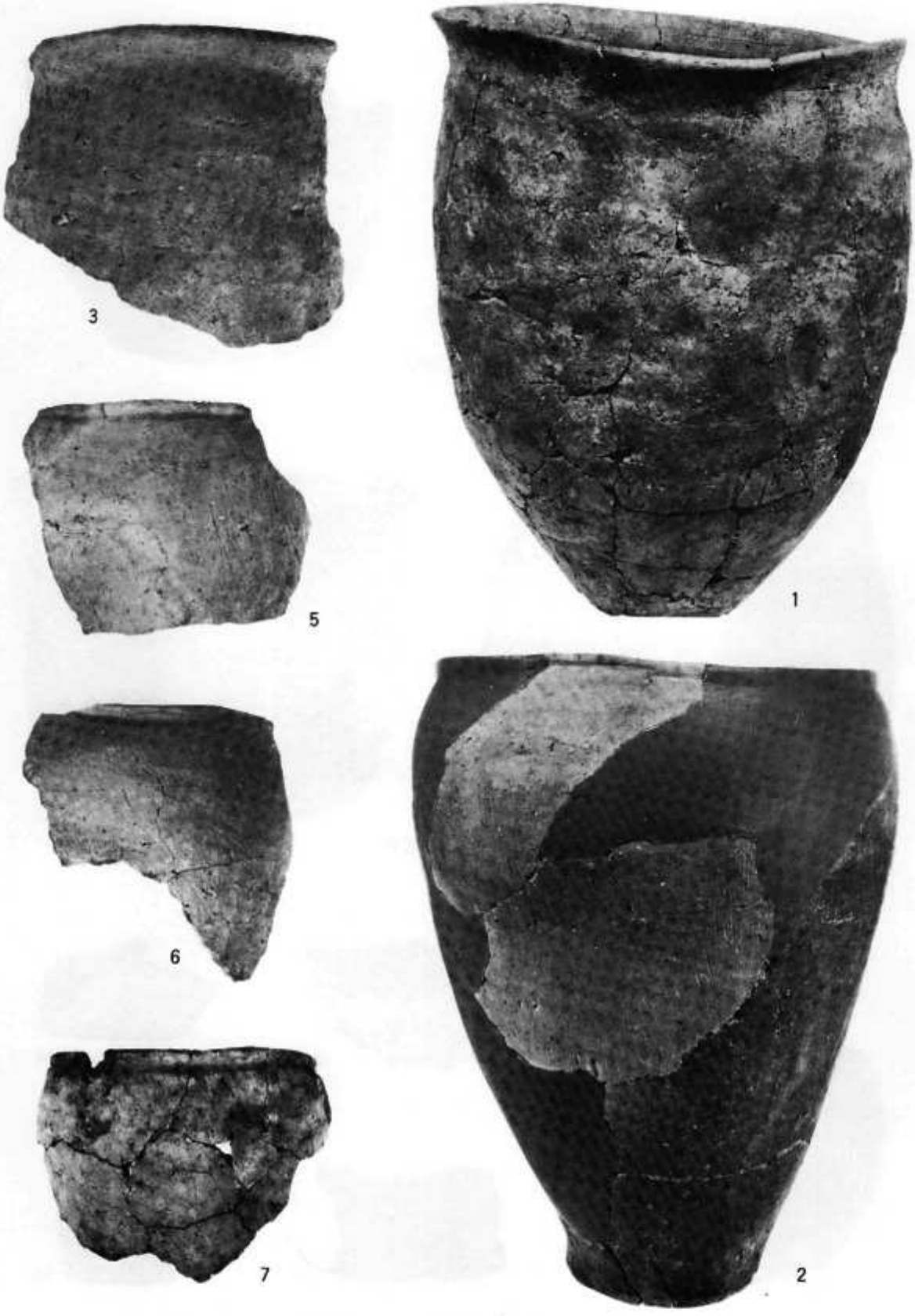
埋土断面

埋土断面

埋土断面

埋土断面

写真図版14　陥し穴状遺構（落状３）



写真図版15　ＩＣ３竪穴住居跡出土遺物

4

ＩＣ３住居跡

8

9

ＩＨ８住居跡

10

12

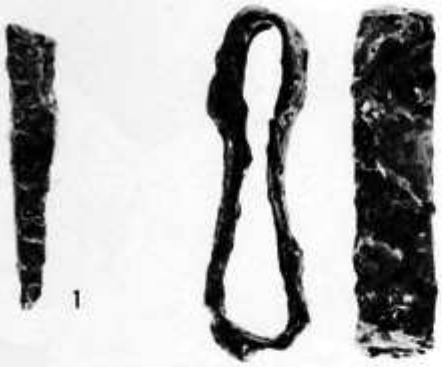
14

11

13

16

写真図版16　ＩＣ３・ＩＨ３竪穴住居跡出土遺物



1　2

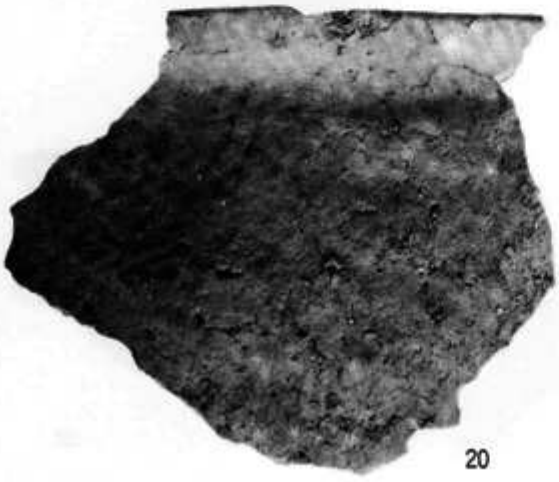
ＩＨ８住居跡

羽口

18

ＩＪ７住居跡

19



20

写真図版17　ＩＨ８・ＩＪ７竪穴住居跡出土遺物

21

23

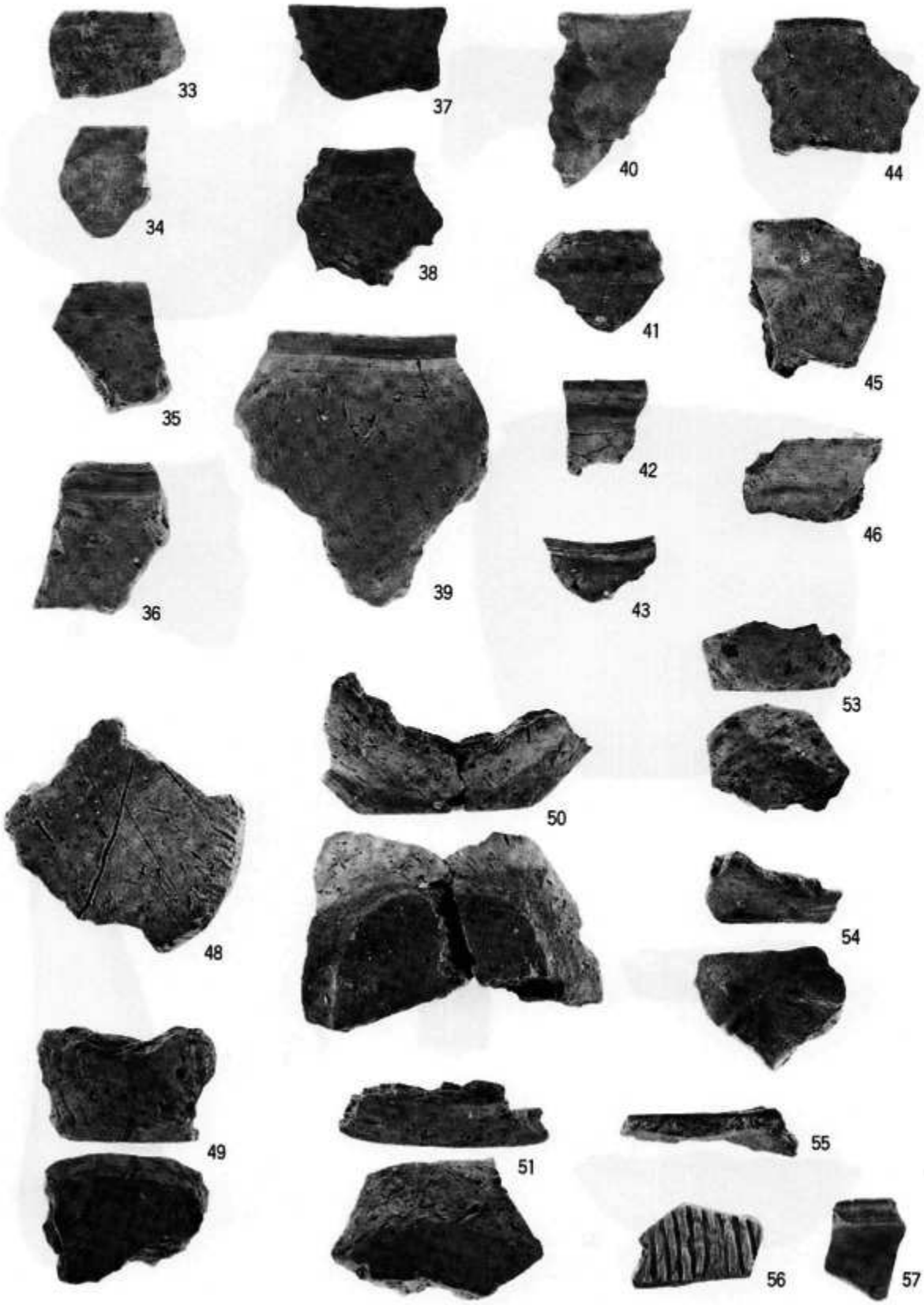
22

25

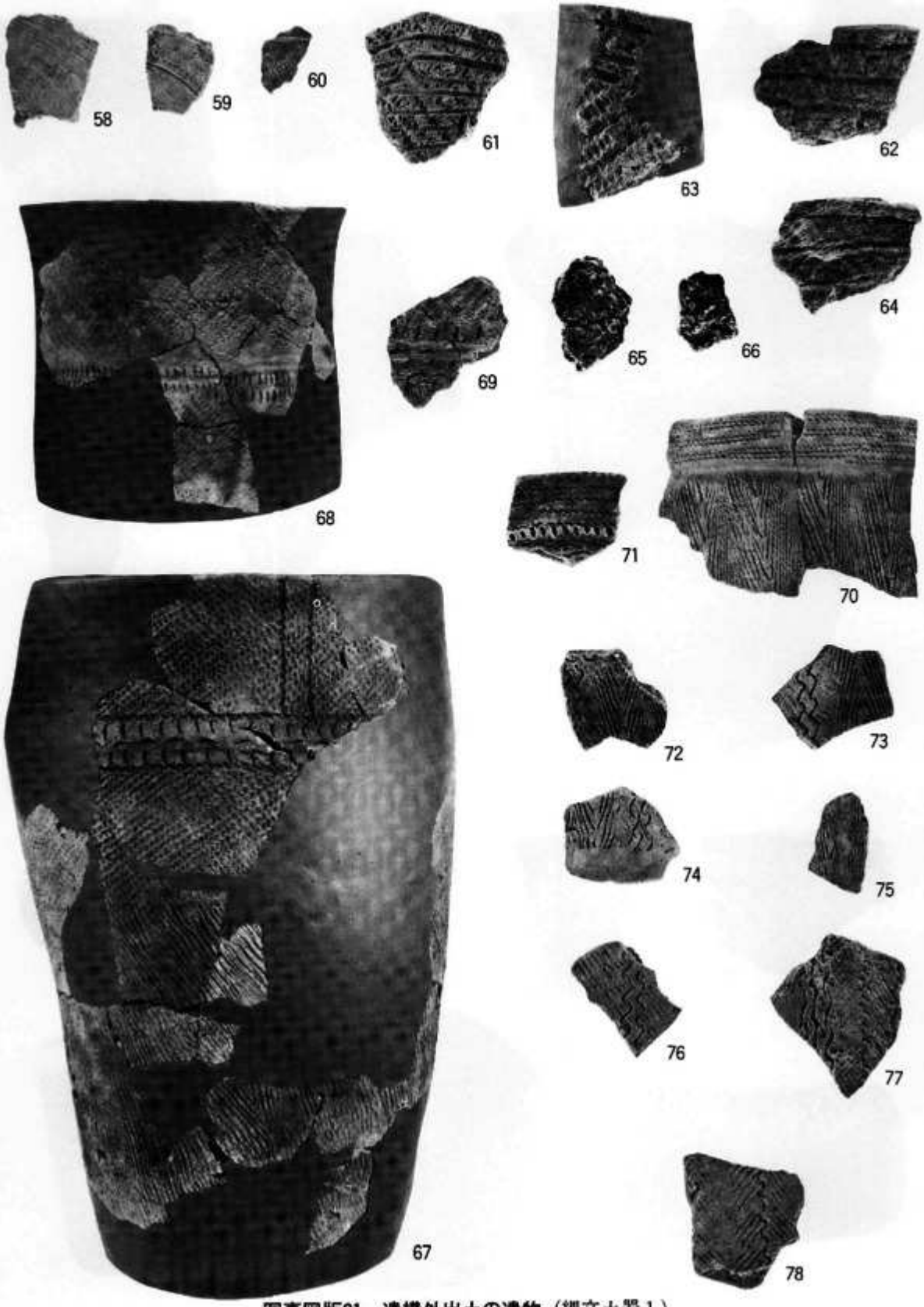
24

写真図版18　ＩＪ７竪穴住居跡出土遺物

写真図版19　ＩＪ７竪穴住居跡出土遺物

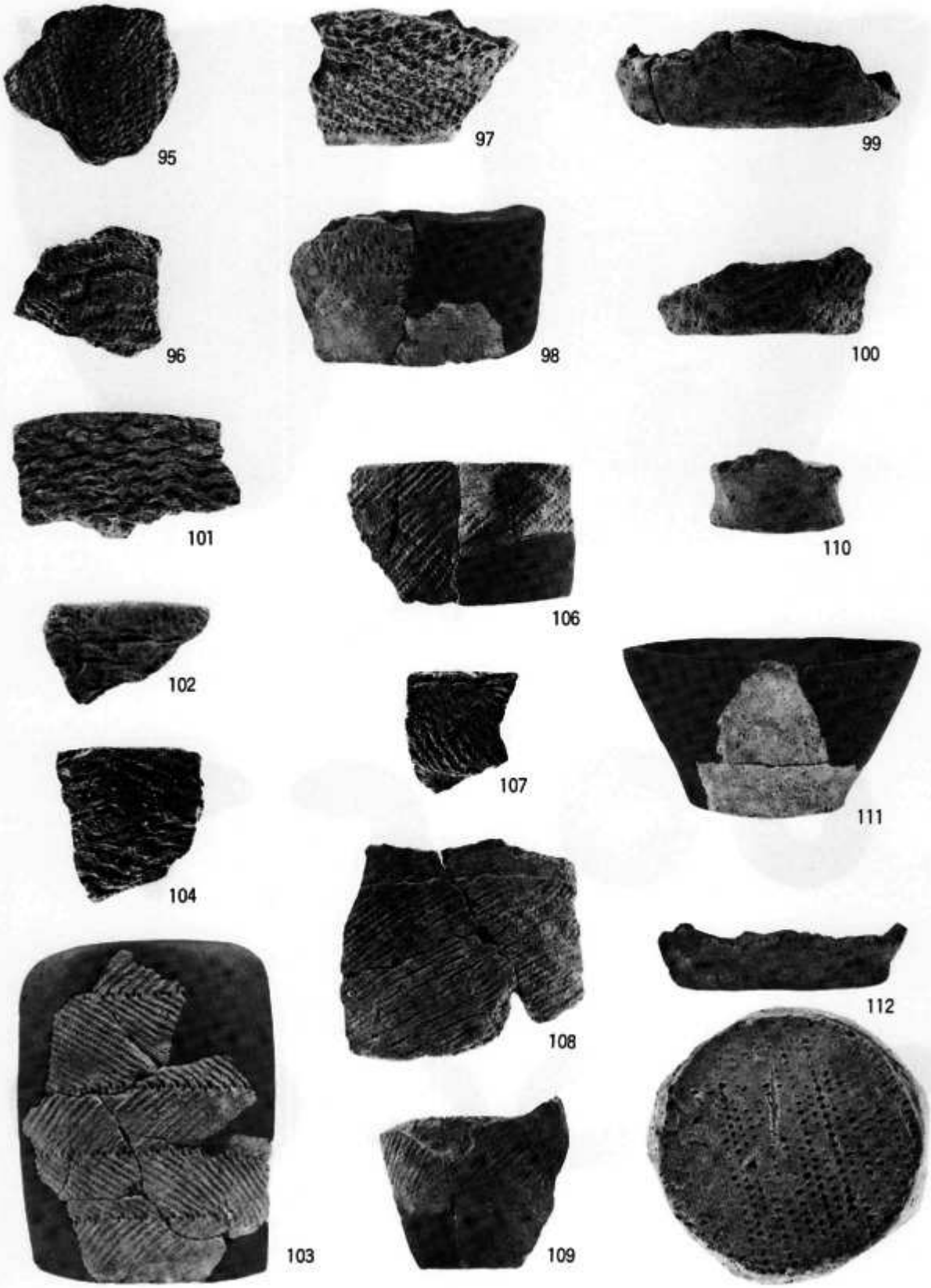


写真図版20　遺構外出土の遺物（土師器・須恵器）

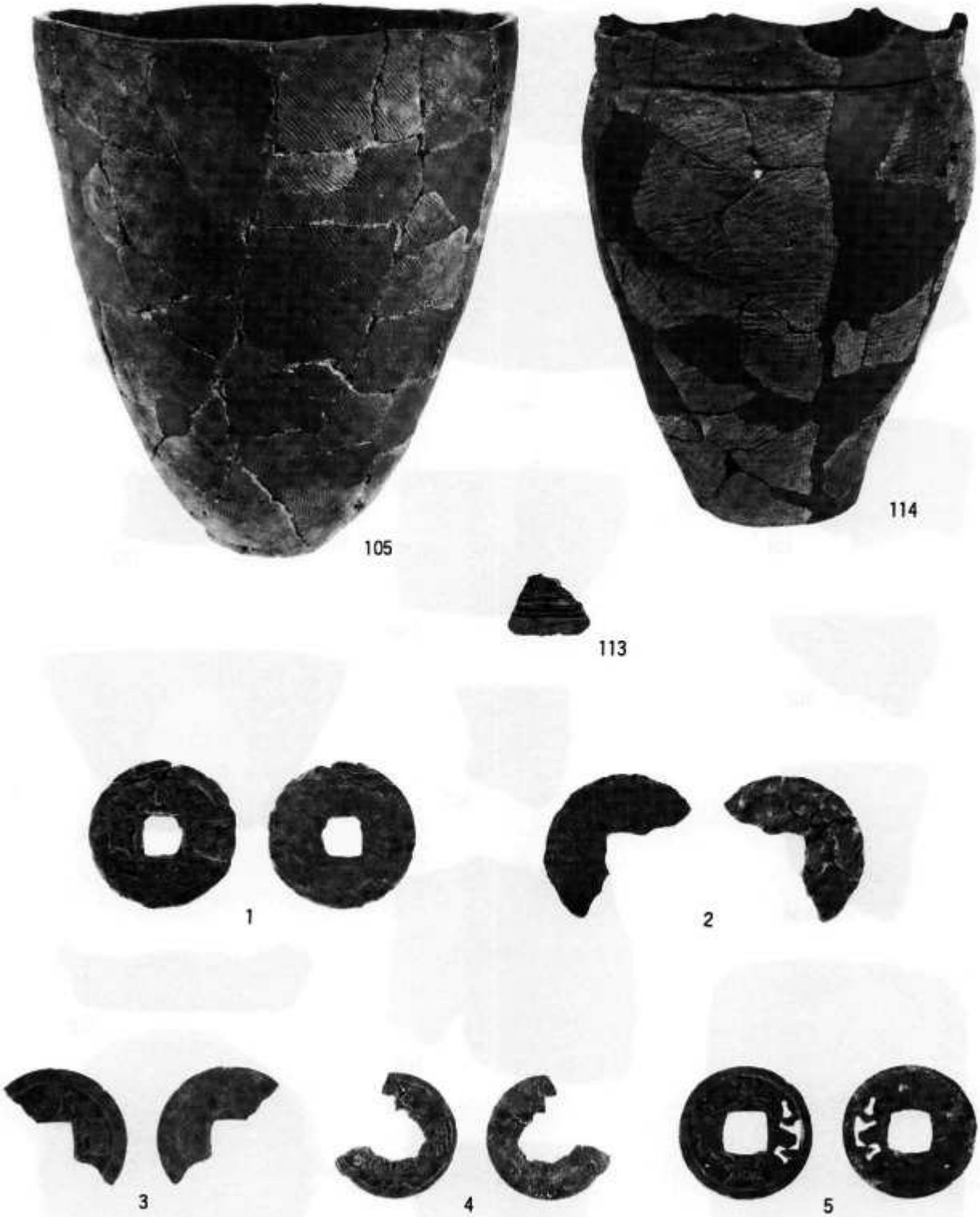


写真図版21　遺構外出土の遺物（縄文土器１）

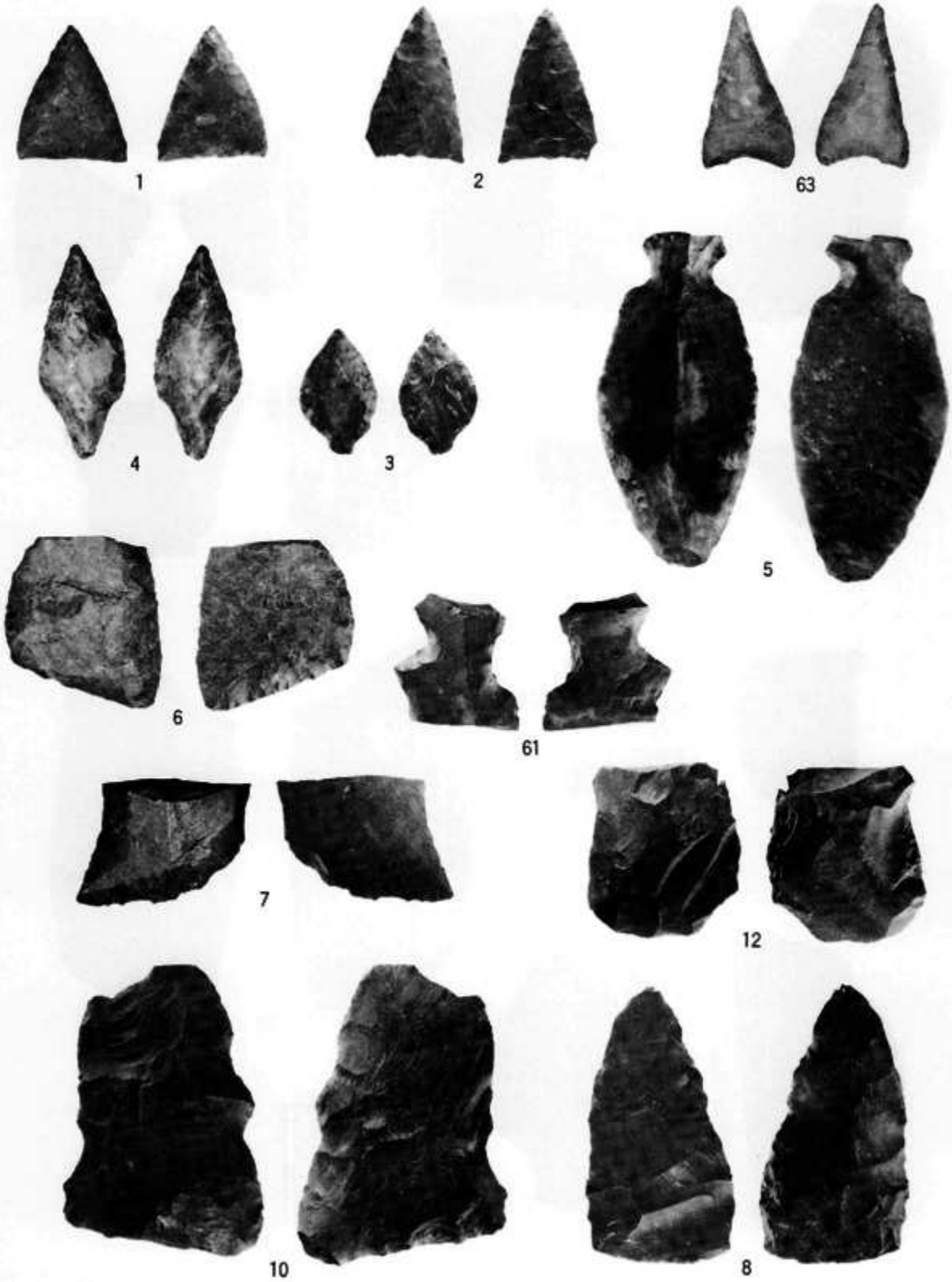
写真図版22　遺構外出土の遺物（縄文土器２）



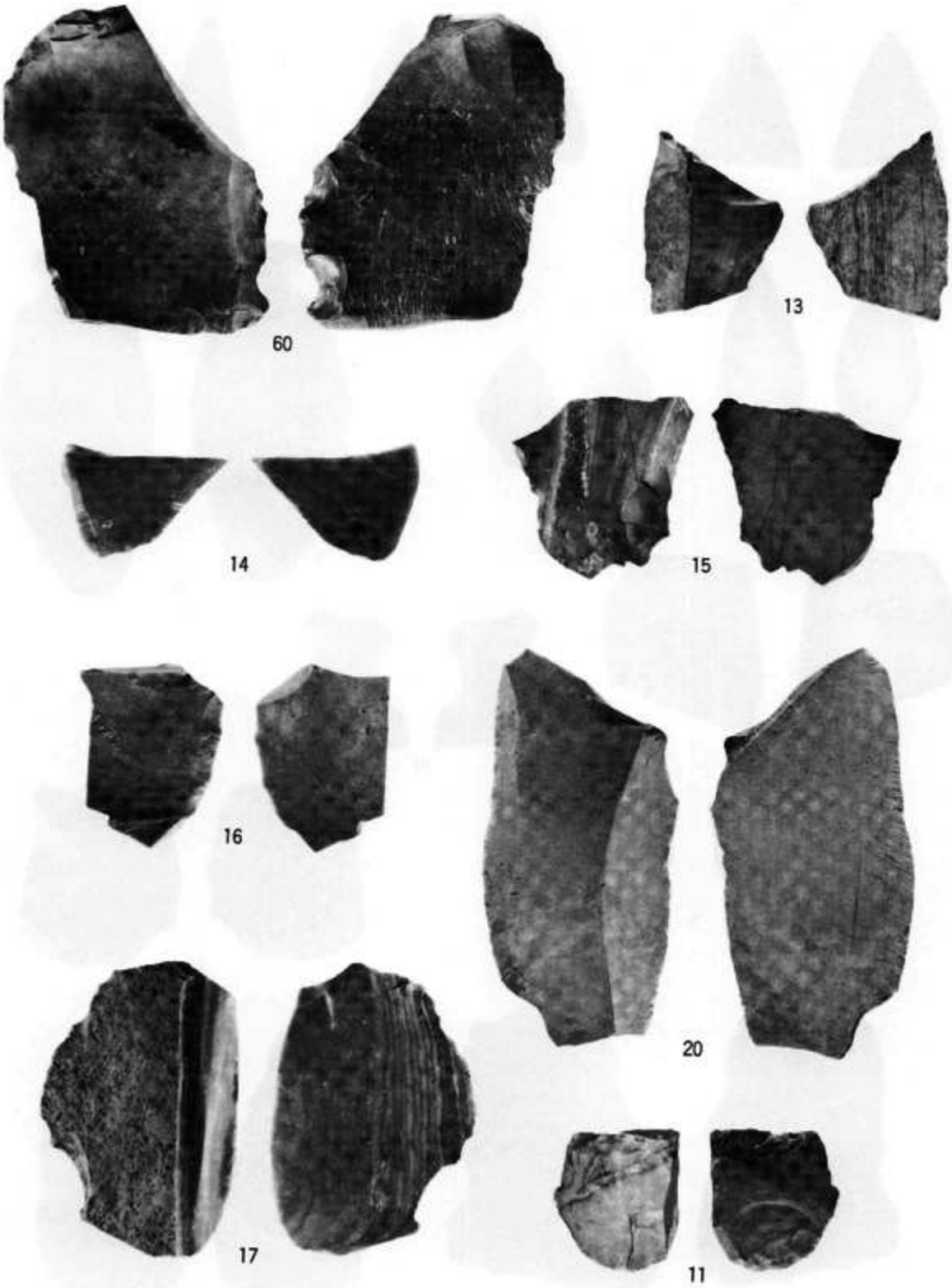
写真図版23　遺構外出土の遺物（縄文土器３）



写真図版24　遺構外出土の遺物（縄文土器４・古銭）

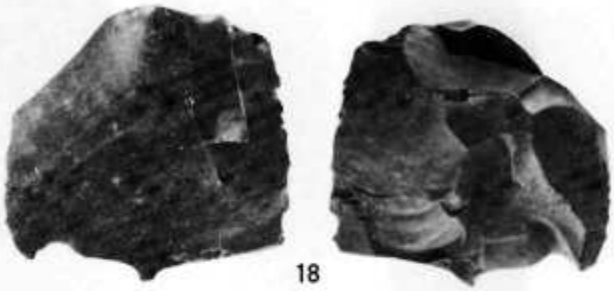


写真図版25　遺構外出土の遺物（石器１）

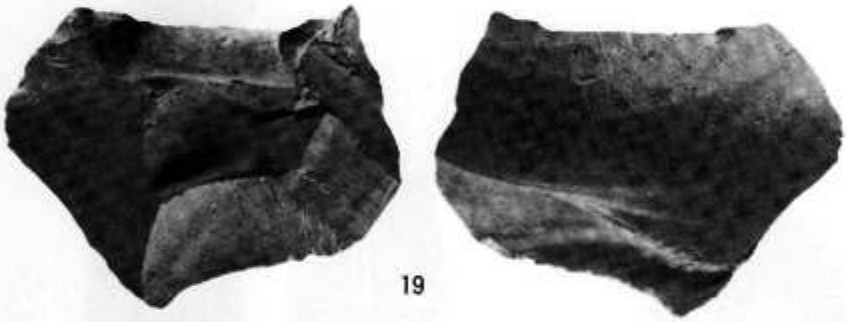


写真図版26　遺構外出土の遺物（石器２）

21

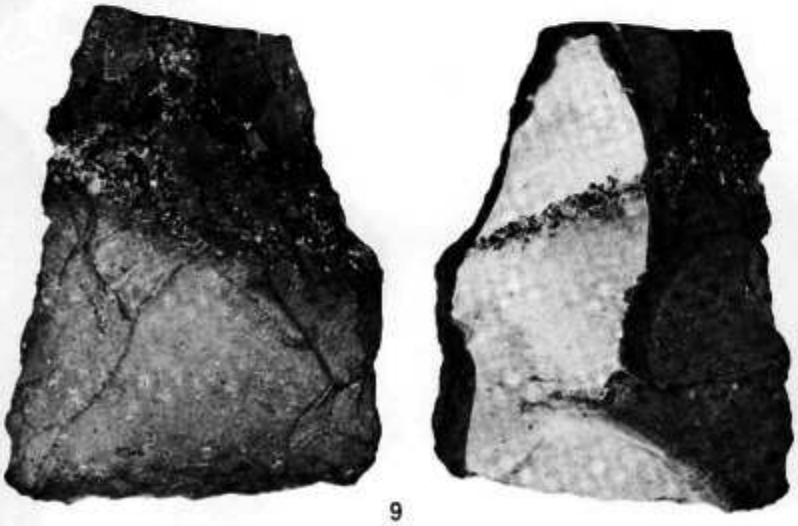


18



19

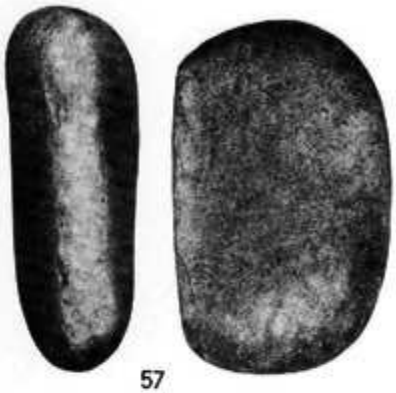
62



9

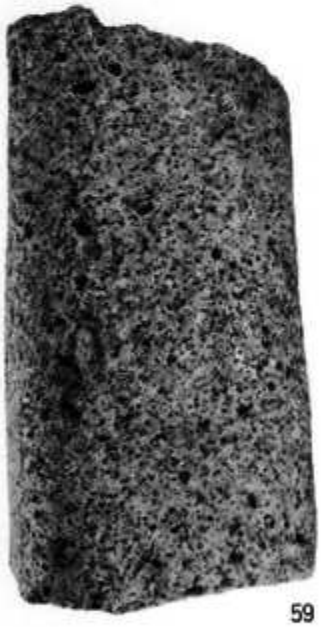
写真図版27　遺構外出土の遺物（石器３）

写真図版28　遺構外出土の遺物（石器４）



57

58



59

53

49

写真図版29　遺構外出土の遺物（石器５）

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	及川昌二
副所長	宮英一

〔管理課〕

課長	千葉久夫
課長補佐	阿部詔夫
主事	立花多加志
運転技士兼技能員	佐藤春男

〔調査課〕

課長	昆野靖
主任文化財専門調査員	工藤利幸
〃	高橋与右ェ門
文化財専門調査員	菊池利和
〃	渡辺洋一
〃	田頴寿夫
〃	佐々木嘉直
〃	平井進
〃	中村良一
〃	田村壮一
〃	光井文行
〃	玉川英喜
〃	石川長喜
〃	中川重紀
〃	高橋義介
〃	酒井宗孝

〔資料課〕

課長	名須川滋男
主任文化財専門調査員	三浦謙一
文化財専門調査員	佐々木清文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第105集

田余内Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷　昭和61年7月25日
発行　昭和61年7月30日

発　行　財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　紫波郡都南村大字下飯岡11-185
電　話　(0196) 38−9001〜2

印　刷　株式会社　熊　谷　印　刷
〒020　盛岡市上田一丁目6番49号
電　話　(0196) 53−4151

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986